

834-18

野口保興著



地理學  
探檢  
論

東京  
目黒書店  
成美堂書店  
合梓

明治  
43.10.28  
内交

8

地理 汎論 探檢と地理學

例言

- 一 本書は地理汎論(Géographie générale)の根底たるべき地理探檢(Explorations géographiques)と地理學(Science géographique)とに就きて大要を記述したるものなり。
- 一 本書は書名が明示するが如く探檢と地理學との二編より成れり。
- 一 本書に於て探檢を記述するには探檢の事業を経とし探檢の實行者即探檢者を緯とし地理學を記述するには地理學の進化成立を経とし斯學に盡瘁せるもの即地理學者を緯とするの例に依れり。

一 本書に於て探檢の沿革、地理學の進化を序述するに當り上古、中世、近代の時代別を設けしも、史學上に於て普通に行はるる例に依りたるに非ず、蓋し地理學の歴史には特殊の事情の存するものあればなり。

一 探檢を記述するに當り總説と各説との別を設け總説に於ては探檢史の大要を説きて探檢事業の盛衰遷移に關し梗概を知らしめんと試み、各説に於てはヨーロッパ、アジア、アメリカ、オセアニア、アフリカ、兩極地域、海洋の七項に分ち、最近時代に於ける探檢に重きを置き、事業の複雑にして困難多きも亦効果に偉大なるものあるを知らしめんと期せり、殊に學術的探査研究は着實にして献身的たるべきものなる

も亦自、高尚なる趣味を含蓄せる所以を了らしめんと期せり。

一 本書挿入地圖の不備なるは著者の遺憾とする所なりと雖、亦一冊子の如何とも爲し能ふべきに非ず、左に掲ぐる精圖を參照するの要あり。

The XX<sup>th</sup> Century Citizens' Atlas.—J. G. Bartholomew.

Andres Handatlas.—A. Seibel.

Sieters Handatlas.—Justus Perthes.

Atlas de Géographie Moderne.—F. Schnader, etc.

一 本書の挿入圖畫も亦頗、僅少にして要求の一部をも充たし得ざるは勿論なれども本書の參考用たるべき圖畫の一斑を示さんと試みたるに過ぎず。

一 本書を編纂するに當り參考したる書籍に就きて

主要なるものを掲ぐれば次の如し。

Evolution de la Terre et de l'Homme	G. Lespagnol
La Terre	P. Cameda d'Almeida
Dictionnaire de Géographie	Vivien de St. Martin.
Dictionnaire d' Histoire et de Géographie	Grégoire et Wahl
Dictionnaire de Géographie	A. Demangeon
Nouveau Larousse Illustré	Larousse et C <sup>ie</sup>
Revue encyclopédique	Larousse et C <sup>ie</sup>
Annales de Géographie	Vidal de la Blache, etc.
Années cartographiques	F. Schrader,
Atlas général des grands explorateurs	E. Plon
The story of geographical discovery	J. Jacob.
Allgemeine Länderkunde	Sievers, Hahn, etc.
Geographen Kalender	Justus Perthes.

# 地理 探検と地理學目次

緒言.....一頁

## 第一編 探検

甲 總説.....	三
第一 上古.....	三
第二 中世.....	一七
第三 近代.....	三三
A 前期.....	三三
B 後期.....	五八
乙 各説.....	六七
第一 ヨーロッパ洲.....	六七
アルプ山脈.....	七三
ラホニア.....	七三

地中海……………七四  
 住民……………七八  
 イスラント……………七六

第二 アジア洲……………七九

日本……………八七  
 朝鮮……………九三  
 滿洲……………九六  
 漢土……………九九  
 新羅……………一〇六  
 蒙古……………一〇三  
 西藏……………一一一  
 印度支那……………一一九  
 マミル……………一一八  
 印度……………一二七  
 マライ群島……………一二三  
 アラビア……………一三三  
 イラン高原……………一三一  
 コーカシア……………一三九  
 前アジア……………一三五  
 シベリア……………一四四  
 中央アジア……………一四〇

第三 アメリカ洲……………一四七

A 北アメリカ……………一四七  
 カナダ……………一五四  
 アラスカ……………一五九  
 合衆國……………一六三  
 メキシコ……………一六九  
 中央アメリカ……………一七一  
 アンチル……………一七三  
 B 南アメリカ……………一七五

ブラジル……………一七九  
 ラブラタ……………一八四  
 ナレー、アルヘンチナ……………一八九  
 ヘル、ボリビア……………一九〇  
 エクアドル、コロンビア、ペネズエラ……………一九三  
 グイヤナ……………一九五

第四 オセアニア洲……………一九八

A 海上探検……………一九八  
 B 陸上探検……………二一〇

大陸部……………二一〇  
 島嶼部……………二二〇

第五 アフリカ洲……………二二八

A 暗黒時代……………二二八  
 B 探検時代……………二三三

第一期……………二三四  
 第二期……………二三六  
 第三期……………二三九  
 第四期……………二四六  
 第五期……………二四九  
 第二十世期……………二五八

第六 兩極地域……………二八七

A 北極方面……………二八七  
 B 南極方面……………二八七  
 北四通路……………二八七  
 北東通路……………二九六

北極到達……………三〇〇 極北陸地……………三〇七

B 南極方面……………三一六

極南探検……………三一七 極南陸地……………三二八

第七 海洋……………三三七

結論……………三四七

**第二編 地理學**

甲 地理學の進化……………三五一

第一 上古……………三五二

地理書……………三五七 地圖……………三五九

第二 中世……………三六五

ホルネウラン……………三六七 書籍……………三七〇

アラビア派の地理學者……………三七二

第三 近代……………三七四

地理書……………三八二 地圖……………三八三

近世地理學……………三八八

乙 地理學の範圍……………三九四

地理學の定義……………三九四 地理學の區分……………三九五

丙 地理學と他の科學との關係……………三九九

結論……………四〇五

地理探検と地理學挿圖及挿畫目次

挿圖

エラトステネスの世界圖……………二一三頁  
 ストラボンの世界圖……………一四一―一五〇頁  
 プトレマイオスの世界圖……………二二一―二三三頁  
 ポセアニア洲の主要探検旅程……………二〇四―二〇五頁  
 北西通路の探求に關する主要旅程……………二八六―二八七頁  
 北極と南極……………三一六―三一七頁

挿畫

第一圖 クリストフコロロンボ マレンツの船……………三八頁  
 マスコダガマ……………三九頁  
 第二圖 氷山の流致(バフィン海)……………五〇頁  
 ヘンリエタネスミス氷河[グラントランド]……………五一頁  
 マガリアエンス、シエームス、ロズ……………六〇頁  
 シエームス、クック、ヤウモン、ヤウルアイユ……………六一頁  
 第三圖 八月二十日の慘劇……………七二頁  
 第四圖 シベリア種の來用犬……………七三頁  
 スフェンヘザン……………八六頁  
 第五圖 アルツェワルスギ……………八七頁

第六圖	ゴビ高原……………	九六
	ロブノル湖……………	九七
第七圖	タイグラマーカーンの砂丘……………	一〇六
	アライ谿谷の積雪……………	一〇七
第八圖	「イッルト」(幕屋)「蒙古」……………	一一二
	村落の一隅(チベット)……………	一一三
第九圖	サルタゴルゲレラの森林……………	一七八
	アレグサンデルフンボット……………	一七九
第十圖	アコンカグア山麓……………	一九〇
	東水道(チエラヤルノヤ)……………	一九一
第十一圖	スクラア……………	二一六
	スピニフエクス……………	二二七
第十二圖	スタンリーノルデンシールド……………	二四四
	リフンアストンナンゼン……………	二四五
第十三圖	砂泥の剝裂と商賈隊(ロビマ沙漠)……………	二五二
	草原と運搬隊(東アフリカ)……………	二五三
第十四圖	廊林(西アフリカ)……………	二六二
	疎林(東アフリカ)……………	二六三
第十五圖	イエララの瀑流……………	二七六
	ビクトリア湖畔……………	二七七
第十六圖	ケールン(Cain)の発見……………	二九四
	麝香牛(Oribos moschatus)……………	二九五

第十七圖	「ナイゲルベルヒ」(ヤンマイイエン島)……………	三〇六
	アドアメント湖の旅館(スピツヘルゲン)……………	三〇七
第十八圖	エレアス火山(ビクトリアランド)……………	三二八
	テールアテリーの発見(一八三八)……………	三二九
第十九圖	橋行難(其一)……………	三二八
	橋行難(其二)……………	三二九



地理探檢と地理學

野口保興著

緒言

學識は見聞に據り又は思考に基づきて蒐集せられたる知識を一定の規準に則りて整理統合したるものなり、地理的知識が多くの他の學識の如く未だ完全なる位域に到達せざるは勿論なりと雖、往古より傳來したると近時に於て獲得したるとを問はず、苟、地理に關係ある知識は之を網羅し之を整理したるが故に其の結果として近世地理學(Science géographique moderne)の現出を觀るに至りたるなり、然るに古來行はれし學說に就きては斯學の進화에資するあり、障礙たるあり、真理として生存するあり、誤謬として滅亡せし

近世地理學

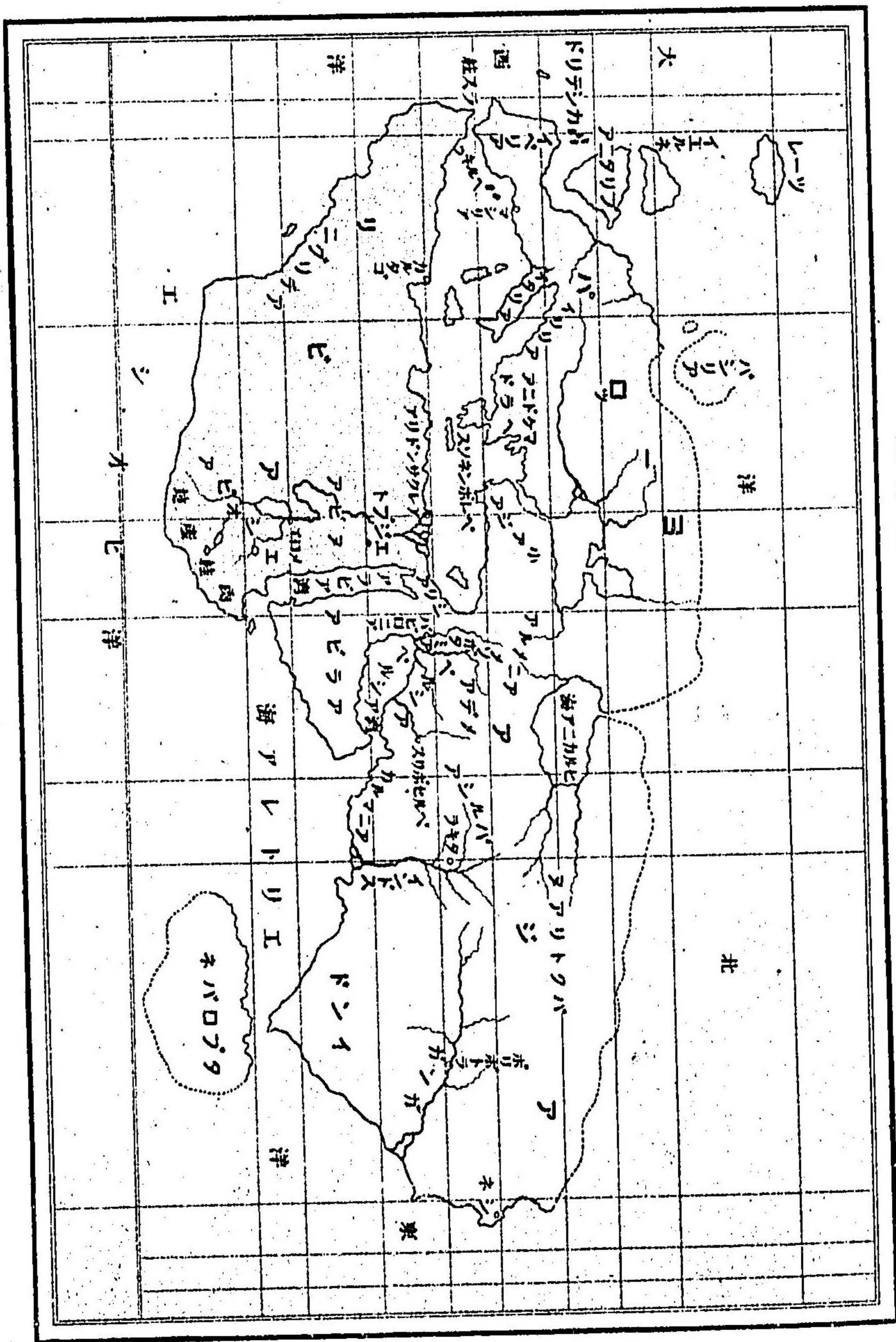
探檢と地理學

あり、眞偽の決定なくして生死の判然せざるあり、而して知識獲得の範圍を察し若しくは斯學發達の徑路を觀するに緩急常なく、伸縮定まらず、一進一退、勃興頓挫、長期の睡眠に繼ぐに突然の覺醒を以てするあり、永年の傳説を捨てて嶄新の事實を採用するあり、利慾、名譽、冒險、好奇等の如き個人的の誘致あり、經濟、政治、宗教、學術等の如き時代の要求あり、されば事實の探査、事由の研究等に盡瘁して我が地球の現情を知悉せしめんとせしもの眞價を認めんと欲せば、地理的探檢の梗概及地理學發達の大要に就きて了る所なかるべからず。

### 第一編 地理探檢

吾人の住處としての地球は今日に於て既に多くの秘密を有せず、吾人の活動場としての世界に關しては既に其の概要を了知せり、斯る結果は一朝一夕に得たるに非ず、長き年月を費し勤勉と忍耐との功を積みて茲に至れるなり、而して此の偉業に参加したる種族國民甚多く悉く枚舉するに遑あら

圖 世界の新地圖



ざれども時代と地方とに依りて其の質其の趣を異にし而も其の奏功に至りては千差萬別ありて存す蓋し何處の住民たりと雖、苟、幾分の文化に浴せんか、進運上多少の見るべきあらんか、各自其の住域に關する事情を詳にせんと希ふは自然の傾向なり、或は好奇心に駆られ、名譽心に誘はれて四隣の地を跋涉探明せんと試みるあり、或は商路を得んと欲し、領土を攻略せんと謀り、道を傳へ、學を研かんとするありて未知の地域を踏査探檢するの動機は現はるるなり、且又吾人が地球上に暗黒界の存するを厭ひ之が全滅を期し併はせて地理學の進歩發達を企圖するは實に人智人力の優秀なる活動とや云ふべきか。

## 甲 總說

### 第一 上古

皇紀第八世期以前  
西紀第二世期以前

人類が此の世に現はれ漸次に繁殖して其の數の増加するや、同處に棲息するの生活上に不便なるを悟り、隨處に移住し、各處に散居するに至れるが、

永き年月を經過するに従ひ、地勢、氣候等の如き自然的狀態並に動植物の影響の如き共存的事情の相同じからざるが爲、史前時代に於て既に風俗を異にし文化の一樣ならざる各種民族の鑄造せらるるを見たり、然るに住域の擴張離隔せられたるに比し交通上の利便の之に伴はざりしのみならず、海陸山河、其他周圍の事情益加はりて若干の別世界、幾多の小世界を形成し、各地の住民の間にも優劣差等の生ずるありて強者は弱者を合はせ、勤むる者は怠る者を凌ぎ以て卓絶秀抜の地位を占むるに至ることあるも、盛衰興亡の常ならざるを免れ得ざりき、されば東には漢族が五十世期以前より先住者を驅逐し漸次に南下して建國の實を擧げたるあり、西には古に於て前者より二千年優れるエジプト人を始とし、ヘブライ人、カルデア人、アッシリア人、メデア人、ペルシア人、フニキア人、ギリシア人、ローマ人等の降臨消長するあり、此の外、印度半島に、イタリオン高原に、ステップ方面に前途有望なる種族の存するありき、然れども地理學上より見るときは上古の民族中ギリシア人の右に出づるものなし、蓋し彼等は屈曲に富める海岸に據り、明天好風の下に

航行を試みて海上生活の快を覺え、島嶼山河の妙、地震、火山等の不思議なる現象は彼等の注意を促せしが、資性好奇心に富み、想像力、觀察力を備へ、不撓不屈、克事由を究め而も趣味多方面に亘りて偏狹ならず、實に彼等は自然の寵兒にして地理學を創始せるも亦故なきに非ず、加之獲得採取したる研究の結果を他人に與ふるに吝ならざる美德を有せり。

漢族は今を距ること五千年の昔、北西の方より黄河の沿岸に來侵し、先住者たる苗族を漸次に南方に驅逐して揚子江の灌域に到りしが、各處に起れる部落は黄帝の統一する所と成りて始めて建國の實舉り、五帝を経て文物制度稍備はりたり、大禹が治水の功を奏し四方を經營したるは地理學上に觀るべきものありて存す、夏約四百五十年間、殷約六百五十年間を過ぎて周に至り封建の制布かれ、官制、田制、兵制、學制等定められ文化大に進みたり、然るに戎狄の侵入ありて周室の東遷（紀前一一〇年頃）するや春秋の世約三百年間と成り、尊王攘夷に依りて天下に號令したる五霸の出づるを見、戰國時代（約二百年間）に及びて天下の秩序紊亂せしも思想言論は自由を得、立身

張翥

司馬遷

班超

榮達の途開けし爲、各派の學術蔚然として起り、孔老を始とし百家の輩出あるを觀たり、秦の天下を統一するや、皇紀四四〇年内には中央集權の制を布き、阿房宮を營み長城を修築し、外には匈奴を撃ち南越を征し、版圖擴まり國威揚りて秦の名震旦は西域にまで響き亘るに至りたり、其の後漢の武帝皇紀五二〇—五七三は外には南越の回復、朝鮮の攻畧を行ひ、匈奴を討ち西域皇紀前一四〇—一八七を招致せしが、殊に張翥を中央アジアに派遣して西方文物を齎來せしめたり、而して内には儒學を保護し文學を獎勵せしを以て大儒名家の現出あり、司馬遷の如きは地理學に貢獻せし所益、尠少ならざりしが如し、而して東漢の明帝西紀五七—七六は當時大乘教の中心たりし大月氏に蔡愔を遣して佛法を求め、章帝西紀七六—八九の世、班超は西域諸國を招撫し和帝西紀八九—一〇三の時に西域都護と成り、部將甘英をして大秦羅馬の事情を探らしめんと試みたり、其の後桓帝の代西紀一四六—一六三に大秦が使節を遣して南方より東漢に通せしに依り、支那の商船も亦錫蘭島附近に赴きて交易を營みたれば東西の交通頗盛なりき。

印度人即ヒンズー(Hindus)は混成の民なり、約四千年前イラーン高原より漸次に南下して印度河を越え恒河の流域に到れるアーリア(Arya)種族の一派が世界最古國の一たる印度地方に於て先住者たるネグロイトス(Negritos)ドラビド(Dravid)人、コリア(Kolias)人、蒙古人等を驅逐若しくは之等に混同し次第に繁殖して隨處に部落を設け酋長を戴きしを以て混成の度合一様ならざるが、之に職業若しくは貴賤の思想加はりて幾多の種姓を生ぜし、婆羅門(僧族)刹帝利(武族)吠舍(平族)首陀(奴族)の四階級に分つを普通とす、されば優秀なる婆羅門が哲學を修め曆學、數學、醫學等の學術を創め、言語を研き詩文を耕すの妙趣を感じし、尊大、自負の念に驅られ、種、暴威を振ひて他の種姓に臨み、天下を統一するが如き卓絶高尙なる思想を有せざりき、されば、釋迦の本名四世紀前には武族より出でて無常を觀じ佛陀大覺と成りて宗教及社會の大革新を試みたり、而して、ハルシヤ王ダリオスの兵を受け、ギリシアのマケドニア王アレクサンドルの來侵ありたる後、首陀族より起りたるチャンドラガプタは北、中、西の三印度に亘る領土に君臨し、四世紀前其の孫阿育王(阿輸迦)(Asoka-Piyadasi) 前三世は深く佛教に歸依し四方に傳教せしめられたるは、ハットリヤより南は獅子國、錫蘭に到り東は馬來半島に達せりと云ふ。

エジプト(Aegyptus)人は四世紀前五千年の頃より世に現はれし、東は海に限られ西に沙漠を控ゆるニール下流の氾濫區に屬する、肥沃の地に據れるを以て生活容易にして戦亂の憂少なく、安穩の中に文化の光輝を放つに至り、測地の術、土木の業、等

には大に見るべきしのあるに拘らず、領土の擴張に熱中せず、中流以下の狭長なる  
瀆域並に其の四近の地を緩慢に又は間接に探査するに過ぎざりき。

ヘブライ(Hebraei)人は世界最古の國民なりと稱せらるるもシリアの一隅に據り、  
ニールとメソポタミアの兩勢力の間に介在せしを以て四隣に威を振ふが如きは  
素より不可能なりき、されば地理的知識に就きて貢獻する所少なりしも特殊の  
法典に基づける宗教上の關係に偉大なるものありて人類の運命に優越なる影響  
を及ぼしたり。

カルデア(Chaldae)人は一にバビロニア(Babylonia)人と稱せられ、或はコーカシア地  
方の原産なりとし或はセム派に屬せりとす、四紀前二十世期の頃よりメソポタミ  
アの下流方面に居を占めたり、廣漠たる平野と晴明なる天空との然らしむるにや  
夙に天文に長じ十二宮(Zodiac)を創造し、一年を三百六十五日六時十一分と測定し、  
月の運行、日月蝕、彗星の研究等に盡精したり。

フニキア(Phoenicia)人はアラビアの東岸並にパーレン島の原産にしてセ  
ム派に屬せり、西紀前二千二百年頃、東地中海の沿岸シリアに來住してシド  
ン(Sidon)、チール(Tyr)等を経て西地中海方面にはガデル(Gadir) 現時のカザスカル  
タク(Carthage) 前九世等を設けて盛に通商に従事し又天文を航行術に適用し、

ハンノ  
ヒミルコ

商業簿記、度量衡器を創始し、アルファベットを改良して當時の各民族間に於け  
る仲介者たるの任を盡したり、加之ハンノ(Hanno) 四紀前五世期の終りに於ける  
 カルタゴの將軍にしてマグル  
 アの海岸に殖民地を定め、シエ ヒミルコ(Himilco) 前代にローマの四岸を  
 ソレオネの地まで進行せし人 探明したる後、北海方面に赴きし人  
の探検家を出だし、エジプト王ネロ(Necho)の命に依りてアフリカの周航(西  
紀前六百年頃?)を遂げたるものありと傳へらる、されば彼等の見聞には價  
値多きものあるべきなれども、偏狹にして嫉妬深く所謂商人根性に駆られ  
利己主義に汲々として新事實の發見を秘密に附せんと勤め、返りて蜚語誕  
說 大西洋は濤霧多く海流強く航行極めて困難なり、西地中海には難島多く海究樓めりを流布して自明他暗を支持せし  
が爲、地理學上に資すること多からざりき。

ギリシア(Graecia) ローマ的稱呼人はヘルレン(Hellen)の子孫としてヘルラド(Hellade)  
人と自稱す、アリア派に屬すと認めらるるが、西紀前十六五世期の頃バル  
カン半島の南部に來移したる後、地中海沿岸の各處に殖民地を相せしもの  
の如し、世界に於ける最惠最幸の種族の一としては體格優れ智力膽力之に  
叶ひ、各方面に活動して倦むことなく、爲政の法に通じて各種の政體を案出

し、宗教の妙を求めて經義に拘泥せず、哲學を研鑽して事物存在の理を明にせんと試み、詩文を好みて言語を優越の域に進ましめ、美術に熱衷して建築彫刻の範を後世に垂る、實に彼等の雅量ありて而も親切なる、智識の擴張に資せしこと偉大なるものありて存す、茲に彼等の事業の一斑を記さんにする  
 ヲア(Phoen) 現時のカラウヤ、ガキア(Karadja)の地に於て小アジアにあり  
 シリア(Massilia) 現時のマルセイユを建て、ミレナウ(Milinau) カリブ人の創建に 係る舊都にしてイ  
カニア人の來住(前十一世) 期後盛大を極む(前八世期) の人は黒海方面に活動してイヌタル(Inster) 即、ドナ  
 少河、スキチア(Sythia)等を探査し、商隊に依りてバルト海方面の事情を聞知したり、又旅行者も少なからざりしが、案針コレオス(Colias)は東風の追手に乗りて始めてヘルキュラス(Hercules)柱 今のツプワを越え、四紀前六、 ハカテオス(Hekateos) イヌール又はケルトの地を探明し、五紀前 スキラックス(Seylax)はヘルシアの皇帝ダリオスの命に依りインドス河を下たり、河口より紅海までの海岸を探検したり、又ヘロドタス(Herodotus) 前四八四は好奇心に富み、觀察力に豊にして、 メレナイオン(Mermaid) 現時のマニシント、ニギア、パピロニア、黒海

コレオス

ハカテオス

スキラックス

ヘロドタス

クセノフォ

アレクサン  
ドルの遠征

ネアルコス

メガステネ  
ス

ピテアス

エゲア海、シチリア、南イタリア等の地に往來して大旅行を遂げ、見聞せし所を畫に筆して當代の地理的智識を統合したり、爾來數百年を経てアレクサンドル(Alexandros)の遠征に至るまでの間には著しき進歩を觀ざりしが、クセノフォ(Xenophon) 前四四五が一萬の兵を率ひてチグリス河畔より黒海の沿岸まで退却せし一事は記憶に存すべきものと認めらる、而して地理學に資せし點に於て重要視すべきアレクサンドルの遠征 前三三六は北の方イアクサルト(Laxart) 即、現時のシル河に限られ、東はインドス河を越え、其の支流 ヒフアース(Hyphas)河まで進みたるが、裨將ネアルコス(Nearkos)に依りてインドスの河口よりヘルシア灣の底端に至る沿岸は探検せらる、斯くしてギリシア人は高岳、沙漠、印度の降雨、未知の動植物等に就きて新智識を獲取するを得たり、其後メガステネス(Megasthenes)は印度に使用してパタリプトラ(Pataliputra) 即ちパトナを訪ひ、波羅門徒の文化を調査し、又スキチアの北境は氷海に瀕すと爲せり、加之前三三三〇年の頃、マシリアのギリシア人ピテアス(Pytheas)は北海を探検し、ブリタニアに沿ひて北上し、オークニーにまで到達し、奇島ツ

ン(Nile)恐らくはイに就きて傳聞する所ありき、然るに大西洋に就きてはギリシア人の智識極めて混沌たりしが、プラトール(Plato)はアトランチード(Atlantide)大陸の存在を疑ひ、アリストテレス(Aristoteles)はヘルキュラス柱と印度の東岸との間は數日にて航達すべしと爲したり、又前三百三十二年の創建に係るエジプトのアレクサンドリアは學識の淵藪と成りて地理の發達を圖り、探檢旅行の發起點たりしが、キレネ(Cyrene)産のエラトステネス(Eratosthenes)前二七六―一七二は南及南東の方面に關する當時の地理的進歩を紹介したり、蓋し商業上の取引はグアルダフイ岬以北のアフリカ岸並にアラビア灣の沿岸を確知せしめしのみならず、エシオピアを始としエジプトの大河の源流たる白ニール、青ニールに就きて梗概を了得し、ニールの水源には大湖高岳の存在を傳聞し、知識の南界は肉桂國(現時のマレー)たりき。

エラトステネス(Eratosthenes)は西紀前二百五十年頃の人にしてアレクサンドリアの圖書館長たり、千午緯一度弧の長さを測りて地球の大きさを決定せんと試み、ゲセアルコスの著書に修正を加へ地圖を作れり、温帯の情態を明にして住域の範圍を擴め、熱帯の不可住的ならざる所以を説き、ニールの源流を疑ひて増水を赤道地方の

エラトステ  
ネス

降水に歸したり、要するに事實の記述に加ふるに學理的説明を以てせんと試みたるエラトステネスは單に記載に止まれるストラボンと學理に偏したるプトレマイオスとを兼ねる點に於ては上古唯一人なりとす。

ローマ(Rome)人は領土の擴張を目的として攻畧的遠征を各方面に向ひて企圖せしが、行政上の便宜を得んが爲、地理的視察の之に伴ひしを以てローマの北部并に北西部を始とし、其の他ドナウ、キスチッラ等の方面をも世に紹介したり、又エジプトの主權者西紀前二九年)としてはニッピア地方に侵入し、皇帝ネロンの命に依りニールの源流調査として廣漠なる浮草の沼地恐らくはニール、エルカザル(Bahr el Ghazal)ならんに到達せしものあり、コルネリウスバルビッス(Cornelius Balbus)は前十九年に於てファザニア(Phazania)現時のフエザンを踏査してセプチミウスフラックス(Sepimus Flaccus)及ジュリウスマテルヌス(Julius Maternus)のヌーダン探檢を促し、スエトニウス、パウルリヌス(Suetonius Paulinus)は西紀三十七年に於てアトラス山地を越えてジール(Ghir)地方に赴きたり、斯くしてローマ人はギリシア人が東方を紹介せし如く北と西とを闡明ならしめ、殊にストラボ

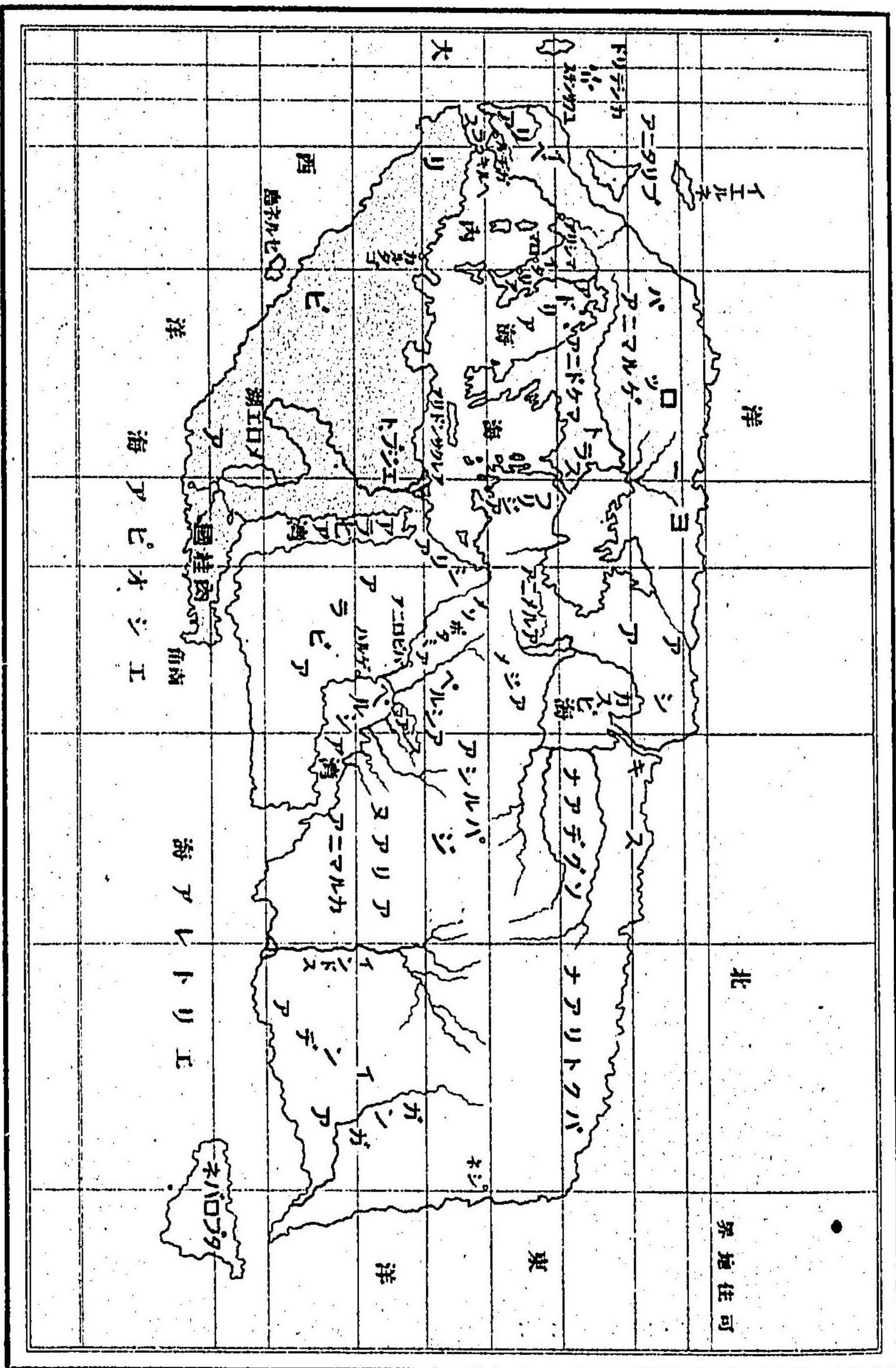
コルネリウ  
ス



ン式の記載的實用地理に關する書籍并に路程案内的地圖の多くを流布したり。

アジアヨーロッパ間の海陸商路 西紀の初期に於けるアレクサンドリアの繁盛には實に偉大なるものありて、商路は各方面に向ひて發展せられ、各種の報文の如きも此の地に集中せらるる姿なりき、又ギリシア人はローマ人と共に疾、よりエリトレア(Erythraea)海印度洋の旧名の航行に親み、アレクサンドリアの一商人の手に成れる「エリトレア航海誌(Periple de la mer Erythraea)」に依りてアフリカの東岸に就きては赤道以南約十五度に達し、メヌキアス(Menuchias)島現時のマダガに到れるを證せられ、又二世期頃の貴重貨物たりし象牙は大湖地方より搬出せられたるが故にニールの水源地方を紹介するの一助たりき、策針ヒッパロス(Hippalos)はマウシン(Mausin)即、季節風が航行上安全にして利便ある動力たる所以を説き、又アレクサンドリアの商人等はタプロバネ(Laprobane)島セイロン島の古名黄金ケルソネソス(Chersonesos)島現時のマダガ等を詳知せしが、二世期頃にはシネヌ(Sines)支那人の一大港たるカッチガラ(Catigara)島現時の廣東府の事情

國界世のンボラトス



をも傳聞せしもの如し、而して一面には絹物の貿易は中アジアの高地にまで、ギリシア人、ローマ人を誘致し、地理學者ストラボン(Strabon)は始めてオクサス(Oxus)と東海との間にシネス即、セールルス(Seres)の存在することを紹介せしが、隊商、使節等の往來するありて交通は漸く開始せられたり、而して當時の通商には三路あり、甲者はエウフラートのヒエラポリス(Hierapolis)カヌビ海及びバクトリアの南を経てカシガリアに赴き、乙者は印度河よりカンラ(Cabura)(Kabul)を経てバクトリアに出でて前者に接續し、丙者は印度を北東に出でてセールルスの都に達せり。

**上古の地理的世界** 上古の終りに於ける地理的世界の境域はストラボンとプトレマイオスとの兩著書に依りて推知するを得るなり。

ストラボン(Strabon)は四紀の初年にアマセア(Amasea)に生れたるギリシア人なり、著書「世界地理」はエラトステネスに據れる所多きも記載を主とし興味を旨としたるを以てローマ人の俗習に叶ひ地理的思想を流布するに與れること尠少なからざりき、されば土地の位置を天測することなく、アリステテレスの高見に依らずして天産を頼り、而して彼の世界全圖はヨーロッパの南部と西部、アジアの南西部、ア

ストラボンの

プロトマイオス

リカの北岸、ニール流域の半を包容し、東境は依然として印度と爲せるもパルティア(Partia)の商人は既にセールス(支那)の名を傳聞し居れりと附記しあり、此の世界圖は第五世期の頃まで増訂せらるることなかりき。

プロトマイオス(Ptolemaios)はアレクサンドリアの天文學者なり、四紀百六十年頃の著作に係れる「地理」は數學的なるを主義とし、國別に依りて主要なる都會の緯度を表記せしものなれども八千に達する場處に就きて經度には正確なるものもなく、緯度には四百有餘の實測數あり、斯の如く實測の結果に據れるもの少なく、且ヒッパルコスの子午周の長を採用せしが爲、地中海を東方二十度伸ばしたるを以てアジア洲の東端とヨーロッパの西端とを大に接近せしめたり、該書に依れば當時の世界は西はフォルチナ島(現時のカナリア群島)より東は南支那に達し、北境はブリタニア北部の島嶼にして南界はスーダン及大湖の地方なりき而して本書には二十七葉の地圖を附録とせるも之を作成したるものはアガトデモン(Agethodemus)なり。

上古に於ける主要なる旅行家に就きて一覽表を作れば左の如し。

年代	方面	旅行家	國籍
西紀前七世期	ヘルキッラス柱を越ゆ	コレオス(Coibos)	ギリシア
同	印度河エリトリア海の沿岸	スキラックス(Syrix)	ギリシア
同	イベール及ケルトを研究す	ヘカテオス(Hecataeus)	ギリシア

同	五世期	アフリカの北西岸	ハンノ(Hanno)	フェニキア
同	五世期	ヨーロッパの北西方面	ヒミルコ(Himilco)	フェニキア
同	五世期	エジプト、バビロニア、小アジア、等	ヘロドタス(Herodotus)	ギリシア
同	四世期	チグリス河畔、黒海沿岸、等	クセノフン(Xenophon)	ギリシア
同	四世期	ヘルシア灣沿岸	ネアルコス(Nearchos)	ギリシア
同	四世期	北西ヨーロッパ	ピテアス(Pytheas)	ギリシア
同	三世期	印度ヘルシア灣	メガステネス(Megasthenes)	ギリシア
同	二世期	西域方面	張騫	漢
同	一世期	フンザニア地方	コルオリウス(Cornelius)	ローマ

第二 中世 皇紀第九世期乃至第二十世期 四紀第三世期乃至第十四世期

西羅馬帝國の終焉を告ぐる頃、ヨーロッパ洲に於けるストーン派種族の侵移は同洲の地理的相形に一大變差を與へたるが、基督教の傳播と相俟ちて混沌たる時代を現出せしめしを以て、新社會の組織が其の緒に就かんにも數世期を要せり、されば地理學の如きもプロトマイオスが誘致したる進運を永く保持するを得ずして、彼の著作の如きも基督教徒の間には無用の長

探検と地理學 總說 中世

アラビヤ人  
ノルトメン

物視せらるるに至れり、蓋し基督教會にありては先覺者若しくは先輩と崇めらるるものと雖、世界の球狀説を妄とし殊に對蹠點(Antipode)の理を了得する能はず、反りて常識に叶はざる愚論と爲し、宇宙に關する觀念の如きは全然ギリシアの舊時に復歸して數理に基づける地圖は隠れて珍妙不可思議の表圖に其の位置を譲らざるを得ざりき、從て探檢事業も斯る沈滯期間には休止せざるを得ざりき、然れども異教を奉ずるアラビヤ人が第七第八の兩世期に於て一大帝國を建設し地中海沿岸地の大部分をも併合して地理的知識の範圍を擴むるの任に當れるのみならず、又特殊の氣質習慣を有するノルトメン即北人に未知の地の探征を試みたるものありたり。

漢土にありては三國の鼎立西紀八八二—九二五清談の流行、五胡十六國の亂等を経て南北朝の對立西紀四二〇—五八九の頃までは國內紛擾騷亂相踳ぎて儒學に著しき發達なかりしも、詩賦大に進み音韻學起り老莊學一變して道教と成りしが如き事蹟に過ぎずして海外に赴きて偉業を遂げんと企圖するものなく僅に求法僧に晉初の法護が西域に於て梵教を得たると

法顯

玄奘  
義淨

後秦の法顯が渡天して十六年を経義の研鑽に費せしこと並に後魏西紀四二四—五三四の惠生、宋雲が西域に入りて經論を得て還りしことあるのみ、然るに唐初の極盛時代即太宗高宗在位の頃西紀六二七—六八三には版圖大に擴まり東朝鮮より西中央アジアに達し北は外蒙古を從へ南は西藏印度南海諸國に威を振ひしが、内には制度大に備はり百般の文物隆盛なりき而して外教の東漸に伴ひて東西に往來するもの少なからず、先には梁の世西紀五〇二—五五六に菩提達磨ボツダマの印度より渡來するありしが、唐の太宗の代西紀六二七—六四九には波斯人阿羅本アロブン長安に來りて景教派の大秦寺立當時波斯寺玄宗の世に改稱を建て玄奘は天山南路より印度に入りて歷遊十七年の後歸還して西安に大慈恩寺を立てたり、又高宗在位西紀六五〇—六八三の頃義淨は渡天し二十五年を経て還り來りて盛に經典の翻譯に盡瘁せり。

我が國は夙に南韓地方と交通し神功皇后の代西紀二〇一—二六九には任那に日本府の設立を觀しが、西邊の土豪中私に漢に貢せしものありて文字の如きは當時の傳來に係れり而して百濟は儒學佛教を傳へ文物技藝を

遺唐使

實きて宗主國に謹事せしが佛典を求むるの切なるが爲、隋と好を修め唐の世西紀一三七八—一五六七には遺唐使の派出と成り僧侶學生の渡航と成りて佛教を始め百般の制度文物を齎し歸りて我が國の文化に裨益すると尠少ならざりき。

佛教東漸して印度南海諸國支那間の通商漸開くるに従ひ南東アジア近海の航路が遂に支那人に歸せしのみならず支那船にしてアラビア海、ペルシア灣、アデン灣等に往復するもの少なからざりき、然るにアラビア人の奮起して西方アジアに覇たるに及び南海諸國を経て南支那に來り廣州、泉州、杭州等に居住するものあるを見たり。

唐末の頃より契丹西紀九一六漸盛にして五代の世に至りて國號を遼と改め西紀九三七勢益強大と成りて中國を威壓し、宋は立ちて天下を統一西紀九七九せしと雖、文弱に流れ偷安に傾き朋黨の争絶えずして國是定まらず、屢、外患を蒙りて勢威日に蹙まり遂に金の銳鋒を避けて南渡する西紀一二二七の止むなきに至れり。

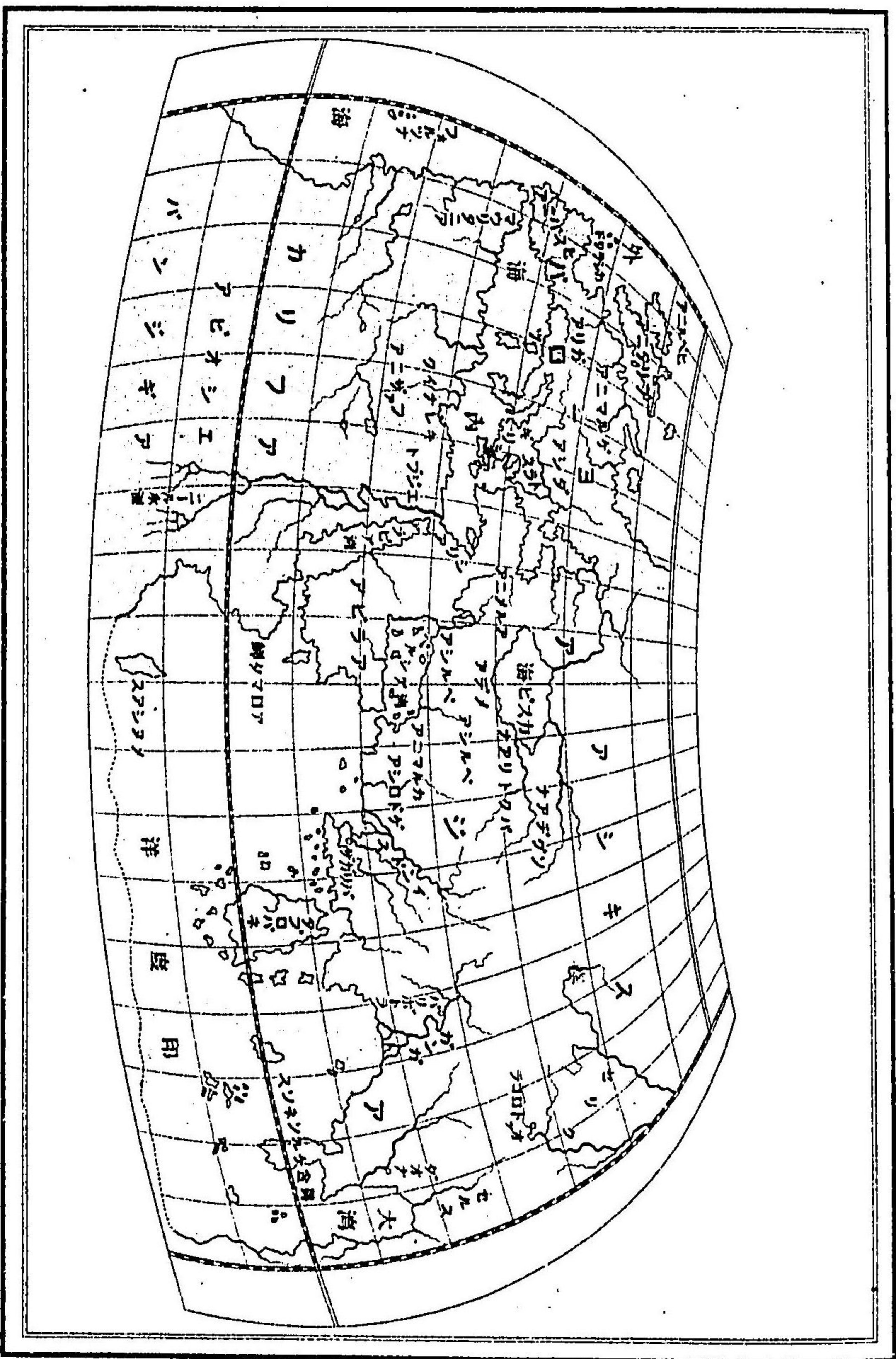
ローマの衰微するやゲルマン蠻族の南侵ありて西ヨーロッパが緘黙せし如く、唐末の振はざるや北狄西戎の威力を加ふるありて中國之が爲に畏縮せしが潛勢伏力の時期を経過すれば西にはアラビア、東には蒙古の兩大帝國が軌を同じうして現出するを觀るなるべし。

中世の終りに於ける數世期の間には地理上特筆すべき重要事件の起れるありき、其の一はイスラム的文明とクリスト的開化との接觸せしことなり、蓋し聖地エルサレムに參詣せしもの又は十字軍に參加せしものはイスラム教徒の間において不知不問の中に意志の疏通を醸成し思想の交換を媒介したるを以てローマ數字の不便を捨ててアラビア數字の長所を探り或はシチリアの朝廷に於て兩教徒間に極めて圓滿なる關係の存せしが如き實例少なからず、其の二は蒙古帝國の勃興なり、蒙古人が廣大なる地域を縦横に馳驅し、群邦割據の弊を除き東西兩洋間の交通を開きたるは良好の結果に豐なるべき新生面を發展せしむるに有力なりき。

アラビア(大食人)は一にサラセン(Saracen)と云ふ、セム派の種族にしてアリ

パー(Aribah)の子孫たるムスタルリフ(Musharribs)并にイクタニド(Jectanides)より出づるものとす、イエメン地方に居を占めたる後、エウフラト方面に移住せしものありしが、大革新者モハンメド(Mohammed)(西紀570—632)の誘導を受け、てイスラムの信者と成り、アラビア全土の統一を觀たる後、一世期末滿(六三二—七一四)の年限を以てアジアにありては印度及トランソキシヤス(Trans-oxiane)に兵を送り、アフリカの北部を従へ、エスバニアを併はせたり、然れども斯る廣大なる帝國は暫時にして土崩瓦解し、若干のカリファは分設せられしを以て政治的統一は消滅せしも、アラビア人が文明的天才を露はし、文學に、理學に、美術に、堪能あるを知らしめしは、新に領有したるダマス、バグダド、サマルカンド、アレクサンドリア、カイルアン(Kairuan)等の地にありき、而してアラビア人は、資性想像力に富みて、膽力あり、好奇心に駆られて、此處彼處を訪ひ、信仰心の爲に、麻嘉詣を促され、傳道商利は、彼等を各方面に誘致したり、されば第十世期以前に於て既にアフリカの東岸のザンジバル以南に赴き、殷富なるソフラの地に到達せり、又第十三世期以來、イスラム教はサハラを越

國名中のメネムレト



えてスーダンに到れるが、商隊はマグレブをセネガル、ニジェルの兩河地方に連絡し、參詣團はスーダンとメッカとの間を往來したり、又東方にありては第九世期以來通商上の經營はイスラム主義を提げ來りて、ソングラ列島を勢力範圍内に置き、南支那の諸港にはアラビア人の滯住するを見たるが、ペルシアと極東との往復は頗る繁くしてシラン(Siam)港には支那と馬來との船舶連繫せられ、アラル海の存在は世に紹介せらる、又ヨーロッパに於てはバルト海並にベチラの河岸にまで到達したり、蓋しアラビア人には旅行を好むもの多かりしが、商賈の中にも遠征を試みたるもの少なからざりし結果にや航神シンドバット(Sindbad)の奇談の如きは彼等の記憶より産れたるものなるべし而して眞個の地理的旅行家にも有名なるものありて、マスチ(Masudi)、インブン・ウカハ(Ibn Haukal)、アルビロニ(Al Biruni)、ソレイマン(Soleimn)、インブン・ヤハ(Yahya)、インブン・バッター(Ibn Bataiyya)等世に知らる。

マスチ(Masudi)はマケドニア産のペルシア人にして地理學者たり、九百五十七年を以て死す、二十五年間アジア及アフリカのイスラム教徒の諸國を歴遊して宗教、風

ハタカル

各處等に關する事項を彙輯して一書を著す。  
 イブンハウカル(Ibn Haukal)は十世紀頃のアラビアの地理學者なり、三十年間ムス  
 ルマン諸國に旅行し見聞する所を綴りて一書を著す(九七六)、政治、通商等に關する  
 地理的資料に富めり。

マツター

イブンバツター(Ibn Batutah)即マアブアブダラーモハンメド(Abu Abdallah Mohammed)(一  
 三〇四—一三七七?)はマケレブのタンジエルに生る、博識にして旅行を好み當時の  
 アラビア人が知悉せし境域以外に出でたり、ロシアに入りて北端を極めトルケス  
 タンを過ぎ、印度に赴きてテリーに滞留し、メウネシアを訪ひ、燕京に到れり、歸國後  
 再出でてアングダルツアを觀、ニグリチアを巡りてチンブクツに達せり(一三五二)、其  
 の旅行記はイギリス、フランス、等の各語に譯せらる。

ノルトメン(Northernmen)即北人はツートン派に屬しスカンデナビア諸國に  
 居住して豪族制の下に相應の峻達を爲せしが資性大膽にして尙武の志厚  
 く、武器武具を備へ築城に巧なるのみならず、海上生活を好み、長舟を操りて  
 四方に航行せり、然るに人口の増加、國內の統一、信仰の、掩護は移住、掠奪、攻略  
 等の如き活動の因を爲したるにや、スエリグ(Swedes)より出でしものには東  
 ヨーロッパに赴きワレーグ(Varegues)と云ふ稱呼の下に第九世紀に於てドニエ

ベルの流域を占領し、進みてコンスタンチノブルの周壁にまで迫りたるこ  
 とありき、九四一)又ノルゲ(Norweg)及ダンマルク(Danmark)より出でたるものに  
 はフェンル(Fenier)島八六二、イスランド(Island)八七〇、グリーンランド(九八三)、ラ  
 プラドル(九八六)、キンランド(一〇〇〇)等に遠征するあり而してキッキングの  
 名の下にライン、セイヌ、ロワール、等の河口を屢、侵して遂にノルマンデー(Nor-  
 mandie)を獲得し、兩シチリア王國を建設し、イギリスを攻畧し、十字軍にも參  
 加したり、斯の如くしてノルトメンはアメリカの發見者と成りしが、發見の  
 事實に就きては的確なる報告の伴はざりし爲、彼等自身に於て漸次に忘失  
 するに至りし故、西ヨーロッパの人には毫、傳はらざりき、されば地圖上には大  
 西洋方面にセントブランドン(Saint-Brandon)の如き、ブラジル(Brazil)及アンチ  
 リア(Antilia)の如き想像的陸地の描出ありしのみなりき。  
 蒙古人は其の先詳ならず、唐の世に室韋蒙古の名始めて現はれ、外蒙古の  
 北部の地に散居して遊牧に従事せり、第一世の首長をブダマンツァン(Budansan)  
 と云ひ、第五世の哈不勒に至り始めて蒙古王と稱す、第七世の也速該は隣接



成吉思汗

拔都

忽必烈

の部落を併呑し勢稍振ひしが、其の子鐵木眞は内外蒙古の地を定め、フリル  
 タイ王族酋長諸を開きて大汗の位に即き成吉思汗チンギスハーンと號し(西紀一二〇六)南  
 侵又は西征して西夏西遼花剌子摸を滅ぼせしが、太宗窩淵台ワキヤンタイの立つや(二二  
 二九)都を哈喇和林ハラハリンに奠め金を併はせ高麗を従へたる後、兄求赤スウシヤクの子拔都バドゥを  
 して五十萬の大軍を率ひてヨーロッパを侵略せしめ威大に振ひしが、太宗の  
 計に逢ひ諸將東歸し拔都獨り止まりて金帳國に君臨せり、憲宗(一二五一—五  
 九)は伊兒汗國を建て大理吐蕃を定め交趾を降だし、世祖忽必烈フコブラクは都をカン  
 パルク(燕京)に遷し國號を元と稱し(一二七二)大舉して宋を滅ぼし(一二七九、  
 勢に乗じて我が日本を侵せしも克たず(一二八二)更に南海諸國を經略した  
 り、斯の如くしてアジア大陸印度、小アジア、シベ并にヨーロッパの南東部に跨れ  
 る空前の大帝國元(漢土、内外蒙、朝鮮、吐蕃、南洋諸國)と欽察は建設せられ、群邦割  
 據の弊除かれ、門戸開放の實を示し、廣く人才を登庸せしを以て海陸兩路の  
 交通頗頻繁と成りて内外の學者、技術家、商人等の往來するもの甚多く萬を  
 以て數ふるに至れりと云ふ。

東西兩洋諸國間の交通 蒙古軍のヨーロッパを蹂躪するや諸國震駭し、法  
 皇の如きは十字軍を起さんとせしに、拔都が兵を收めたるが爲、ことなきを  
 得たり、其の後大帝國の政策が宗教に對して寛大なりし故にや蒙古人は基  
 督教信者なりと傳はり、大汗は世界の邊疆に現はるべく豫期せられたる王  
 僧(Petre Jean)なりとの風説起り、法皇イノケント四世はフランシスカス派  
 の僧ピアノダカプリネ(Piano da Carpino)即ちフランカルピノ(Plan Carpin)を使  
 とし(一二四六)フランス國王ルーイ九世はブラバンの人ルイスブルク(Ruys  
 broek)を遣りて大汗を哈喇和林ハラハリンに訪はしめたり(一二五三)而して第十三世期  
 の終頃モンテコルビノ(Monte Corvino)はローマ公教を説くの許可を得しのみ  
 ならずカンバルクの基督教會の監督と成り、ポルデノネ(Pordenone)は印度、セ  
 イラン、スマトラ、ジャバ及ボルネオ等を経て(二三一七—一八)カンバルクに來  
 り布教に従事したる後歸國したり(二三三〇)。  
 之より先、ベネチアの人マルコポロ(Marco Polo)は十七歳の時(一二七一)父に  
 伴はれてカンバルクに赴き大汗の寵遇を蒙り高官を授けられ滯住するこ

と十七年以上にして漢土の各方面に漫遊するの機を得たり、歸國(一二九五)後一書を著して『世界偉觀錄』と名づけたり、本書はマルコボロの名を萬世に傳ふるものなるのみならず實にアジアに對しては近世地理の始原期を爲し西ヨーロッパに關しては一新世界の除幕期なりき。

ルイスブルク

ルイスブルク (Ruysh'oeck) 即ハルブルク (Ruhruk) (1120-1193) フランソマン (Brabant) の人なり、フランス王ルイ九世の使節として一千二百五十二年五月コンスタンチノブルを出發し、海路クリムに赴き、之より南ロシアを經、ボルガに沿ひて北緯五十度に達し、ウラル河を越えキルギス草地を過ぎ天山の北麓、セミレチエンスクを經て十二月の初アラクル (Akkul) に至り、メンカイアアラタマ山に登り、メンカイアを通過して一千二百五十四年四月蒙古の都ハラホルムに到れり、此の年七月十日より九月十六日までを歸路に費せるが、メンカイアよりアラクル及バルハシ湖の北を經てラルボルガを過ぎ出發點に歸り、之よりコーカシア、アルメニア、小アジアを旅行し一千二百五十五年八月末アモコン (Akkon) に於てフランス王と會せり。

マルコボロ

マルコボロ (Marco Polo) (1251-1324) はイタリヤのヴェネチヤの人なり、其の父ニコロ (Nicolo) 及叔父マテオ (Matteo) は一千二百六十年商業上の目的を以てコンスタンチノブルを出發し、クリムに向ひしが遂に歩をアハラに進めたり、此の地に於て忽必烈の使節より同行を勧められしかば遂に支那に赴きて元主に面謁せり、忽必烈彼等を厚遇

し而して彼等を使節として帝國の臣民に基督教を教へ且、技藝を授くるに足るべき百人の學者工人を送らんことをローマ法王に求めたり、兩人は一千二百六十九年を以てアッコ (Aeco) に達し、グレゴリアス十世より二人のドミニカ派の宣教師を得たり、一年を隔てニコロボロ等が再度の旅行(一二七一)を爲すに當り年十七歳なるマルコボロを伴へり、彼等はシバス (Sivas) モスル (Mosul) マタダード、ホルムズ (Hormuz) を經、ボラスン (Borasn) を通過しオクスを測りてパミルに進み、カシガル、ヤルカンド、ホタンを後にしてロブノルの邊に出でゴビの沙漠、タンゲート (Tangut) に至り之より上都 (Shangtu) に至り、一千二百七十五年此の地に於て忽必烈に謁せしに、歡待せられて公職につけるが殊にマルコは大に信用せられて帝國の各地に於て重要な任務に服し元に滞在せること十七年、父及叔父と共に一千二百九十二年支那を去り、スマトラ、印度、ペルシヤ等を經て一千二百九十五年故郷に歸れり、後ちベネチアツェンパ間の海戦の際捕はれて獄に繋がれ、同艦のルスタシヤノに口授せし『世界偉觀錄』は廣く諸國の語に譯せられてシパンガ (Sipangu) (日本國) の名は高く聞ゆるに至れり。

中世に於ける通商路 商路は漸を以て既往に於けるが如き活用を回復せんとするの傾向を呈しつつありき、蓋し東西兩洋間の取引は騷亂の激しかりし際にも全然其の跡を絶ちたるに非ざるが第十一世期以來西ヨーロッパに於ける經濟界の趨勢は頗る有望にして十字軍は此の進運を助長し、アラビ

ア人の攻略が一時なりとも杜絶せしめし東西の商路を再開するに至れり。商路の中にて最要なるものは地中海なりき、ヨーロッパの商人はシリア及び支那の絹物、ベルシアの叟物、支那の磁器、錫蘭の眞珠、アフリカの象牙、インシ、リンドの香料、アラビアの芳香等を購買せしが、市場はアレクサンドリアを始とし近東の諸港なりき、アラビア人の攻略は印度との通商路を北方に移動せしめたるも、印度河并にベルシアに依れる舊路は回復せられてコンスタンチノブルは暫時なりとも重要なる取引場たりき、而して東方に對する貿易の殆ど全部はベネチアの商船旗の下に行はれて、獨占的情態は永く持續せられん有様なりしかば、ジノバは之を打破せんと大に競ひたりき、されば第十四世期の始頃、地中海の諸國と支那方面との新商路開かれ、起點をクリミアに於けるジノバの殖民地カッタ(Catta)に置きたるが、フィレンツェの商賈バルダッチ・ペゴレッチ(Baldacci Pegolotti)の傳ふる所に依れば、アストラハンに赴き中央アジアを過ぎ、ジンガリアを経て天山の北麓を廻り、ゴビを通りてカンバルクに出づるなりと云ふ、不幸にして本路は永く利用するを得ざりき、蓋し

元朝に代りて立ちし(一三六八)明朝は排外主義を採り北京の門戸を閉ぢたれば、ベネチア人ニコロコンチ(Nicolo Coni)が東遊を試みたる際には、入明するを得ざりしと云ふ。

北西方面

地中海沿岸の商民の活動は第十四世期の初年より北西ヨーロッパに行はれ、ベネチア、ジノバ等の船舶はイギリス、フランス、ドイツ等の方面に往來せしが、商路は漸次に擴張せられ、北海並にバルト海方面を過ぎ、ドイツ、ロシア及びスカンデナビアに於ける市場に達し、第十四世期より第十五世期に及びて漸く隆昌に赴き、ベルゲン、リガ、ノブゴロッド等を以て中繼處と爲せり、此の外、ドイツを地中海に連接せしむるが如き所謂内路なるものの中に、殊に活用の著しかりしはブレンネル(Brenner)峠に於てアルプ山脈を越え、ラインの流域に入りては黒森山脈の麓に沿へる有名の山道(Berg Strasse)なりとす。

内路

中世に於ける主要なる旅行家に就きて一覽表を作れば次の如し。

年 代	方 面	旅 行 家	國 籍
西紀七五五年	イスラント	アイルランド人	

中世旅行家

九世期	マラッカ以東に至る	ソレイマン	ベルシア
第九世期	支那の國都に至る	イブンブアル	ベルシア
第九世期	フェレル	ノルゲ人	
西紀八六一年	イスラント	ナドワド	ノルゲ
第十世期	アジア、アフリカのイスラム教國	マスチ	ベルシア
第十世期	イスラム教國	イブンハウカル	アラビア
西紀九八三年	グリーンランド	グンビオルン	イスラント
同九八六年	ラブラドル	ノルゲ人	
同二〇〇〇年	キンランド	ライフ	ノルゲ
第十一世期	北印度	アルビルニ	マグレブ
一二四〇—四五四	東ヨーロッパ	拔都	蒙古
一二四五—四六	ハラホルムに使う	ピアノダカブリネ	イタリア
一二五二—五三	ハラホルムに使う	ルイスブルク	ブラバン
一二七一—九五	カンバルクに滞在す	モンテコルビノ	イタリア
第十三世期	アジアの要部に旅行す	マルコボロ	ベネチア
一二七一—三〇	海路カンバルクに到る	ボルデノネ	イタリア
第十四世期	ロシア、中央アジア、印度、メラネシア、アングルジバ、ニグリチア	イブンバッター	マグレブ

### 第三 近代

#### 其一 前期 西紀第廿一世期乃至第廿三世期

中世は地理的事實の發見又は地理學の進歩に關しては幸福多き時代ならずしてアフリカの一部を加へアジアの東部を併はせたるに過ぎざりき。然るに第十五世期の終頃に至り地平は遽に擴まりて地理的知識の激増を來たし地理學の發展上實に空前絶後の一新時期を劃せりと云ふべし。新征を促したる原因素より一ならず、ヨーロッパの商賈は東地中海の市場に於て極東産の香料を始め他の貨物に對し高價を拂はざるを得ざりしを以て此等の商品を自由に且廉價に購はんと欲し直接印度に到達するの道途を發見せんことを熱望しつつありしにコンスタンチノブルがトルコ人の領有に歸するや東方貿易は殆ど禁止せられたれば前記の欲望は一層其の度を高めたり。

上古のフェニキア人及びギリシア人が北極星に據りて近海を航行し又は季

節風を利用してエリトリア海を往來せしに比し、中世の航海者は第十世期以來磁針の使用を傳へ知りしのみならず、遠洋の航行には天測の便にして且確なるを認むるに至れり。

中世にありてはブトレマイオスは單に天文學者として知られ、彼の『地理』がイタリアに於て始めて始めて羅句語に翻譯せられたるは一千四百九年若しくは一千四百十年なりき、其の後イタリア、ドイツ等の諸國に於て地圖と共に幾回かの翻刻ありて地理學に活氣を添へ探檢家に活動を促したり、實にブトレマイオス極盛の時代とも云ふべきものありき、然るに彼の地中海には經度に於て約二十度の誤謬あるを以てブトレマイオス式のアジアにマルコポロのカタイ(契丹)及びジバング日本國を連接せしめたる上に西のアソレス諸島を表出ブトレマイオスはローソップの西端よりアジアの東端までの經度を百八十度と爲せしが、トスカネリ(Toscanelli)は之を百三十度と減じ、ベハイン(Behain)は其の地球儀、一四九二)上に百二十度に縮めれば日すれば西方航路の發見に志ざすものあるは敢へて異とするに足らざるなり。

斯くして第十五及第十六の兩世期に亘る大發見はイベリア半島、大西洋

沿岸の住民たるホルトガル人及エスバニア人之に當りて地理的知識の範圍は著しく擴張せられしが第十六世期中葉以後、彼等の事業漸衰へ、ホルトガルは殖民地と共にエスバニアの合併(一五八〇—一六四〇)する所となり、又エスバニアはアメリカに於ける新領土を利用するに汲々として金銀の搬出のみを事とせし結果、フランス人、イギリス人、オランダ人等の代りて探檢場裡に活動するありて第十七世期の半に達し、地理的發見の偉業は大體に於て完結を告ぐるに至りしが、比較的短かき年限を以て既知の世界を二倍するを得たるは實に地理史上特筆大書すべき一時代と云ふべきなり。

**ホルトガル**(葡萄牙)人は大西洋に瀕する地に據れるを以て海事思想に豊なるは自然の結果なりと雖、亦アラビヤ人に接觸せしが爲の利害關係は彼等をして新世界發見の偉業に對する發起者たらしめし一因と爲さざるべからず、抑、彼等が海事的國民として始めて世に知られしは第十三世期の頃、地中海と大西洋との間に通商の發達せし時代にして、海員はジェノバ人に育成せられしも、指導者は實にアビスタル家の創建者ジョアン(John)一世の第四子

ドン・エンリケ(Dom Henrique)航海者なりき、皇子はマウルと戦ひてセツタを攻  
 略せし後(一四一五)大陸の末端サンビセンテ岬附近のサグレス(Sagres)に居住  
 せしが、資性好奇心強く知識慾に駆られ盛に海員、學者等を引見して遂に一  
 大事業を劃策するに至れり、即ち一面にはマウルを驅逐して國家を安全の域  
 に置かんと欲し、當時アビシニアのネグスたるべしと假想せられたる神話  
 的王僧(Pere Jean)の援助を得てアラビア人を東西より挾撃せんと圖り、他方に  
 は紅海若しくはペルシア灣の沿岸に居を占むるアラビア人がヨーロッパに  
 仕向けらるる貨物に對し重税を課するを厭ひしのみならず、商利を獨占壟  
 斷するを惡みて自由にして實益多き新航路を發見せんと決したり、されば  
 一千四百十九年以後毎歲遠征船の發航を見ざることなく、事業も漸次に捗  
 りしも、エンリケが逝去せし年(一四六〇)には未だガンビアのリオグランデ附近  
 に達せしに過ぎざりき、アルフォンソ(Alonso)五世の代にありても探檢事業は  
 繼續せられしが、精力家たるジヤアン二世が朝に立つに及びて熱心と忍耐と  
 を以て事に當りし結果、マルチン・ベハイン(Martin Behaim)は北極星を失ひし赤

道以南の地に於ける航行上の困難を避くる方法を授け、カンはコンゴの河  
 口を發見し、ヂアスは喜望岬に達し、コビリオン及バイバはアビシニアに赴き  
 て印度航路の探査上に便宜を與ふること少なからざりき、クリストホロコ  
 ロンボが新世界を發見して(一四九二)印度の一部なりと誤認せし爲、印度航  
 路の發見は緊急問題と成りてバスコダガマの遠征を促がせしが、一千四百  
 九十八年の五月二十日を以て印度のマラバル岸に到達して問題は解決せ  
 られたり、爾來香料に關する商利を保持せん爲にアルメイダ及アルブケル  
 ケを印度に遣し、ゴアを占領して根據を固めしめ、進みてマラッカ及ジャバを  
 占領し(一五一二)、モルッカ群島に達し(一五一二)、新ギネア及オーストラリアの  
 北岸を望見せしが、商利に汲々たる、ホルトガル人は一轉して阿瑪港(一五一  
 七)、南京(一五二〇)、日本(一五四二)等に赴きたり、アフリカの沿岸には重きを置  
 かざりしも、アビシニアとは親密に交際し、ガスバル及ミゲルのコルテレア  
 ルは北アメリカ方面に於て印度に西航するの海路(北西通路)を探り、カブラ  
 ル(Cabral)其の他の旅行家の盡力に依りてブラジルを領有するに至れり、如

斯してリスボアはベネチア、ジェノバに代りて印度と西洋諸國との間に行は  
るる貿易の中心とは成りぬ。

カン  
ザアス

カン(Diego Cão)は第十五世期のホルトガルの航海者なり、アフリカの西岸を探検せ  
ん爲りリスボアを發し一四八二、南緯一度五十二分のサンタカタリナ岬を過ぎてザ  
イレ(Zaire)即コンゴ(Congo)の河口を見、南緯十三度二十六分に達せり(一四八四)斯くし  
て十九ヶ月を経て歸國せしが再度の旅行に依りて南緯二十一度四十八分のッロッ  
ス(Cross)岬を越え、同二十二度九分の地點に到りしが(一四八五)病を得て歿したり。

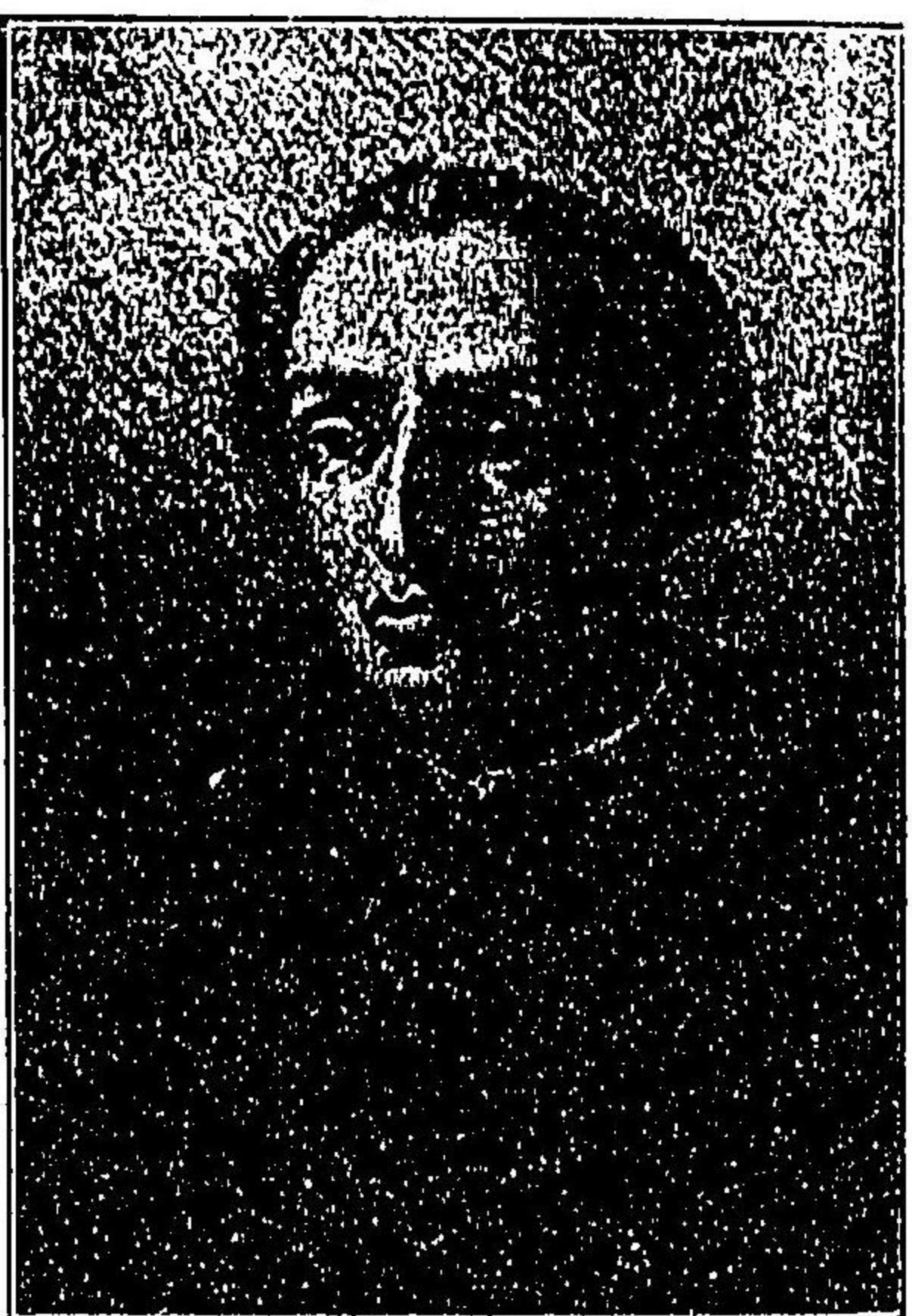
コロンブス

チアヌ(Bartolomeu Dias) (1451-1500)はホルトガルの王族に生れ、一千四百八十六年  
アフリカ海岸探検の命を受け、カンに到着せし最南點ネグロ(Negro)岬を過ぎ、海岸に  
沿ひて南緯二十九度に至り、之より南に向ひて大海を航すること十三日頗る寒氣に  
苦められたり而して陸地を求めんが爲に東轉したるも之を得ず、北向して喜望岬  
の東岸に達し、アルゴア(Algoa)灣以北に進めり、時に船員の前進を拒めるありしを以  
て、發見の土地をホルトガル領と定め、復喜望岬を廻航して本國に安着せり、一千四  
百九十七年カヌ(Gama)と共に更に遠征の途に就きしが四部アフリカの海岸に止  
まりて交易に従事し、其の後一千五百年にはカブラル(Cabral)艦隊の一船を指揮して  
ブラジルの海岸を離れたる際暴風の爲、身を失へり。

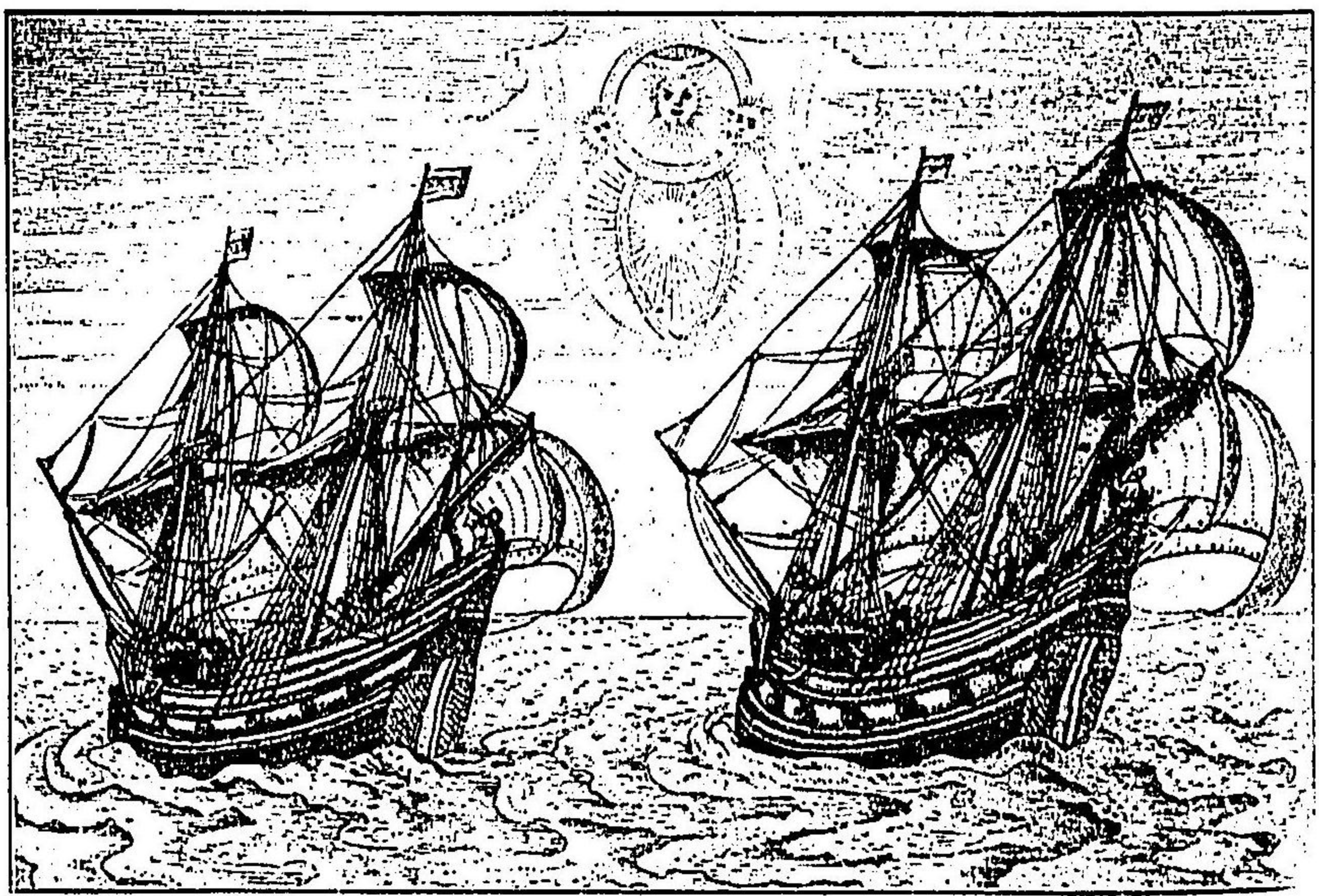
コロンブス(Cristoforo Colombo)はホルトガルの旅行家なり、パイバ(Paiwa)と共に神話的王  
僧(Pétre Jean)即ペレミニアのネアスの許に赴きて印度に通ずるの路を尋ねべく命



バスコダガマ(Vasco da Gama)



クリストフォロコロンボ  
(Cristofolo Colombo)



パレンツの船

### 東路か西路か

クリストフコロ、コロンボ (Christopher Columbus) の提案(一四八三)を  
採用せざりしを以てジョアン二世(一四八一—一四九五)の不明に歸する  
ものあるも當時の事情より考ふれば強不條理と爲し難きものありて  
存す、蓋しコロンボの提案なるものには所謂利己的に失するの條件多く  
フェルナナン及びイザベラが数年間御けて採用せざりし理由も茲に存す  
るが如し、抑アフリカ洲を廻りて印度に航行せんとする東路に關して  
は殆ど半世期を費して赤道以南に達するを得しに、豫想に反し海岸線は依  
然として南向せしが故に、大西洋を西航してアジアに到達するの西路を  
以て捷路なりとする意見に基づきてデエゴテイイス (Diego de Teive)  
(一四五二)、ドンフェルナンデス (Don Fernando de Beja) (一  
四五七)、ジョアンボガド (João Vagado) (一四六二)等の如く遠征を西  
向に試みたるもの少なからざりしが、徒に幽靈的島嶼の跡を逐ふに過ぎ  
ずして何等得る所なかりき、さればアルフォンソ五世(一四三八—一四八  
一)の如きは大西洋の西航又はアフリカの廻航の何れを是とすべきや大  
に迷ふ所ありしかば當時知識の該博なるを以て聞えたるフイレンツェの  
天文學者トスカネリ (Toscanelli) に就きて意見を徵せしに西路の優れる

を以てせり、又同人がフェルナンマルチネス (Fernão Martins) に密せし  
書翰(一四七四)中にはホルトガルと印度との距離は東向的より西向的の  
方遙に短しと断定したり、新世界の發見に關しては絶好の意見とは云  
ふべきも印度の航路として採用するに足らずと爲すに何の不明か之れあ  
らん、殊にデアン (Bartholomew Diaz) を促がしてアフリカの南端を極め  
しめ(一四八七)、コビリアン (Pedro da Covilhão) を派遣して東アフリ  
カを探らしめたり、一四八七—一四九〇、斯の如く東路の發見に力を致せ  
しを以てコロンボが新世界に到達して(一四九二)アジアの東端と爲せし  
頃ホルトガルは東路の發見を急ぎしに、マノエル(一四九五—一五二二)  
の世に於てバスコダガマ (Vasco da Gama) は喜望峯を廻航して印度に  
到達したり(一四九七)。

是に由て之を觀れば印度航路の探求としては既に進捗しつつありし東  
路を是とし望み少なき西路を捨つるに何の不條理か之れあらん、コロ  
ンボの新世界發見は全く偶然なり、豫想外の事件なり、カゾラル (Pedro  
Varez Cabral) がブラジルに漂着せし(一五〇〇)も偶然なり、コロンボの  
功は偉なりと雖、亦幸多き大膽なる航海者の獲物たるに外ならず。

ガマ

を國王ジョアン二世に受けられたれば(一四八六)エジプトを經、アデンを過ぎりて印度  
に達し、歸途ソフアラに立寄り、アビシニアに向はんとせし際、パイバの死亡するあり  
て單獨ネケスを助ひしが、厚遇の中に拘禁せられて歸國するを許されざりき、然れ  
どもアフリカの海岸に沿ひての航行に依りて印度に赴くことの不可能ならざる  
次第を本國に通告せしむるを得て印度海路發見上に資する所少なからざりき。

バスコダガマ (Vasco da Gama) (1469—1524) はホルトガルの子、アルエンテジョ州シネオス  
(Sines) の人なり、一千四百九十七年七月八日リスボアを解纜し、十一月二十二日喜望  
峯を廻り、ザンベジ河口に長期の滞在を爲し、翌年三月の始、アフリビアの商船と共に  
モサンビク灣を發し、一千四百九十八年四月七日モンバサ (Mombasa) を過ぎ、同月十四  
日メリンダ (Melinde) に至り、同年五月二十日を以て印度のマラバル海岸に到着し、翌  
年九月リスボアに歸着せり、其の後、第二回印度遠征隊の司令官となり、一五〇二—  
〇三迄に印度の副王に進み(一五二四)同地のコチン (Cochin) に於て歿したり。

エスバニア(西班牙)人が發見場裡に立ち發見者の列に加はるに至りし動  
機には突如にして而も受動的等の主唱者誘導者は何れも外國人なるものあり、蓋し  
ジノバの人クリストホロコロンボが大西洋を西航して印度に達せんとす  
るの企圖を提げてホルトガル王ジョアン二世に謁し説く所ありしも容られ  
ず(一四八三)去りてエスバニアに入りて盡力遊説怠らざりしにも拘はらず



數年を経て未だ決せず、失望落膽將にフランスに赴かんとせし際、捷戰の餘慶カレナダにや漸くにしてフルデナンド及イザベラの二王の贊助を得ること府の占領にや漸くにしてフルデナンド及イザベラの二王の贊助を得ることと成りたり、斯くしてコロンポは四回一四九八—一九三、一四九三—一四九六の旅行に依りてサンサルバドル、クーバ、ハイチ、小アンチラ、ベネズエラ及コロンビアの海岸、中央アメリカの東岸等を發見して印度の東端に到達せしと信じ自、新世界の發見者たることを了知せざりき、先之、フィレンツェの人アメリゴ・ベスプッチはオヒダ(Ojeda)に従ひシリアンドラコサ(Juan de la Cosa)と共に南アメリカの北岸を探索し(一四九九—一五〇〇)「モンチャメノビウス」(Mundus Novus)新記を公にして大に世人の注意を牽き又バルボア(Balboa)はダリエン地峽を横斷して始めて際涯なき海原を見、之に南海太平洋と命名したり(一五二三)而して新大洋に出でて印度に通ずるの海路を探索せしソリス(Solis)はピンソン(Pinson)と共にブラシルの沿岸を探索(一五〇八)したる後、リオデラプラタに到りて土人に殺され(一五一五)ドリビルバ(Juan de Grihalva)はクーバの總督ペラスケスの命に依りてメキシコを踏破せり(一五一八)又ホルトガルの人

マカリ、ヘニス(Fernão Magalhães)はエスバニアに事へ西方よりモルッカ群島に赴かんと欲し、アメリカの南端とチエラデルフエゴ(Tierra del Fuego)との間に於ける新海峽を通過し(一五二〇)始めて太平洋(Mar da Pacifico)を西航してヒリビナス群島に達し(一五二二)第一の世界周航者たるの名譽を擔ひつつ新大陸が一の別世界たるを確證したり。

當時の探檢遠征には金銀財寶の獲得之が動機たりしもの多かりしが、コロンポ自身に於ても素より此の範圍を脱し得ざりしのみならず、彼が末年の不幸不平は主として産金地を發見し能はざりしに歸せざるべからず、さればコルテス(Cortez)、ピザロ(Pizarro)、アルマグロ(Almagro)、オレルアナ(Orellana)、ソト(Soto)の輩の如き所謂コンクイスタドレーヌ(Conquistadores) 占領者、占が利慾權慾の爲に行動せしは敢へて怖むに足らざるなり。

マカリ、ヘニスの遠征の効果に基づきてエスバニア人はモルッカ群島の領有を争はんとせしも、新分界線はホルトガルに利ありしを以て(一五二九)レガズピ(Legazpi)がヒリビナス群島を占領し(一五三六)マニラを建てて(一五七〇)

占領者

根據地と爲せし後は轉じて南大陸の探求に従ひメンダニヤ(Mendana)(一五九  
 五)ケイロス(Queros)と記するは誤(一五九五—九六一六〇六—七)トルレー  
 (Jores)(一六〇七)等に依りて數回の遠征を試みしが太平洋に於ける若干の  
 群嶼サロモン、マルキー、新ヘブライツ等并にトルレー海峡を發見するに過ぎざりき。

コロンプス

クリストホロロンボ(Cristoforo Colombo)(1446—1506)即ちコロンプスはジェノバの人な  
 り、両親は梳毛者に過ぎざりしも其の子の教育には注意を拂ひしを以てコロンプ  
 スは早くより航海に従事したり、一千四百七十三年の頃コロンプスはホルトガル  
 に赴きて航海者ペレストレヨ(Peestrelis)の女と結婚しマテイラのホルトサント(Porto Santo)  
 島にても生活せることあり、又アフリカの海岸及びイスラントにも航海せしもの  
 如し、コロンプスは地球が球状を成すを以て四方に航せばアツアに達せらるべき  
 を信じ、遠征隊の派遣をホルトガル王に建議せしも用ひられず、一千四百八十四年  
 頃エスパニアに赴きてフェルナナンド(Ferdinand)及イサベラ(Isabella)に就きしも其の説  
 復行はれず、彼の兄弟はヘンリ七世の補助を請はんが爲にイギリスに趣き一四  
 八八、コロンプスも將にフランスに旅行せんとせしが、當時グラナダにありし主權  
 者と個人的會見を試みたり而して成功の曉に於ける特許と名譽とに關して過大  
 の要求を爲せしを以てフェルナナンド等の拒む所と成りしし、グラナダを去らんと  
 しつつありしコロンプスは友人の盡力に依りて再召され、一千四百九十二年四月

十七日國王及び女王はコロンプスの要求の全部を容れて調印せられたり、之に依り  
 てコロンプス及其の後嗣はコロンプスが發見せる土地全部の水師提督と成り、エ  
 スパニアの爲に占領せる土地の副王と成り、充分なる權力と歳入大部の分配とな  
 受くべく約定せられたり。

王室の保護と商家ピンソン(Pinzon)の援助とに依りてコロンプスの坐乗せる「サン  
 タマリヤ(Santa Maria)號」マニェンソン(Vicente Yanez Pinzon)の率ひたる「ニニヤ(Nina)号」  
 アロンソピンソン(Martin Alonso Pinzon)の指揮せる「ピンタ(Pinta)号」の三隻は百二十人を  
 搭載して一千四百九十二年八月三日パロス(Palos)より發航せり、而してカナリア  
 島に寄港し西走して十月十二日グアナニ(Guanahani)即ちサンサルバドル(San Salvador)  
 島を發見し、此處に上陸してカスナリアの爲に占領し、又數島を検出し「ローバ、ハイチ  
 の北岸に沿ひて航し黄金及び地方物産の少量を得たり、旗艦「サンタマリヤ」はハイチ  
 の海岸にて破損せしかば「ラナビダ(La Navida)寨」を建てて四十人の殖民を残し置  
 き、翌年一月四日「ニニヤ」号に乗じて歸路に就きしが、屢暴風に遇ひ僅に破船を免れて  
 アソレス諸島及びホルトガルに寄港し、一千四百九十三年三月十五日パロスに歸着  
 せり、コロンプスは宮廷に召され大に面目を施し彼の特權は確定せられき、之を以  
 て第一旅行(一四九二—九三)とす。

一千四百九十三年九月二十五日コロンプスは十七隻の船と一千五百の船員と  
 を率ひてパロスを出發したり、ドミニカを發見し(十一月三日)、カリブ諸島中の數島

に上陸し、ホルトリコを週航し、ラビダド港に於ける殖民が全部殺戮せられ居りしを見て更にイサベラ市を建設し、内部を探索せる後、西に向ひてリーバの南岸を航行し(一四九四)、シマイカを發見してイサベラに還り、一千四百九十五年ベガール(Vega Real)の戦に大に土人を破れる頃、殖民の不平よりして本國の勅使派遣せられしが、一千四百九十六年コロンブスのエスパーニアに歸り、君主に好遇せられしことありて事件は落着せり。

一千四百九十八年五月三十日第三旅行の途に就けり、此の航海に於てトリニダード(七月三十一日)、オリノコ河口の低地(八月一日)に至り始めて南アメリカの大陸を發見したり、而して幾多の困難を犯してトリニダードと本陸との間に於ける海峡を通過しサントドミンゴに到着したり(八月三十日)、此の地の殖民は叛乱を起し不秩序繼ぎしを以て一千五百年本國より王室委員の來航あり、コロンブス及其の兄弟は職を免ぜられ、禁錮せられて十月エスパーニアに送られたり、而して彼等は直に釋放せられしもコロンブスは昔日の威嚴を再々備ふる能はざりき。

一千五百二年三月エスパーニアを發し、サントドミンゴに接頭し、之より中央アメリカに航し、ホンテグアスの海岸に達し、四路に供すべき海峡を求めつつ南下してパナイ地峽に至りしも、得る所なくしてシマイカに歸りぬ、然るに船は用を爲さず、幾多の困難起りたれば援助をハイチに乞ひ僅に一隻の小船を得て恰も漂流者の如き風情にてコロンブスは一千五百四年十一月七日を以てエスパーニアに還れり。

コロンブスの保護者たりしイサベラは間もなく世を去り、復讐に關する數次の懇願は効を奏せず、不滿の程に餘命を送りて一千五百六年五月二十日頃パリアドリド(Valadolid)に病歿せり、而してコロンブスは其の發見せし地がアツアの一部分なりと信じて「新大陸に屬するを知らざりし」と云ふ。

ピンソン(Pinzon)兄弟はバロスの豪商にして船主、船長を兼ね、コロンボに協同して第一回の旅行にマルチンアロンソ(Martin Alonso)に「ビンタ」号に坐乗し、先を争ひ功を奪はんとせしが果さずして死す(一四九三)、「ミニマ」号に司令たりしビセンテナネス(Vicente Yanez)は始めてブラジルの海岸に接觸してブラ灣に到り、南緯八度に達し(一五〇〇)「ソリス」と共にアマゾン川の河口を發見したり(一五〇八)。

アメリカゴブスプキ(Amerigo Vesputci) (1453—1522)はフィレンツェ(Firenze)の人なり、第一の旅行(一四九七—九九)に於てメキシコ灣の北岸を踏査せしと稱するも信じ難し、ガビエダに従ひジブアンテラコサと共にマロニの海岸をリガマゲダナまで探明し(一四九九—一五〇〇)、ホルトガルが西航してモルッカ群島に達すべき捷路を求めると聞き之が爲にブラジルの沿岸に赴き(一五〇一—一五〇二)又ゴンザロコエリョ(Cristóvão Colombo)と共に一大遠征隊を率ひ南アメリカを経てマラッカに達せんとして海峡を索めつつ南緯十八度或は二十四度まで降下せりと云ふ、此等の旅行殊に第二回のものに依りて新世界の發見者として世に知られ、コロンボを以てアツアの一端に達せしものと認めたるが爲、アルテシーミウレルの如きも新世界の圖を公に

する際「アメリカ」と置せし結果アメリカの名は遂に新大洲の稱呼とは成りたり。  
コサ(Juan de la Cosa)はエスパニアのサントナ(Santona)に生る航海者にして地理學者  
を兼ね、アフリカの近海を航行せし後、コロンボの第一及び第二の旅行に加はり、カビ  
ダの案針と成り(一四九九)更にマヌエウ及コロンボの海岸を精探し(一五〇四)  
ユウバ(Uruba)地方に在住中タバスコ(Tabasco)に於て戦死したり(一五〇〇)地理學者と  
しては有益なる地圖二葉を遺せり、甲者はアフリカを表し(一五〇〇)、乙者は新に發  
見したる土地に關せり。

オホカ(Alonso de Ojeda 或は Hojeda) (1470—1515)はエスパニアのクエンヌマ(Quenya)の  
人なり、黄金採取の目的を以てサントミンゴを踏査し(一四九三)「アメリゴ・ブスプッチ  
及びジッパンテフコサと共に、エズエウ及びコロンボの海岸を探検し(一四九九—一  
五〇〇)末年をイスパニアに過ごしたり。

ソリス(Juan Diaz de Solis)はエスパニアのレブリキサ(Librixa)に生れ地圖の作成に巧な  
リ、ピンソンと共にユカタン方面並にアマソナスの河口を發見し(一五〇八)水路部  
長としてブラジルの海岸を探査し、リオデラプラタの遡航を試みしが(一五一二)同  
地方の占領に盡力して毒手に斃れたり(一五一五)。

バルボス(Vasco Nunez de Balboa) (1475—1517)は冒險的旅行家なり、ダリエン(Darien)殖  
民地の首長と成りて令聞あり、パナマ地峽に於ける山脈を越えて(一五一三)一大海  
洋を發見し、ドバイヌ(Dobaynu)の遠征に失敗し、ペルーの海岸に一大探検を試みんと

して果さざりき。

マカリアネ(Magallanes) エスパニア的稱呼 即マカリアネ(Fernão de Magalhães) (1480—1511)はポ  
トガルの人にしてサボッサ(Sabosa)に生れたり、東印度(一五〇五—一五〇七)「バロ」(一五  
一四)にありて事に従ひしも職を剝がれたるが故に、ホルトガルを去りて(一五一七)  
エスパニアに赴き、フレイロ(Ruy Faleiro)なるものと共同してエスパニアの爲めにモル  
カ群島に達する四航路を見出ださんとせり、カコロ五世、其の計畫を嘉みして五隻  
乗込二百六十五人の艦隊を編成せしめたり、而して最初マカリアネ及びフレイロは  
相並んで司令官たりしが後に至りてマカリアネ其の全權を握り、一千五百十九年  
九月二十日を以てサンルカル(San Lúcar)を解纜し、マテイラに寄港し、アラシルの海  
岸に於けるリオデリアネイロ灣に碇泊し(十二月)、リオデラプラタを探検し(一五二〇)、  
パタゴニア海岸のサンジュリアン(San Julian)港に達せり(三月)、此の時三艦長等の反抗  
せるありし事も不きぬ、又一艦の行衛不明となりしものあり、十月二十一日トドス  
ロスサントス(Todos los Santos)即マカリアネ海峡の入口に達し、他の一艦と分れしが、十  
月二十八日を以て太平洋を以て此の名を與ふに出で、始北、次に北西更に西に向ひ  
ラドロンの等の數島を検出し、食物、飲料水等に苦みモルッカ群島の位置を誤りしが爲  
に、遂に北方に進みて、一千五百二十一年三月十六日ロリピナス群島に達せり、セブ王  
エスパニア人を厚遇して同盟を約し、其の部下にして洗禮を受けしもの數百人あ  
りき、然るに同群島中のマクタン(Mactan)島の土人を攻撃してマカリアネは其の配

下の若干と共に命を失ひ、間もなくセブ王も叛して二十七名のエスパニア人は殺されたり、此の中には艦長と選ばれしセラノ(Serrano)及びバルボサ(Barboza)もありき、殘存者は一艦を焼き棄て、殘艦二隻に乗じて漂泊したる後、モルッカ群島に抵り香料を搭載せり而して「トリニダド」(Trinidad)号はパナマに達せんとして果さず、「ビトリリア」(Victoria)号は乗組十八員を載せてケーブ航路に依りて本國に歸着し、世界の第一回通航を遂げたり。

コレタス(Fernand Cortez) (1485—1547)はエスパニアの陸軍士官なり、新世界に渡りてイスパニオラに住み(一五〇四)クレーバの占領軍に加はりしが殊にメキシコ役(一五一九—二二)を以て名を擧げたり、又タリエン地峽を探索しカリフォルニアを踏査したり。

ピザロ(Pizarro)に兄弟四人あり、フランシス(Francis) (1475—1541)は三人の兄弟並にアルマグロ及メンテ(Hernando de Llanque)と協同してペルーの占領軍に其の他に於ける黄金の獲得を實行せんと約して同國に赴きしが効果なかりき(一五二四)、再度の遠征にはクヌコ(Cuzco)を占領し(一五三三)リマを建設したり(一五三五)コンパレーン(Gonzales) (一五〇二—四八)は家兄を助けてインカス(Incas)を滅ぼし、マレーグロを撃ちてキトーの知事と成り(一五三九)同地以東ナポ(Napo)マリアニオン(Marathon)の合流點までを踏査したり(一五四一)。

アルブジロ(Diego de Almagro) (1475—1538)はピザロ及メンテと共にペルー(Peru)

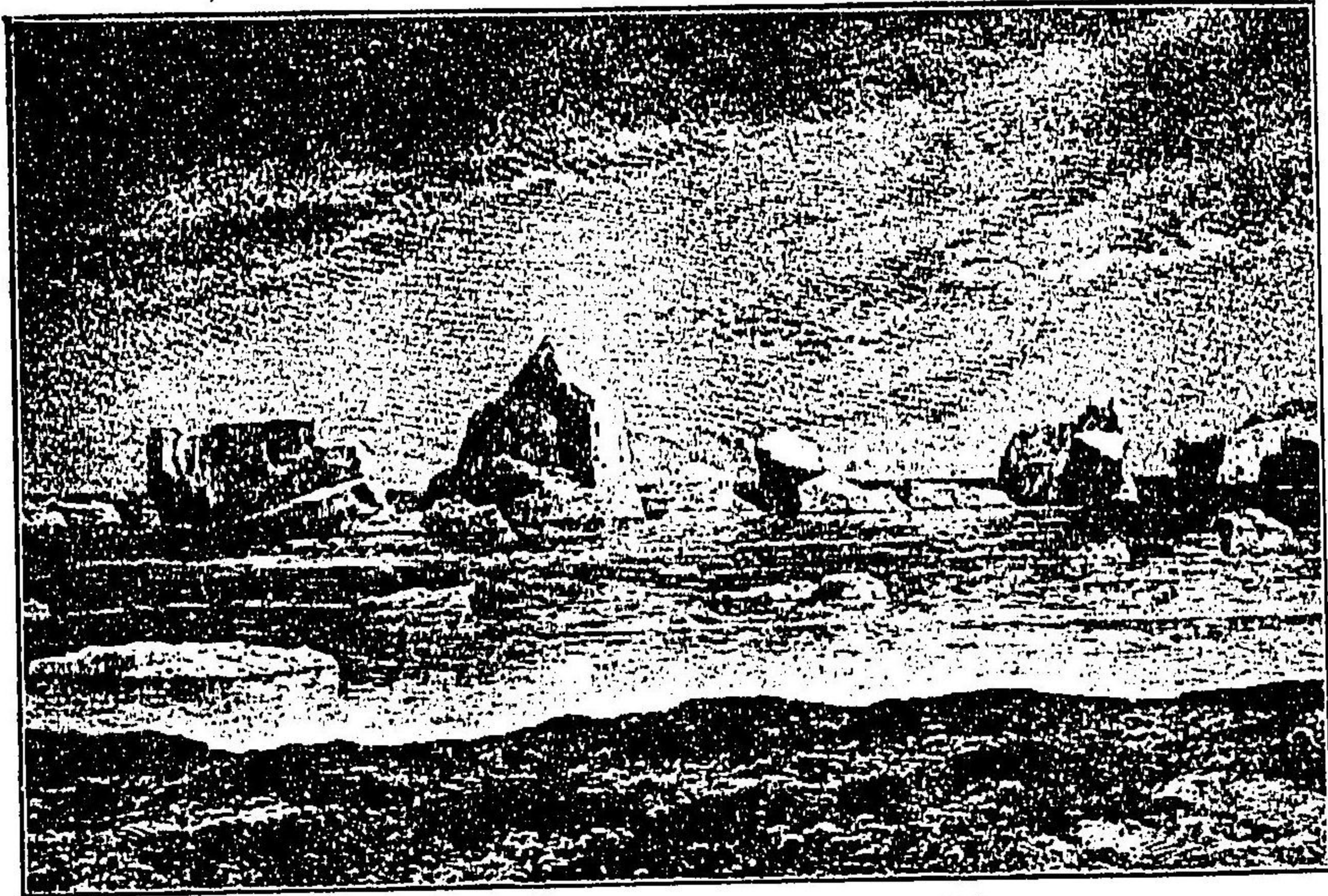
に渡り(一五二五)同國南部の知事と成り、チレーの占領を試みて成功せざりしが、後ピザロと隙あり、クヌコ附近に於て殺さる(一五三八)。

ガレリナ(Francisco de Orellana)はエスパニアの冒險家なり、ピザロを助けてアマソナスを探検し、數處に驛站を設けし、漸次に船舶、人員等を失ひて疲勞、落膽の中にカラカスに於て死去せり(一五四九)。

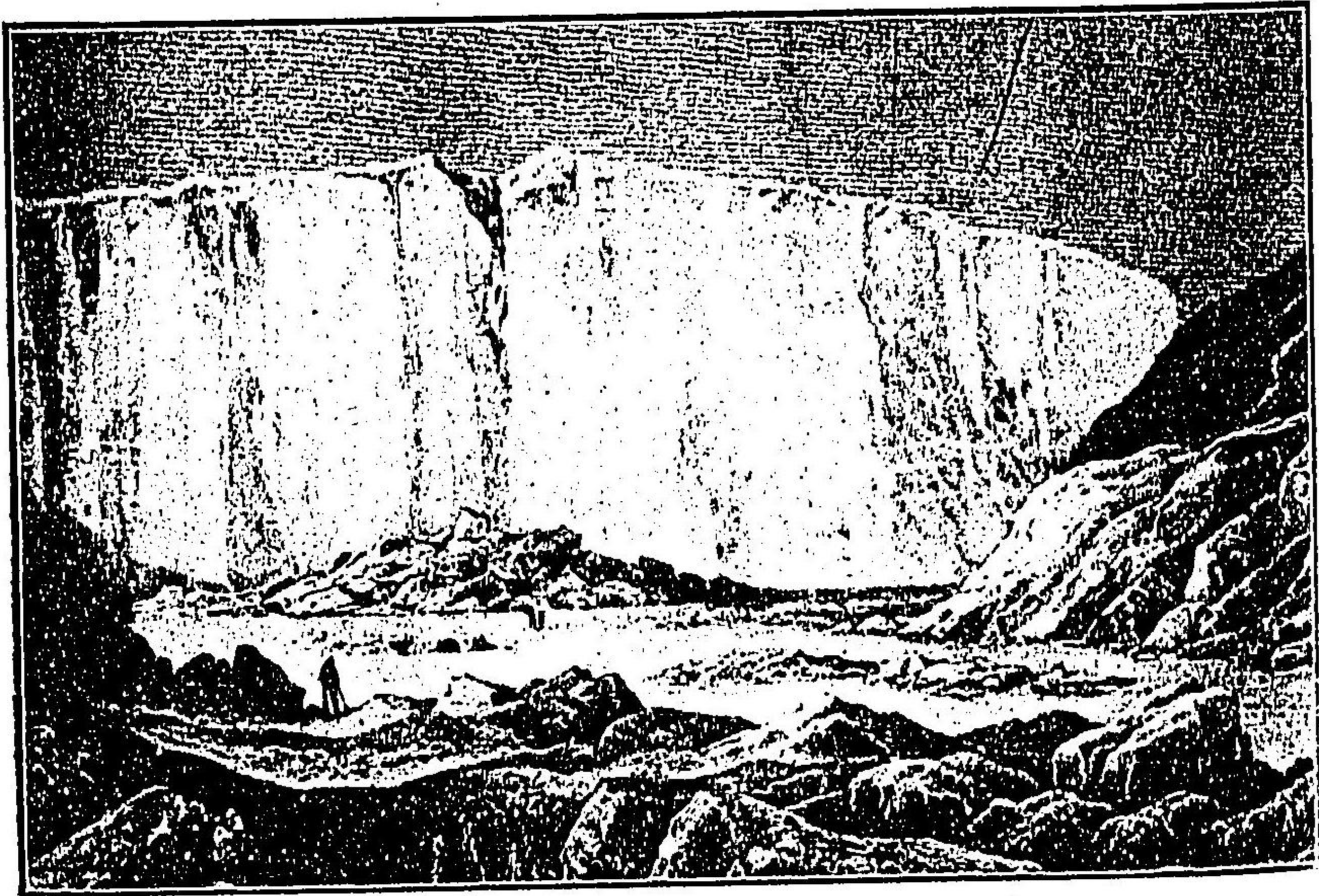
ソト(Hernandez de Soto) (1496—1542)はエストロマンペラのピリクエス(Villanueva)に生る、アメリカに渡り(一五二〇)ピザロの部下に屬せしが、クレーバの知事と成り、約一千人の遠征隊を率ひてフロリダに赴き、黄金獲得の爲に内部に入込みて、シンシピの河畔に出でしも効果を得ず、失望の中に憤死したり。

レガスコ(don Miguel Lopez de Legazpi)はエスパニアの海軍出身にして一千五百七十二年に死す、メキシコに赴きて(一五四五)總督府に入り、歴任して重職にありしが、總督の命に依りヒリビナス占領に従事することと成り、先、マリアナ列島を容れ(一五六四)ヒリビナスに入り、マニラを建設(一五七〇)して根據地を定め、仁政を施して治績大に擧がりたり、コンクイスタドレーン中稀に見る所の博愛主義の人なりき。

クイロク(Pedro Fernandez de Queros) (1561—1614)はホルトガルの航海者なり、エスパニアに事、メンダニフ(Mendana)の指揮の下にサロモン諸島を探查せん爲、發航して(一五九五)マルクサ(Las Marquesas de Mendosa)メンダニマ等の諸島を發見せしが、司令官の死去せし後は自、船隊を率ひて、マニラに歸着し(一五九六)第二回の遠征の際にはカリッオ(Callao)



氷山の流致 [バッキン海]



ハンリエッタ ネスミス氷河 [グラントランド]

を發し(一六〇五)ハリネシアの島嶼群島就中ケイロス(新ヘブライツ)諸島及びタヒチ島を發見せしも南大陸問題の解決を得ること能はざりき而して第三旅行の計劃中パナマに於て死す(一六一四)。

トルネーダ(Luis Vaez de Turra)は第十七世紀頃の 에스パニアの航海者なるが其の生死の年詳ならず一千六百五年の末ケイロスと共に南大陸の發見並にメンゲニアの紹介に係るマルケサ諸島の精探を以て目途としてカリヤオ(Callao)を出帆し南緯四十五度に進まんとして果さず新ヘブライツ諸島中の 에스ビトサントを發見せる後ケイロスと分かれて新ギネアの南岸に沿ひて西進し 에스パニア王ホリッパ三世の名を以て同地を収め珊瑚質の低島多き淺海を通過せしし附近にオーストラリアの横はれるを知らずしてマニラに到達したり(一六〇七)而してトルネーダが發見したる海峡はマニラ政府の秘密として約百六十年間世に發表せられざりき。

イギリス英吉利人は夙に大西洋の西航に意を留めブラジル島の探求を試み(一四八〇)二千四百九十一年以後に於ては毎歳一回以上の遠征を派出せしことありしがベネチア人のギオバネチカボタ(Giovanetti Caboto)はイギリス政府に事へ北アメリカの某海岸(ニールハウランドランドカプアール)に達せし(二四九七)ことあるも其の後セバスタアンカボット(Sebastiun Cabot)が北東通路

北西通路

案を提出せし(一五四七)以來、キロービー(Hugh Willoughby)はスカンデナヴィアの近海を航行してノワヤゼムリヤを望見し、チャンセロール(Richard Chancellor)は海路アルハンジェルヌクに達し(一五五三)、又一遠征隊のカラ海峽に到れるありき(一五五六)、又北西通路に關してはフロビシマー(Martin Probishe)(一五七六—七八)ディービス(John Davis)(一五八五—八七)、ハドソン(W. Hudson)(一六一〇)、バフン(Bahū)(一六一六)等の遠征ありたり、又ラレー(Walter Raleigh)がチーサピーク灣の南に於ける地を探查してブーシニアと命名(一五八五)するあり、而してドレーク(Francis Drake)がマダリナヌ海峽を通過し、チレー、ペルー等を経てブライマスに歸着して第二の世界週航者たるあり(一五八〇)。

カボタ

ギオバネチカボタ(Giovanetti Cabota)即ちジャンカボッタ(John Cabot)(1425—98)はイタリヤのジェノバ地方の人なり、後年プリムストルに移り、印度に達する捷路たる北西通路の探索を企てて千四百九十六年イギリス王ヘンリー七世より東海、四海、北海に於ける不明の地を自費にて發見する保護の特許を得、翌年五月子息と共に出發してカブリアントム(Cap-Breton)島及ノバスコシヤ(Nova Scotia)を發見し、此の年プリムストルに歸着したり、其の翌年第二回の航海を試みたるの際死去せしもの如し。

セバスチアンカボット(Sebastian Cabot)(1474-1498)はギョームカボットの第二子にして生地は恐らくはプリストルならん、一千四百九十七年に父と共に航海せしは事實なるものの如し、且、世に傳ふる所に據れば一千五百十七年北西通路を探りて北緯六十七度半のハドソン海峡に達せるに似たり、後南アメリカの北東岸、西印度に赴きエスピニア王カコロ五世の招きに応じてカスチリアの大水先案内と成り(一五一九)サンルカル(San Lúcar)を出帆せし四船を指揮せり(一五二六)該船隊はアラジルに寄航しウルグアイ河、パラナ河を發見し、アスンシオン以下のパラグアイ河を探索し、パラナ河畔にエスピリトサントと稱する一壑を建てモルッカ群島に達するに必要なる援隊の來るを待ちしが、エスピニアより何等の援助も來らざりしを以て一千五百三十年歸航し、一千五百四十六年までイペリア半島にありしが、イギリスに歸りエドワード六世の保護の下に、バルト海を探検し、ロシアとの貿易を營めるマールトマドベンチム會社(Company of Merchant Adventure)の理事と成り、ロンドンに死せり。

**フランス(法朗西人)にも第十六世期の始頃より漁船に乗込みて、ニーハウ、**  
**ンドランド方面に往來せしものありしが、ドニー(Jean Dani)は同地の海岸を**  
**探明し(一五〇六)フレンツツの人ヴェラツツノ(Giovanni Verazzano)はフランス國王**  
**フランソワ一世に事へて北アメリカの東岸フロリダよりセントを調査し、カ**  
**ルチエー(Jaques Cartier)はカナダ方面を踏破し(一五三四—一五三三)シャンプレン**

(Champlain)はセントローレンス河を精査し、オンタリオ、シャンプレン等の湖を發見し(一六〇三—一〇八)マルケット(Marquette)はミシシビに達し(一六七二)ラサール(La Salle)は同河の流域を探明してルイジアナを占領せしが(一六八二)テクサスの海岸に於て同伴者の爲に害せられたり(一六八七)。

カルチエー(Jaques Cartier)(1491-1557)はフランスの航海者にしてサンマロー(Saint-Malo)に生れ、カナダ方面に三回の旅行を爲したり、第一回(一五三四)にテールヌーア(Terre-Neuve, 島)ベルレーヌ(Belle-Ile)海峡、ラブラドルを探索し、マドレーヌ(Madeline)諸島を發見し、セントローレンス灣の西岸を探明したり、第二回(一五三五)にはアンチコスタを探検し、セントローレンス河を廻りてカーシラガ(Hochelaga)即、現今のモンレアール(Montreal)に達し、第三回(一五四一—一四二)にはカナダの一部を占領して殖民を企てて失敗に終れり。

シャンプレン(Samuel de Champlain)(1567-1635)はフランスの探検家にして殖民家を兼ね、エスピニアに事へて中部アメリカを探索せしが(一五九九—一六〇二)フランス王安リー四世の命(一六〇三)に従ひてカナダを跋渉し力を拓地殖民に致し、ケベックを建設し(一六〇八)又北西通路の探索をも試みたり。

マルケット(Jaques Marquette)(1637-170)はエスピニア派の宣教師なり、ミシシビ河を下りてミシシビ河に達し、同河を三十四度まで探査するに當りて支流ミズーリ、ガハ



ヨ、谷をも研究したり(一六七三)。  
 ラサール(Robert Carver de La Salle)(1640—57)はミシシッピ河の流域を探索すべき任務を帯び先づ大湖地方を経てイリノイスの谿谷に入り、ミシシッピ河を下りてメキシコ灣に達したり(一六八〇)、ミシシッピの河口並に附近の海岸を精査すべき目的の下に實施せられたる第二回の旅行は不幸にして効果少なかりき。

**オランダ(阿蘭陀)人**は獨立自由の民と成りてより以來、航海術に長じ商業に機敏なるを自覺して専ら活動を土地の發見に向け、注意を貨物の集散に傾けたり、されば北東通路に就きてはバレンツ(Wilhelm Barents)(一五九四—九七)あり、南路の探求者としてはルメール(Le Maire)及シュートン(Schouten)はスターテン島、ルメール海峡、ホーン岬等を發見し(一六一五)、始めて新ギネアの北岸に沿ひて航行したり、而して南大陸に關してはカルペンタリア灣の沿岸に達して之に新オランダと命名し(一六〇六)、オーストラリア大陸の北岸及北東岸を探查し(一六一六—二〇)而して第十七世期に於ける絶好の航海者たる**タスマン**(Abel Tasman)はファンヂーメン(Van die en 現時のタスマニア)及新ゼーランドの西岸を發見して(一六四二)、オーストラリアが南大陸に接続せざるものな

ることは明瞭と成りたり。

タスマン

**タスマン**(Abel Janszen Tasman)(1624—1653)はオランダの人にしてホーン(Hoorn)に生れたるが如し、一千六百四十二年バタビアに於ける太守ゲーメン(Anton van Diemen)の命に依り南大陸發見の目的を以てマウリシアスに派遣せられ、同年十月八日同處より南緯四十四度と四十九度との間を東南東に航走し十一月二十四日南緯四十二度二十五分に於て新しき土地を發見し、之にファンヂーメンズランド(Van Diemens Land)の名を與へ、東航して十二月十三日スターテンランド(Statenland)(新ゼーランド)南島のフアウル非ンド(Foulwind)岬に達し、之より北方に進みて翌年一月二十日トンガ諸島の南部トンガタム(Tongatabu)及エツア(Eua)を翌月フィジー諸島を發見し、四月一日ビスマルク群島の新メクレンブルグ、同十四日新ボンメルンを訪ひ、六月十五日を以てバタビアに歸着せり(一六四二—四八)、第二旅行(一六四四)に於てはニューギネアとオーストラリアとの離續を探明すべく途に上ほりしがカルペンタリア灣の東岸と西岸とを探索したるに過ぎざりき。

**ロシア(露西亞)人**は領土の擴張を圖りて地理的知識の範圍を増大したり、コザック兵は統領イェルマク(ermak)の指揮の下に始めてシベリアに入り(一五八〇)、シビル(Sibir)を滅ぼし(一五八〇)、トボルクを建て(一五八七)、河流を利用してタイガ(Taiga)を踏破し、イニセイ河に到り(一六一〇)、レナー河に達し(一六一

三〇)スタノボイを越え海岸に出でて海洋を望見するを得たり(一五三九)以上記述せし如く西洋諸國が東方地方に到達するの商路を發見せんと蹶起し攻略を圖り布教に従ひし際のアジア諸國の概況を知らしめんとす。元の亡びて明朝の起るや太祖は官制を改め封建の制を立て、律令を改定し、學校を起し、成祖皇紀二〇六三—二〇八四は北征を試み南方を經略せしことあると、爾來内には宦官威福を擅にして朝政を亂り、東林黨起りて政争止まず、外には北虜南倭の患あり、朝鮮を援けて財政は困難に陥り、滿洲の勃興二六一七ありて國勢日に衰へ、進みて事を海外に圖るの迫あらざりしかば、泰西人の往來少なく僅に布教に當りしもの滞りありしに過ぎざりき、然るに清の世祖西紀一六四三—一六六一は漢土を一統し、聖祖一六六二—一七二二は尼布楚條約を結び、内外蒙古を征定し、世宗西紀一七二三—一七三五は西藏を征服し、高宗西紀一七三六—一七九五は天山南北の兩路を併はせ、朝鮮、緬甸、暹羅、安南の諸國の朝貢を觀るに至れり、斯の如く國威外に張りて、百般の制度内に備はり、大に學術を奨勵し、世祖はアダムシール(湯若望)を、聖祖はフェルプ

ースト(南懷仁)を用ひて、西洋文物の輸入を圖り、古來の曆法、數學、等を一新せしも、布教者間に軋轢起りしかば、世宗は遂に耶蘇教嚴禁の令を下したり。弘安皇紀一一九四〇の役後、我が沿海の民に元及高麗に寇するものありて、所謂倭寇なるもの起り、明の朝と成りて益甚しく、戰國の世には福建以北沿岸地にして八幡船の襲撃を蒙らざるものなかりき、又室町時代の初期に當り、天龍寺船の渡航ありて、布教又は通商の便に供せられしが、我が西國の豪家には私に明と交通して、商利に浴せしもの少なからざりき、而して西洋との交通に關しては、ホルトガル人始めて薩摩の種島島に來り天文一二年、次いでエヌバニア人も來りしが、泉州の堺港は南蠻貿易の中心なりき、然るにエヌイタ派のサブレン(沙未爾)(Francisco Xavier)の渡來天文一五四年ありて、耶蘇教漸盛にして、遠く使節をローマに派遣するものあるに至りしも、宣教の裡に政治的野心の埋伏あるを觀破するや、島原の亂(一六三七—一六三八)と成り、鎖國主義と變じ、僅にオランダ人の來往を長崎に許すに過ぎざりき。

中アジアに於ては、蒙古の疏族に帖木兒帖木兒と云ふものあり、東伐西征してア

アケバル

ジアの西半を平定し都をサマルカンドに奠め西紀一三六九其勢強大なりしも帖木兒の死するや西紀一四〇五大帝國は土崩瓦解したり帖木兒五世の孫バベルはアフガニスタンより起り印度の北西部を定めて莫臥兒帝國ムガルは建て西紀一五二六其の孫アケバルは北中印度に君臨して仁政を施し大帝の稱を得曾孫アウラングゼブは南印度を併はせて印度統一の業成りしも後嗣に賢君なく國運傾き遂にヨーロッパ人の侵略を被るに至りたり。

## 其二 後期

皇紀第廿四世期乃至現世期  
西紀第十八世期乃至現世期

第十七世期中葉頃一時休止の姿にありし探檢の事業は第十八世期の後半に至りて漸活動を再始せり然れども此の中絶期は地理學上全然徒費空過せられたるに非ず第十七世期は天文、數學、物理等の學術に關し優秀なる研究を積み精確なる觀測器械の發明改良に貢獻すること多大にして粗大的の發見時代を去りて精探細査の時代に趨きつつありし豫備的若しく

は過渡的の期間なりしなり從來發見者探檢家を誘致せし動機は通商貿易の發展一攫千金の利慾等を主とし除外例の如きは極めて小數なりしも今後實現せらるる所の探檢旅行は經濟的利益を顧みざるに非ざるも實驗材料の集蒐純正理學の研究の如き學術的趣味之が目的と成り吾人獨特の好奇心高尚奇抜の知識慾之が主眼たるを以て大遠征隊の組織せらるるや専門學者の隨行同伴を見ざることなきに至れり。

初期の學術的遠征を獎勵又は組織したる名譽は之をフランス國殊に一千六百六十六年の創立に係る同國の理科學士院(Académie des Sciences)に歸せざるを得ずピカール(Picard)がフランスの土地の實測を企てし(一六六九)を始としリッシー(Richer)はカイイニヌに於て天文的觀測を爲し(一六七二)シヤゼル(Chazelles)はントレマイオスの誤謬を訂正せんと欲して東地中海方面に於ける數處の經緯度を測定し(一六七四)地球の形狀に關するニトンの學說の眞偽を決定せん爲にクレイロー(Chirault)及モーヘルチナイ(Maupertuis)を北極圓以北の地ラボニアにゴビン(Godin)ブーグー(Bougner)及ラコンダミー(La Co-



ジェームス クック (James Cook)



マガリャエンス (Magalhães)



デュモン ダゥルプイユ  
(Dumont d'Urville)



ジェームス クラーク ロッス  
(James Clarke Ross)

南大陸

クック

ndamine)は赤道附近の地ベルーに赴きて子午線の弧を實測したり(一七三五、  
 此の測地的遠征に前後してベーリング(Bering)は二回の精探一七四一を遂  
 げてアジアの東端とアメリカの西端とを明瞭ならしめ、新舊兩大陸間に於  
 ける海峡に自己の名を遺し、又チュリウスキヤン(Tcheliousskine)は楫にてアジアの  
 極北地即ちチュリウスキヤン岬(北緯七七度三〇分)に達したり。  
 太平洋を巡航して學術的旅行を試みたるもの少なからざるも多くはイ  
 ギリスとフランスとの二國民に屬し、殊にイギリスのジェームス・クック(James  
 Cook)は當世期に於ける探檢の樞軸として賞揚せざるべからず、フランスの  
 ブーゲンブイユ(Bougainville)は「ブーゾーヌ」(Bou-dou-ne)に坐乘して世界週航一七  
 六六—六九を爲せしが、太平洋上に於てタヒチを尋ね、サモア群島を發見し  
 新ヘブライズ諸島を過ぎ、オーストラリアと新ギネアとの間に入るを避  
 けてルイジアヌ諸島を發見したり、クックは金星通過を觀測すべき委員を  
 タチヒに伴送したる後(一七六八)南大陸問題を解決せんが爲、廣く探檢を遂  
 げんと志したるが、第一回の旅行に於てはニュージーランドの海岸を測量し

第一世界週航(二五一九—二五二二)

新世界を西向的に横断して東アジヤの香料國に達するを得んが、ホルトガル人の香料專賣は破れ、エスパニア人は莫大なる利益を占めんと、是にマカリファエンスが國王カルロ一世に説きし所なりき、幸に世界週航説は容られ、五隻の船舶と二百三十九人の乗組とを得てグアドルキペルの河口を一千五百十九年九月二十日に出發し、綠洲諸島に向ひ、アラジルの海岸のリオデジアーネイロ附近に達し、四方に赴くべき水路を探索しつつ南航してリオデジアーネイロに到れるも遂に得る所なく南緯四十九度十五分に於けるパタゴニアの某處に冬籠を爲すことに決せしが、乗組員に不平を唱ふるもの多く恩威を加へて僅に鎮撫するを得、一隻の船を失ひて再び途に上り(二五二〇年八月廿四日)、現今のマッソーン(Magellan)マカリファエンスのエスパニアの稱呼はマカガ海峽の東口に當れる處に來アネスにしてイギリス的唱呼はマッソーラン 水路延長六は左折右り偶然にも水道中に進航を試みることを成りたり、水路百餘里を曲廣狭一ならず、屢々前途の閉塞に終らんことの恐れに加ふるに潮流の險惡なるを以てせしが、マカリファエンスの強膽不撓の天性は克く千厄萬難を排し一隻の船を失ひしも三週日を費して西口に達するを得たり、新大洋に出づるや一時は北走せしも、期待に違はず、アリザット(Alizat)風

定風同風の義に追手に快走して太平洋(Mar Pacifica)の賞嘆を放ちたして所謂貿易風を離れ、水天彷彿の中を航走すること月餘にして始めて寄泊地を發見せしことなり、此の間に於ける船員の辛苦には堪憐たるものありて、ビスケットは粉末と變じ、淡水は腐敗し、皮革を焙りて喰ひ、鼠肉を以て無上の珍味とし、敗血症に罹りて死するもの十有九人を算したりき、而もマカリファエンスは自若として責任を重じ目的あるを知りて他を顧みず、赤道を越え二月十三日 現今のマリに達し三月數日を経りヒリビナス諸島に着するを得たり、然るに土地の占領を試みて土人の反抗に遭ひマタム島上陸の際遊手に罹りて落命したり、其の後乗組は漸く減少せしを以て二隻の船にエスピノサ(Espinosa)及びカルパリオ(Carpallo)を載きてアルネイを経、十一月を以てモルッカ諸島に到着し、十二月に至り二隻は別れて航行し、デルカノ(Del Cano)の指揮の下に「ピットリア」號はクープ一五二二年を列り一五二二年の九月六日を以てエスパニアのサンルカルに歸着し、載貨五百三十三「ケンタル」は遠征費を償ふに足りしと云ふ。

(二七六九)オーストラリアの東岸を精査し、大礁堤に沿ひて北上しトルネーヌ海峽を通過したり(一七七二)第二回の旅行(一七七二—一七五)にはアフリカの南方に於て南緯六十七度に達し、ニージーランドの南東に於て七十一度を越え(一七七三)アメリカの南にありては南緯六十度以南に赴くと能はざりき一七七五、斯る結果は全然南大陸説を破滅せしめりたりとは言ひ難きも亦境域は大に減縮せられ僅に南極地(Antarctide)として存するに過ぎざるべし而して第三回の旅行(一七七六—一七九)に於てはペーリング海峽より極洋に入りアメリカの北端に沿ひて東航し大西洋に出でんとせしが、ハワイ群島を發見したる後、北極洋に入りしも、凍水の障礙ありて北緯七十度以上に赴くと能はざりしが故に冬籠をハワイに於てし再舉事を圖らんとせしに意外なる珍事起りて大探檢家は突然幽界の人と成りたり、ラペルーズ(一七八五—一八八)は我が帝國の近海に來航して探査する所ありしが、南航してワニコロ、サンタクルの一附近に於て破船死歿したるが如し、茲に於て太平洋は其の全岸の梗概を知悉せしめ、世界地圖に偉大なる變改を來たせしが、天文學の

進歩、造船航海の發達と大國民の奮勵に據るものなるは勿論なりとす。  
 大陸上に行はれたる學術的探檢旅行には先ニールブル(Carsten Niebuhr)の  
 アラビア踏査(一七六二—六七)に指を屈せざるを得ざるが、其のアラビア紀  
 事は今に精讀せられスコットランドの人ブル(James Bruce)はアビシニア  
 を訪ひ青ニールの水源を探究したり(一七六九—七二)又カナダ方面にあり  
 てはハーン(Herne)はコッパーマイン河を(一七七二)マケンジー(Mackenzie)は大  
 河を發見して自己の名を遺したり。

第十九世期に於ける發見旅行は其の目的に於て其の方法に於て一層學  
 術的に計劃せらるるに至れり、勿論世界の或方面即チアジア若しくはアフリ  
 カの或部面に於ては英露英獨英佛等の政治的競争ありて旅行の促がされ  
 たるものありしが殊に後半期に及びてはヨーロッパ人が殖民的大發展を企  
 圖するに當りては新に獲得したる土地の經濟状態を親しく精査するを要  
 し即チ確實なる利用と秩序ある拓殖とに關する研究を必要と爲せり、斯くし  
 て此等の遠征は正確の度に於ても遺憾の少なき有力にして且有益なる知

アフリカ

識を地理學に呈供したるなり。

第十八世期の終りには尙世界圖上に若干の白斑を殘留せざるを得ざりき。  
 アメリカ及アジアに重要な缺陷ありてオーストラリアは東岸を除くの  
 外、未知の世界たりしが、アフリカは沿岸地の背後には依然として秘密を包  
 藏せり、されば過去幾世期間に亘れる精力奮勵の結果として世界の大要を  
 了知するに至りしも、殘業遺務は未だ以て著しからずとするを得ず、是第十九  
 世期に於て遂行すべき事業なりき。

本世期に於ける探檢事業の效果頗る豊にして各方面に亘れるのみならず、  
 本業に盡力したる國民種族夥しく、特殊の目的を以て專攻的に探査を遂げ  
 たる旅行家極めて多く枚擧するに遑あらざれば地方別に基つきて主要な  
 る探檢と旅行家とを紹介せんとす。

洲	年	代	地	方	旅行家	國籍
ア	一七九九—一八〇四	南	アメリカの北部	メキシコ、等	フンボルト	ドイツ
	一八〇三—一八〇六	ミズーリ、	コロンビア		レキス及ロクラーク	アメリカ



カ		リ		フ	
一八五三	五六	ザンベジ、ロアンダ、モサンビク	リキングストーン	イギリス	
一八五八	六四	シレ、ヌヤッサ湖			
一八六六	七三	モエロ、バングエオロ、タンガン イカ、等			
一八七〇	七二	ワヂ湖方面			
一八七四	七七	コンゴ河	スタンリー	アメリカ	
一八七九	八三	コンゴ流域の占領			
一八八七	八九	アルヒミ地方	シッワインフルト	ドイツ	
一八六九	七一	河流地方			
一八七八	一八七九	クバンゴ、ザンベジア	セルバ、ピント	ホルトガ	
一八八四	八五	シレ、ヌヤッサ地方	フリトカ、ロ及びイメンス	ホルトガル	
一八八一	八七	コンゴ河の支流	キスマン	ドイツ	
一八七五	八三	コンゴ河の右岸	サフォルギアン ドブラザ	フランス	
一八九〇	九二	ベヌエ、アダマワ、サンガ、等	ミゾン	フランス	
一八九六	九八	高ウバンギ、ファシオダ	マルシアン	フランス	
一八八四	九六	北サハラ各部	フーロー	フランス	
一八六五	七二	マダガスカル島	グランデチエー	フランス	
一八一九	一八二〇	メルビル島、バンクス島	パトリ	イギリス	

兩		極		地		域	
一八五〇	五二	ベールリグ海峡より北西通路	マッククリップアー	イギリス			
一九〇三	〇六	北西通路	アムンドセン	ノルゲ			
一八七八	七九	北東通路	ノルデンシエルド	スエリゲ			
一八九三	九六	北緯八六度三分六秒	ナンセン	スエリゲ			
一八九九	一九〇〇	北緯八六度三分四分	カグニ	イタリヤ			
一九〇五	〇六	北緯八七度六分	ビーリー	アメリカ			
一八四〇	四二	南緯七八度一〇分	ジームスロックス	イギリス			
一八九九	一九〇〇	南緯七八度五〇分	ホルヒグレフィンク	ノルゲ			
一九〇一	〇四	南緯八二度一七分	スコット	イギリス			
一九〇七	〇九	南緯八八度二三分	シラクルトン	イギリス			

乙 各説

第一 ヨーロッパ洲

ヨーロッパ洲に關する地理的知識の發達は茲に詳述するの限りに非ざれども、太古の時代より地中海沿岸の地がエジプト人、フェニキア人、ギリシア人等探検と地理學 各説 ヨーロッパ洲



の間に知らるる所と成りしも、西ヨーロッパの西岸を明にしたるはイステル (Iste) の舊名、河、アルプ山脈、ピレネー山脈等を跋渉せし後なりき、フェニキア人が大西洋岸の地にガヂール (Gadir) (現時のカディス) を創建せしは西紀前十一世紀頃にして、フェセア (Phoen) 小アジアに於けるギリシアの殖民地にのり來りてマシリア (Massilia) (現時のマルセイユ) を建設せしは前六百年の頃なりしと云ふ、而して同四百五十年頃にはカルタゴ (Carthago) の航海者にヒミルコ (Himilco) なるものあり、ガデース (Gades) 即ちガヂール以北の大西洋岸を探明すべく命せられ、北航してブリタニアの南西に於て、錫の産地たるカシテリド (Cassiterides) 即ちシルリー (Silly) 諸島を認知するを得たり、然るに同三百三十年の頃マシリア人は錫及琥珀の専賣權を打破せんと欲し、マシリア生れのギリシア人ピテアス (Pythias) に委ねるに北海方面の探検を以てせしが、錫の産地たるカシテリドは勿論、バルト海方面、殊にキスチウラ附近に琥珀の採集地を精査したるのみならず、ブリタニア群島の北端に達し、夏至の日に太陽の没することなきツーン (Thule) 島 恐くはアイスランド (Island) の存在を知りて地理上に貢獻する所著しかり

ヒミルコ

ピテアス

き、其の後ケーザルの時代にはガリア (Gallia) ブリタニア (Britannia) ゲルマニア (Germania) 等に視察を試みるものありしが、キンフリッド (Winfrid) 即ち聖ボニファス (Saint Boniface) (680—755) はデボンシャー (Devonshire) に生れ、ゲルマニアに宣教して功績顯著なりしが、地理學上に資すること尠少ならざりき、アイランドの僧にしてイスタンに渡航したるものありしが、(七九五) フランス人のアンスガル (Ansgar, de Piaridie) の如きは屢、宣教師としてスウェリグの各地を旅行し、(八二六—八六二) ノルトメン (Northmen) 即ち北人はフェレル (Farer) 諸島に渡り、(八六二) 其の一人たるナッドド (Naddod) はイスタンに到り、(八六五) 九世紀の終りにはノルゲの人オテル (Othel) は北岬に達し、ラボニアを経てカンダクス (Kandalaks) 灣に達せり、又東ヨーロッパに關しては多く知る所なかりしが、キエフの僧ネストル (Nestor) (1056—1113) はスラブ人并にロシアの創立等に就きて貴重なる記事を遺せしも、西ヨーロッパの人が之を知るに至りしは後の事に屬せり、又プラノカルピニ (Plano Carpini) は一二二〇年を以て法皇イノケント四世の爲に蒙古に使せし際、歸途をロシアに取りてキエフを訪

ナッドド

オテル

ひたり然れどもモスコビヤ(Moscovia)の地圖を得たるはドイツの外交家ヘル  
ベルスタイン(Helberstein)がツールの朝廷に前(一五一七)後(一五二六)二回赴  
きし頃なりしも事實の世に知られしは其の後(一五四九)にしてイギリスの  
商人ジューキンソン(Jenkinson)が二十五年(一五五七—七二)間に數回の往復を  
爲してヨーロッパの東西兩部間に於ける政治通商上の關係をして漸次に繁  
からしむるに與りて力ありしなるべし。

斯くの如くして十字軍(一〇九六—一二〇七)の影響を受け、遠洋航海通商  
貿易の發達を見たる頃よりヨーロッパ各部の事情は漸く知悉せらるるに至り  
しが、先進者たる西方人は商路の探索に誘はれて北東に來航するものあり  
てチャンセロン(Richard Chancellor)の白海キローゴー(Hugh Willoughby)のノ  
ヤゼムリヤ(一五五三)ペンツ(Willem Barantz)のカラ海(一五九四)ペンツ及  
ヘルムスケルス(Hemskerk)のスピッヘルゲン(一五九六)ヤンマイイオン(Jan Ma-  
yen)の同名の島(一六一一)等の發見を實現せしめたり、茲に至りて本洲の境域  
は確定せられ僅に第十九世期の後半に於てエステルライヒの航海者バイエ

ジューキンソン

ペンツ

バイエル

ル(Paver及ワイブレヒト(Waprecht)の發見(一八七三)第十八世期に出版せられた  
の著書に依ればオランダの船長コルネリスロウレン(Cornelis Roule)の發見したる群島  
はノロヤセムリヤと經度を同じうし、北緯八十四五度に亘るとあればフワンツ  
の群島と同一のしに係れるフワンツヨゼフ群島の追加ありしのみなり。

爾來本洲の各地に於ける探檢は其の數極めて多くして詳記するを得ざ  
れども、或は經度緯度の實測と成り或は山岳河流の調査と成りて何れも精探  
を旨とせるが、地圖の作成にも進歩改良の觀るべきものありてオランダの  
メルカトル(Mercator, Kaufman)(1512—94)は天と地との二球儀を作りて高評を  
博し、ブトレマイオスの附圖(一五七八)及大アトラス(一五九四)を印行し自己  
の創意に出でし新式の射影法に依りて海圖を製したり(一五六九)フランス  
のドリーヌ(Guillaume Delisle)(1675—1726)は實測の結果、其の他信用すべき材料  
に基づきて訂正を加へたるヨーロッパ、アジア、アフリカ等の新地圖(一三四圖)  
并に一の地球儀を作成して製圖上の一新時期を爲し、カシニ(Casir-François  
Cassini de Thury)(1714—1884)はフランスの大地圖(百八十葉)の作成に盡力せし  
が、其の子ジャンドミニク(Dominique Cassini)(1748—1845)の助力に依り四

メルカトル

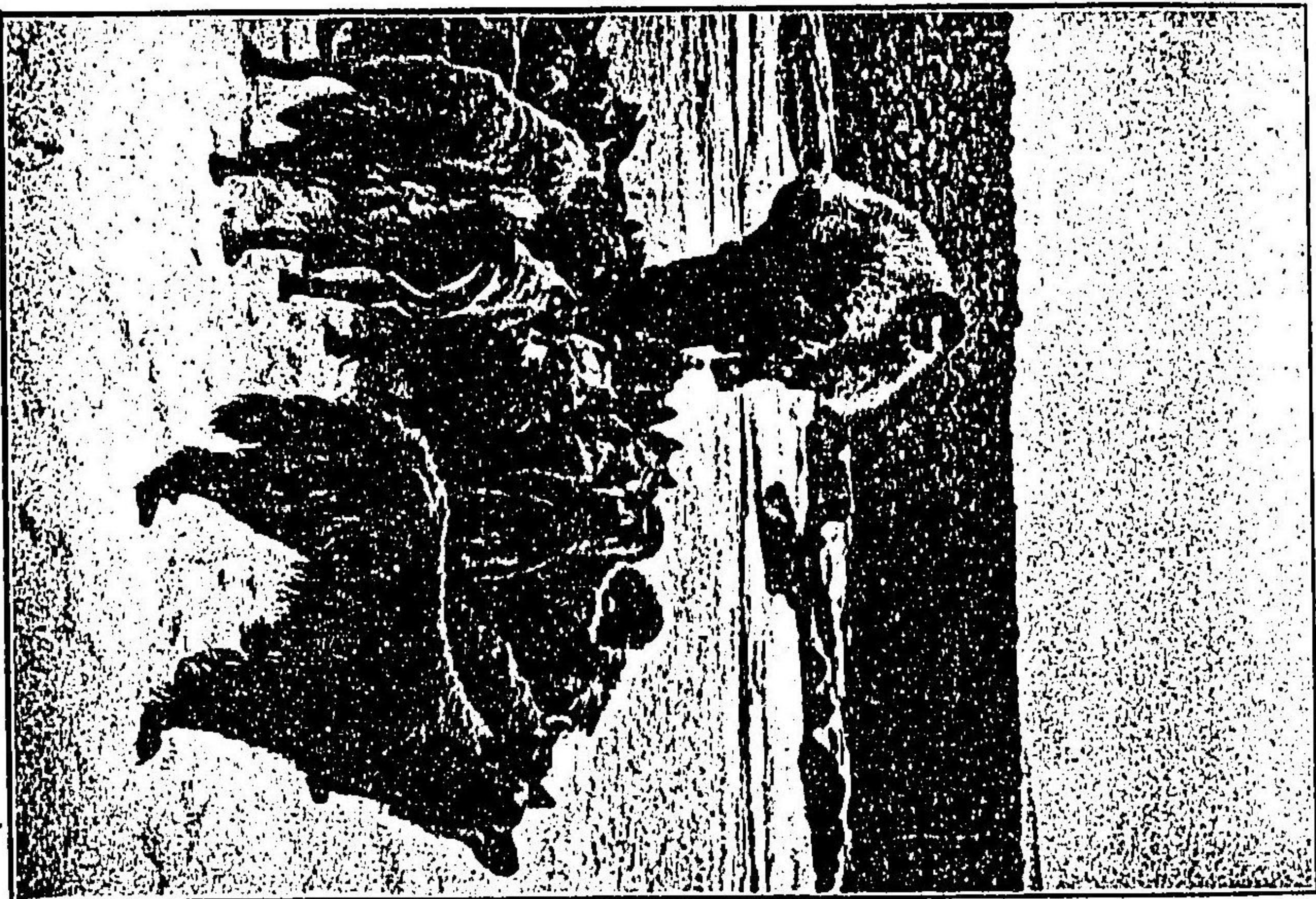
ドリーヌ

カシニ

十九年(一七四四—九三)の繼續事業として完成を告ぐるに至りたり。  
 第十九世期に入りては研究に一段の進歩を觀しが、旅行家探検者の數益、  
 多く地質、氣象、天産等各方面に普く查明せられ、細目に亘りて考覈せられた  
 り、由て茲には數項を掲げて一斑を記述するに止めたり。

アルプ山脈

本山脈中に於ける高峰の攀登を試みるに至りしは第十  
 六世期の頃なりき、ピラチヌス山に先登を遂げしはシュワイツ人グスネル(Gu-  
 se)にして(一五五五)シムメル(Josias Simler)はアルプ諸山旅行案内(Commentarius de  
 Palpius)を著し(一五七四)ワグネル(J. Wagner)(一六八四)エベル(Ebel)(一七九三)  
 も亦同様の書を公にしたり而してアルプの科學的研究はソーシール(Hor-  
 ace Benedict de Saussure)がモンブラン(Mont Blanc)に二回一七七八七六攀登したるを  
 以て始まり、爾來エスヘルホンデルリント(Esher von der Lintb)カークーギー(Hügel)  
 フォーベス(Forbes)アガシス(Agassiz)デソール(Desor)ホインギー(Ed. Whymper)ブノ  
 ヲ(Payer)ソントラル(von Sonklar)等の探查研究ありしが、アルプ俱樂部はイギ  
 リス(一八五七)、エステルライヒ(一八六二)、スイツ及イタリア(一八六三)、ブラ



モンブラン種の家用犬



八月二日の慘劇

### 八月二十日(一八二〇)の惨劇

ソーシヤール (Gaussire) が始めてモンブラン (Mont-Blanc) の攀登に意を留めしは一千七百六十年にありて、其の後十五年を経て四人の案内者は登山を試みしに空気の稀薄日光の強射に堪はずして中止し、(一七七五) 更に七年を過ぎて三人の案内者は攀登せしも中途にして下山し(一八八三、アルアの風趣を世に紹介せしブーリ (Bouillat) も同一年に二回の攀登を試み、成らず、一七八四年の九月ブーリは予息を伴ひソーシヤールの登山隊に加はり、海拔三七一七米突の地に到りし、新雪の爲に妨げられ、中途降還せざるを得ざりき、一七八五年二組の案内者に登山を試みしものありしが、其の内の一人ジャックバルマ (Jacques Balma) は大膽にも山中に一夜を過し、登途の方針を定め、歸村し翌年八月八日を以て同人は醫師バツカール (Baccard) と共に攀登し、翌日に至りて山麓に於けるシアモニーの村氏は驚嘆の中に二人を山頂に認めたり、斯の如くして兩人はヨーロッパの最高峯に於ける先登第一の名譽を博したり、此の報を聞くとソーシヤールは直に準備を整へて登山せしも強雨の爲め果すを得ざりき、一七八七年八月一日ソーシヤールは十八人の案内者と一人の僕を伴ひて登山し、翌日を以て山頂に達し、同處に止まること四時間半にして各種の観測を遂げ、午後三時半より下山の途に就きしが、名聲ヨーロッパに響く、爾來登山を試みしもの漸く多かりしも、山頂に達せしもの少なく、イギリス人のボーフロイ (Beaufroy) (一七九〇)、ロシア人のドールテセン (D. Orthesen) 及びロザンヌのフォルスレー (Fornet) (一八〇一)、ポツブルクのロズ (Roz) (一八一二)、ポルスカ人のマテゼキ (Matezecki) (一八一八)、アメリカ人のファンレスラー (Van Rensselaer) 及びロバート (Howard) (一八一九) 等に過ぎざりき。

ロシアの宮中顧問博士ハメル (Hamel) は學術研究の目的を以て登山(一八二〇)を試みしが、不幸にして慘劇をモンブラン攀登山に特記せらるるに至りし顛末の大要を記さんと、八月十八日斷續登山八月三日の攀登はすべしと決し二人のイギリス人と共に十二人の案内者を率ひてグラヌミヤレーに到りしに天候險惡下山の外なかりしもハメルは執拗にも衆議を排して攀登を主張し、二十日午前九時頃一行は單縦列を爲して今や山頂に達せんと一大深隙二十米突を迂迴して上達を進行せしとき、前夜來の新降雪に粘着力の不足やありけん雪層長一千米突は發生して一行を誘致し生死も知れず、深隙の方へと墜落したり、先登に立たる案内者三人は深隙中に陥りて積雪の下に埋没せられたり。

ス(一八七四)等に設けられ當山脈の踏査を奨励しつつあり。

#### ラボニア

スエリゲのラップマルク (Lappmark) ロシアのラプランド

(Lapland) イギリスのラプランド (Lapland) はスカンヂナヴィア半島、ヨーロッパ大陸の最北の地なり、地積は三十八萬五千方呎ありてノルゲ、スエリゲ、フィンランド、ロシアの四國の間に分たれるも人口は二萬六千に達せざるべし、此の地方が有史時代に入りしは西紀八百七十年頃にして未だ定住者なく稀にラップ若しくはノルゲ人の來往を見しに過ぎざりしが如し、第十一世期の半頃ノルゲ人は漸くラップを臣視して外人の來往を許さざりしに、東部のラップはカタリアに接觸せしが故にノブゴロッドの首長に服従するに至れり、斯の如くしてラップの存在が始めて世に紹介せられしは第十二世紀の終りにサクソングランマチクス (Saxo Grammaticus) が著作せるダンマルクの年代記 (Gesta Danorum) に筆されたるに依れり、其の後四百年を経たるに拘らず、スエリゲ人はラボニア及びラップに就きて漠然たる概念を有するに過ぎざりしかば國王カルル十世は數學者二人を派して天測を爲さしめたり(一六〇〇)さればシマ

ンナ(Joh. Seiffert)は此等の材料を蒐集して一書(Laponia Illustrata)を著し一八七〇其の他ルギヤール(Regnard)の旅行記一六八一)オランダスベキヤ(Olaus Rudbeckii Filii)のラボニア紀行(一七〇二)牧師フグスツルム(Höjström)のラボニア旅行記(一七四六)カヌトレーム(Canut Leem)の貴重なるラップ十年間宣教(一七四八)等ありて益々光明現はれしが、科學的探査にはリンネ(Carlo Linnæus)のフロララボニカ(Flora Lapponica)(一七三七)モールヘルチャイ(Maupertuis)の地球の形状(一七三八)ありしが最著しかりしは鑛物學者バン(Leopold von Buch)の踏査なり(一八〇六)爾來幾多の旅行家殊に博物學者の精査に係る所多く土地の狀態、民情并に住民の體軀、氣質、風俗等を熟知するに至れり又地圖に關してはヘルムリン(Hernelin)及ワールンベルグ(Wahlenberg)の作成(一八一三)したるものは海岸線、實測の結果に依りて再三修正を加へたりを除く外現時に於けるも尙ほ基礎たるべきの實を備ふと云ふ。

### 地中海

フランヌのメヂテラネ(Mediterranée)・ヌス・ビニマ及タイタリアのメヂテラネオ(Mediterranée)・イギリスのメヂテラネア(Mediterranean)・ドイツの

ミテラメーア(Mittelmeer)・ロシアのスレヂヂムノイエモレ(Sredizimnoe more)にして孰も地中海の意なれども近世ギリシアのアスプリタラッサ(Aspri Thalassa)及アラビアのバールサフド(Bahr Saft)は白海即好海(マリタラッサ(Mari Thalassa)黒海即瀛海に對する名の義にしてトルコのカラデニス(Kara Deniz)なり吾人の進歩、學術の發達、地理の歴史等に特殊の關係あり、上古にはフェニキヤ、ギリシア、ローマ等の活動を見、近代には大發見の中心たりしのみならず、スエズの運河は地中海をして再々交通上の要路たらしむるに至れり、されば古來本海は重要視せられて研究を積みしが、ローマの技師バルトロメオクレスセンシオン(Bartolomeo Crescenion)の著作に係れる「地中海の航行」(della Nautica Mediterranea)の公にせられし後(一六〇二)尙ほ暫く、ブトレマイオスの經緯度表に誤謬の存するを悟らざりき、然れどもスネリウツス(Shellius)及ガッセンヂ(Gassendi)がカルタゴの緯度に誤りあるを發見せしより、バイレセ(Peiræse)は地中海沿岸の要處に於ける經緯度の蒐集に力を致せしが、マルセイユとアレクソとの經度の差はブトレマイオスの表に依れば四十五度なるべきに實際は卅度に過ぎざりき、茲に於

てフランスの理科學士院はドシヤゼル(De Chazelles)に委ぬるに東地中海の沿岸に於ける要點の測定を以てし、其の結果に基づきてドリール(Guillaume De-  
 [三]は地圖の改定を試みたり、其の後ゴーチエ(Gauthier)は實測(一八一六—一  
 九に據りて改正地圖を大成し、ドーシー(Daussy)及ケレー(Keller)は二回(一八五九  
 の訂正を加へたり、又イギリスの海將スミス(Smyth)は地中海の測量に關し該  
 博なる一書を著し、自己の名は勿論ゴーチエを始め、ボーフォール(Beaufort)  
 チャモン、シャルブイユ(Dumont d'Urville)、グラープ(Graves)、スプラット(Spratt)等の芳名  
 を後世に傳へたり、而してフンボルトも亦其のコスモス(Cosmos)中に文化の  
 中心に就きて光明ある記述を遺せしが、群來したる旅行家は沿岸の各部に  
 關し、近世の學術が許與する限りに於て精密なる實測探査を遂げたり。

#### イスラント

ダンマルク人のイスラント(Island)、イギリス人のアイストラ  
 ント(Iceland)は往昔マリシア人のビテアスがツールとして始めて西ヨーロッパに紹介したる島にして、アイルランドの僧ヂクイル(Diain)が著作したる地理書(八二五)に依れば、發見は西紀七百九十五年以前に於てアイルランドの

宣教師が遂げ得しものと爲さざるべからず、ヂクイルと年代を同じうせしアルフレッド王は『北方諸國の地理』と題する書中にチラ(Thia)と呼びてイスラントを記述せるあり、第九世期に於てノルトメンのナドド(Naddoens)の漂着(八六一)ありて、スエオランド(Sjoland)の國と命名せられ、ガルダルスフルン(Gardar Starson)の來訪(八六四)ありて、ガルダルスホルム(Gardarsholm)の岩礁と成りしが、フロッケ(Floke)の探査ありて、遂にイスラント(Fis-land)地と唱へらるること成りて、今日に及べり、而して此地に移住して始めて拓殖を試みしは、インギオルフ(Ingiolf)及ラ胤(Laif)なりき、第九世期の末、爾來四百餘年を獨立に過ごし、ノルゲに屬し(一二六二)、ダンマルクに領せられ(一三九七)、漸次に開け來たりしは事實なるが、秩序ある探査を施行するに至りたるは第十八世期の中葉にして、オラフセン(Eggert Olafsen)及ポベルセン(Biarne Povelsen)の探検(一七五二—一七五七)を始とし、トロイル(Uho von Troil)の報文(一七七二)、オラフス(Olaus Olavine)(一七七五—七七七)の紀事并に地圖は世に知らるるが、尙ほ其の他に、ヘンデルソン(E. Henderson)(一八一四—一五)、バルニエー(Xavier Mar-

men(一八四〇)等の視察報告あり。

### 住民

ヨーロッパの住民は面相骨格の如き出生的差異、欲望、生活の如き個人的利害の存するに拘らず、交通の便、貿易の利の發展するに従ひて思想の交換、百貨の融通盛に行はれ、相互的關係益、深く各派の種族をして混和せしめ同化せしむる傾向あるは顯著なる事實なりとす。然れども言語及宗教に就きて尙永く久しきに差異分別を支持するなるべし。是、ヨーロッパ在住の人民を分類するに當りて言語及宗教を殊遇する所以なりとす。然るに現時に至るまでの研究の結果に據れば三派八群即ち、アーリア派のギリシア、ラテン、ケルト、ゲルマニア及スラブの五群、ウラルアルタイ即ち、ツォーラニア派のフィン及トルコの二群并に孤立のバスクアーラ(Eskana)群と爲すを適當とするもの如し、而して此等の研究事項に關して力を盡し基礎を造くりし學者に就きて著しきものを擧げんにアーリア派の五群に就きては、シュレゲル(Frederik Schlegel)の論説(一八〇八)を始としドイツのホップ(Bopp)(一八三三—四九)、シツワイツのピクテール(Ad. Pictet)(一八五九—六七)、イギリスのマクスミッター

(Max Müller)(一八六四)等ありてラテン群にはフランシスのルヌアール(Renouard) フォリエル(Fauriel) リットン(Little) ドイツのチーツ(Dietz) イギリスのユースターシ(Eustace) あり、ゲルマニア群にはグリム(J. Grimm) あり、スラブ群には シツフ、リツン(Scharif) あり、ケルト群には ロジエード、ペロゲー(Roget de Bellogues) ケードー(H. Gaidoz) あり、フィン群に關してはフィン人カストレン(A. Kasten)は重要なる調査研究を爲して有益なる著書(一八三八—六二)を遺したり。

### 第二一 アジア洲

漢族は今を去る五千年以前より本洲の東部に來り漸次に建國の實を擧げしも未だ疆域以外に出づるの要なくして、印度も亦肥沃の地に依りて來住者を誘致するに過ぎざりしが、スキア人はアジア西部沿海の地に依りて通商航行に従事し遂に印度河に到達し、アレクサンドル大王が東征して中央アジア、印度に赴きしよりヨーロッパ人の東洋に關する知識擴まりしと雖、尙ヤクサルト河及びカスピ海を以て東境とするに過ぎざりき、之に反して

南部殊に南東アジアとの交通は頻繁と成りてモルッカ群島に關する事情も知られ、西紀百二十年にはシリア人にして支那に赴きしものあり、同百六十年にはアントニウス(Antonius)の使節がアンチオキア(Antiochia)より海路支那に到着せるあり、然れどもローマ人のアジアに關する知識はギリシア人以上に出づる能はざりしが、古代に於て西人は印度支那の東岸、スマトラ、ジャバ、ボルネオ等を知りしもの如し。

中世に入りてはイスラム教の宣布に熱心なるアラビア人ありて各方面に往來するもの少なからずしてアジアに關する新報告を西方に齎らせしが、殊にイブンバッタを以て有名とす。

之より先ベルシア灣のシラス(Siras)より出でしアラビア船はアジアの南岸に沿ひて第八世期の始、既にボルネオに到り、南支那の湄浦にはアラビア人の在留するもの多く、泉州はモルッカ香料の大市場たりき、此の如くしてアラビア人はチベット、バルマ等に産する珍貨を西洋に齎したるが、十字軍の東伐、蒙古人の西侵の後、プランカルピン(Plan-Carpin)(一二四六)アスリン(Ascelin)

(一二四七)ルブルキス(Rubruquis)(一二五三)等の如く基督教國より元に往復せしもの少なからざりき。

茲に至り西洋と東洋との貿易交通漸く盛況を呈し、ベネチアの人マルコポーロは東洋に旅行して久しく元に仕へしが、歸國の後、旅行談を試みて魯にアジアの地理を世に紹介せしのみならず、ヨーロッパの歴史に大なる影響を及ぼしたり。

元の代に於てはモンテコルピノが燕京に來り基督教會堂を建立せしより以來、同教徒の東洋に赴くもの頗多かりしも、明の興るに及びて西洋との交通に一頓挫を來たし、一千三百四十六年以來西ヨーロッパより東に向ふ旅行者は極めて少なかりき、第十五世期に入りては稍著名なる旅行者三人あり、第一は印度、印度支那、スマトラ及びジャバに赴けるコンチ(Nicolo Conti)にして、第二はベルシアを横ぎりカスピ海よりオルムス島に至れるバルバラ(Dosabat Barbuta)なるが、第三はサマルカンドに於けるチムルの朝廷に派遣せられたるクラビオ(Ruy Gonzalez de Clavijo)なり。



ガマ

中世の末ホルトガル人バスコタガマ(Vasco da Gama)が海路始めて印度のカリクト(Calicut)に達せしより、ホルトガル人は續々南部アジアに來り、進みてマライ群島に至り、一千五百四十二年には日本にも渡來せり、而して第十七世期に於てオランダ人フリース(Martin Gerritz de Vries)の率ひたる探検隊(一六四三)は十州島の東岸、千島の南西部、津輕海峡の外、オホータ海、樺太の東岸等を調査し、ドイツ人ケンベル(Kampfer)は日本に就きて價值ある觀察を爲せり。

フリース

イェルマク

ロシア人はコサック兵の棟梁イェルマク(Jermak Timofeev)がアジアに入りしより僅々六十年(一五七七—一六三九)を以てウラルよりオホータ海までの間を占領し、一千六百四十四年即ちオランダ人が南方より樺太に來れるの翌年を以てアムル并に樺太に進みたるが、シベリアの探検は不充分なりき、而してイェニセイを下だれる一隊が北極洋岸を見しは一千六百十年にして、レナより一方はオレネク(Olenok)他方はヤナ(Yana)まで航行せられたるは一千六百三十七八年なりき、又一千六百三十九年にはインジギルカ(Indigirka)に達し、其の後コリマ(Kolyma)の調査あり(一六四六)、此の頃バイカル湖の発見も行はれ

デシネフ

(一六四四)デシネフ(Desnev)はコリマより海路アナデル(Anadyr)灣に赴く途に於て、デシネフ岬を發見してアジアとアメリカとの隔離せるを決定したり(一六四八)。

ロシア人がシベリアより中央アジア并に支那に入れるは一千六百五十二年以來のことなり、バイコフ(Redor Baikov)は使節として燕京に赴くの際、ツァイサン湖、戈壁、長城等を見たり(一六五四)、ハバロフ(Chabarov)はアムルより滿洲に至れるが、コザックはカムチャツカを訪ひ(一六九七)、一千七百二十年頃メッセル・シムメル(Messerschmidt)は西シベリアを調査せしを以てシベリアの探査は未知の點多き北岸を除く外、略一段落を告げたり、而して北極洋を経て日本及び支那に至るの道を求むることはオランダ人バレンツ(Willem Barantz)(一五九四—一六七七)を試みしも失敗し、其の後ダンマルク人ベーリングはペテル大帝の命に基づきて二回(一七二九—一七四一)の旅行を爲して新舊兩大陸間の海峡に其の名を遺すの名譽を得たり。

ベーリング

ベーリング(Vitus Behring)(1680—1741)はダンマルクの航海者なり、ペテル大帝に事へ

て功あり、カムチャツカ方面に對する學術的遠征の組織せらるるや、ペーリングは之が首長と仰がれ、スパンゲンムルロ(Martin Spangenberg)を伴ひ陸路シベリアを通過してカムチャツカに達し、其の海岸を踏査し、アレトット列島を發見し北極洋に入りて新舊兩大陸の連横せざることを確定したり(一七二九)第二の旅行(一七四一)に於ては海峡の状態を精査するを目的としてオホータ海を経てアラスカに到りエリマス火山を發見し又北岸に赴きしが不幸にしてアソツク(ペーリング)島に於て病歿したり。

ペーリングの旅行に奨励せられ、ロシアは北部アジア及び内部の科學的調査を行ひて得る所少なからざりき、彼のムラビエフ(Muraviev)及びパフロフ(Pavlov)(一七三四—三五)の後繼者たるマリギン(Malygin)及スクラトフ(Skratov)(一七三七)の旅行ありてオブ河に達することを得、オフジン(Offsin)等はイニセイに至れるが(一七三四—三七)ラプテフ(Laptev)はハタング灣よりタイムイル灣に赴き(一七三九—四〇)チリウスキン(Tscheljuskine)はイニセイとビエシナ(Bisina)との間を調査(一七四二)せるのみならず、翌年五月十九日アジア大陸の極北點北緯七七度三〇分を廻航せり、又レナ河以東に就きてはラシニウス(Lassins)一七三五、ラプテフ(一七三六)ありと雖、後者はインヂギルカ

チエリウス

(一七三九)熊島及ゴリマ(一七四〇)を経てバラノフクリッペン(Baranowkippen)(一七四一)に至りしのみにして其の以東は未だ不明なりき。

太平洋方面に於てはペーリング、ステレル(Steller)チリコフ(Tschirikow)等ありてカムチャツカの東岸に於けるアワチ(Awatscha)灣を出發し(一七四一)初、北に赴き次に北東に向ひ、チリコフ及びドリール(Delisle)はプリンスオブエールス諸島を、ペーリング及ステレルは北緯五十九度のプリンスオブエールスランドに於てモンターグ(Montague)島を發見し、コヂアク(Kodiak)諸島、シマギン(Schumagin)諸島、アレウト諸島も檢出せられたり、其の後アジアとアメリカとの間に於ける諸島はロシアの海獸捕獲者に依りて徐に探檢せられたるがアメリカの海岸はクック(Cook)の第三回旅行の時始めて精査せられたり、而してクックは兩大陸の分離せるを確めて一千七百七十八年北岬に達したれば此の時代に於てアジアの北岸は北岬とバラノフクリッペンとの間を除き全部世に知られたり、然れども東岸に於て尙不明に屬する所あり、樺太十州島大陸の間即ち之なり、千島諸島の二三は一千七百十一年より一千七百十三年

クック

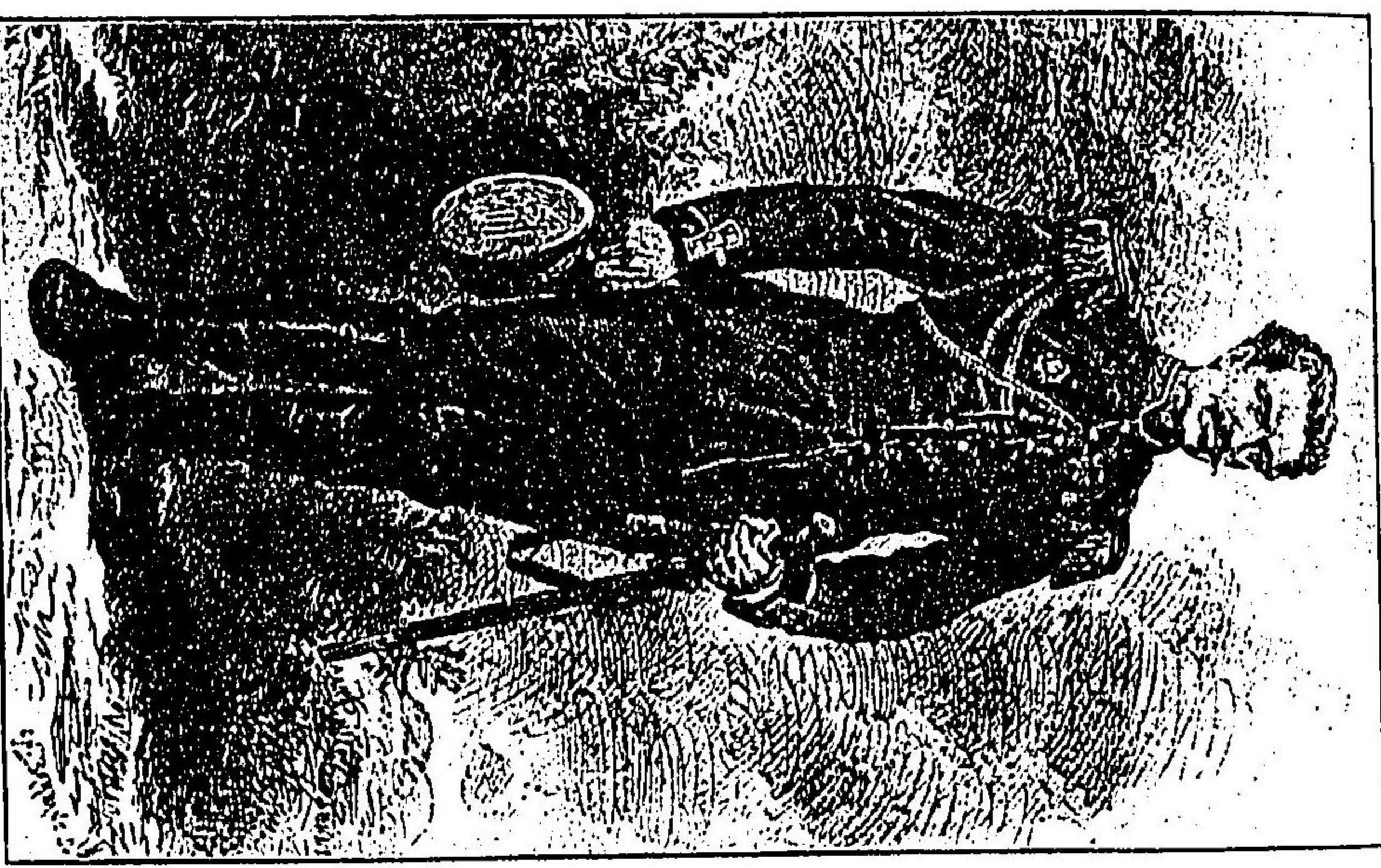
に亘りてカムチャツカより発見せられたるがラペルーズはツックの航海の後九年即ち一千七百八十七年八月九日を以て十州島と樺太との分離を決定し彼の名を海峡に残せり。

ラペルーズ(Jean François Galoup de La Pérouse)(1741—88)はフランスの人にしてアルビ(Albi)附近に生れたり、一千七百八十五年フランスを出發せる探險隊の長としてアジアの北東岸に來り、日本海より宗谷(ラペルーズ海峡)を経、ブリス海峡を通過して太平洋に出でたるが船破壊し、ニコロ(Nikoro)島附近にて命を失へり。

一千七百十一年ワギン(Wargin)がリエホン(Ljachow)島を発見したる後、リエホフはケッセル(Kessel)、コテルノイ(Kotelnoi)(一七七三)、マダイエフ(Faddejev)(一八〇五)新シベリア(一八〇六)の諸島を探検し、其の後ヘデンストローメ(Hedenströme)(一八〇九—一一)アンジャー(Angoo)(一八二三)、バンゲ(Bunge)及ポトル(von Toll)(一八一五—一八二六)の精査あり、ベリー(Berry)はツランゲル(Wrangell)の地が一小島に過ぎざるを證し(一八八〇—八二)此の頃有名なるノルデンシルド(Nordenskjöld)は北東通路問題を解決したり(一八七八—七九)而してノルデンシルドの「ヘガ(Vega)號の幸福なりしに反してドロンダ群島を発見(一八八一)せる「ドロン

ラペルーズ

リエホン



プルトウセルカスキー (Pjotr Semjonov)



スヴェンヘディン (Sven Hedin)

### 探検と探検者

探検を企圖し之を實行するの次第に就きては探検の動機と目的及び探検者の資質と運命並に實行上の困難を考察せざるべからず。

探検の動機に關しては時代の要求に伴へるものに經濟的の商路、市場の探求、殖産殖民の誘致等あり、政治的の攻略防備、等あり、宗教的の傳道、參詣、等あり、學術的の各科學研究あり、個人の要求に基づけるものに好奇、冒險、信仰、名譽、利慾、等あり。又目的に關しては地文的事項に海洋、海岸、陸地、山岳、高原、河流、沼澤、氣候、氣象、林地、草地、不毛地、天産、等あり、人文的事項に種族、言語、宗教、政治、利源、工業、通商、交通、等あり。

探検者の資質に關しては勇略、知識、氣力等に就きて充分の資を備ふべきは勿論なしとも殊に趣味の多方面にして觀察力に豊富なるを取捨に巧なるを要す、而して運命は天の爲す所にして吾人の能く左右すること能はざるは言ふを俚たざるも、探検の效果に影響すること大にして探検者の成功すると否らざるは半之に基づけりと云はざるべからず。

實行上の困難に關しては自然的に海洋、陸地、地形、山岳、河流、沼澤、土質、天産、等より生ずるものあり、人為的に往人の氣質、暴風、等を始めとし政治禁制、等あり、殊に通路の便否に關しては自然的に海洋、山河は勿論、人為に關する番類、船具等に就きて注意せざるべからず。

コロンブスは當時行はし誤謬ある學說に基づき名譽と利慾とを握り、自己の報許なる航行術を信じ、斷乎として西路の探求に當りしに、奇遇は意外にも彼をして新世界の發見者たらしめし、彼が着眼せしエルトラド(Erdraed)に達し得ずして利慾を充たさめず、當代に名譽を支持するの政事的技量なくして、感世の中に末年を過しこむ。

クックは十八歳にして始めて海軍に從ひしも然も彼れは生ながらの海員なり、身體に技量に、思想に精力に備はらざる所なく、超然として學術的の探検に當り、暗黒の太平洋を縱横に航行し、南を極め北を限り、南大陸説を破り大殖民地の基を爲せり、斯る幸運兒が更に北極洋に飛躍せんとせし一朝にして、ハライ士人の舞手に曉る、奇なるかな運命！

ブルツエアルスキーとスアエンヘゲンに就きて考察を下たさば如何。

グ(De Long)の「シアンネット」(Jeanette)號は破船の厄に遇へり。

以上は主として本洲沿岸の探検を記せるが之より大陸島嶼の内部に就きては地方別に基つきて述べんとす。

#### 日本

我が國に於て鎖國主義が實施せられたる以來(一六四一—一

八五九)我が消息を西洋諸國に傳へしものは僅に長崎の出島に滞在せるオランダ人のみなりき、前後二回一六六九—一七〇二長崎江戸間を往復したるケンプスル(Kempfer)は傳來の紀事説話に自己の觀察研究に係はる事實を加へて一書(Grande Description)を公にし一七二七たるが當時にありては珍書完璧と稱せられたり、其の他の滯留者中にて名を知らるるものにはスエリゲの博物學者ツンヘルヒ(Thunberg) 第十八世紀後半頃の人、チツイング(Tsingis) 等あるも最顯著なるはドイツの醫士シーボルト(von Siebold)な、出島に在勤すること八年(一八二二—一三〇)其の間踏査觀察を試みざるに非ざるも主として和書を研究して我が國情に通じ博物、歴史、地理等に貢獻すると大なりき、又水路誌に關しては大航海者クックの後を受けしキンズ(Kinze)の司令の下に歸航の途次、我が

ケンネル

シーボルト

クルセンヌ  
テルン

本州島の東岸に多少の測量を試みしが(一七七九)ラペルーズ(La Pérouse)はオ  
 ホータ海、日本海等を航通せしも地點の測定として僅に本州の西岸に於け  
 る能登岬あるに過ぎずして(一七八七)ブローントン(William Broughton)は十州、本州、  
 九州の太平洋岸を概測し琉球の數島を豫察せしに止まり(一七九六—九七)  
 ロシアの艦長クルセンヌテルン(Krusenslern)はナヂイヒシダ(Nadieda)トネブナ(Neva)  
 の二隻を率ひて日本海方面の測量を遂げ(一八〇四—〇五)ダンマルクの「ガ  
 ラテア(Galatea)號はファンデーメン(van Diemen)海峡、伊豆七島の近海等を測量  
 したり(一八四五—四七)斯の如くして外人は開港(一八五四)に至るまではシ  
 ーボルトの書を以て唯一の良書と認めしが内には伊能忠敬ありて十八年  
 間(一八〇〇—一八一七)宇内各地を跋涉して輿地全圖を修定し、近藤重藏あ  
 り三回(寛政十年、同十一年、同十二年)擇捉に渡り邊要分界圖を製し(文化元年、西蝦  
 夷を探り(文化四年)間宮林藏ありて國後、擇捉、色丹等を測量し(寛政十三年)北蝦  
 夷即、樺太を探検し、東韃を踏査せり(文化五年)乃至(文化六年)高田屋嘉兵衛ありて擇  
 捉に漁場を設け(寛政十一年)擇捉島其の他に海路を開き(享和三年)ロシア人に

伊能忠敬

高田屋嘉兵衛

捕はれてカムチャツカに赴きしが(文化九年)ゴローニン(Golovnin)事件に盡力して  
 賞を受け故職に復せり(文化十一年)最上徳内あり、國後、擇捉を経て始めて得  
 撫に到り(天明六年)再、擇捉に寄りて得撫に赴き(寛政三年)又、樺太を探検したり  
 (寛政四年)此の外、平山行藏、松浦武四郎等ありて北地の事に従ひ、千島、樺太を  
 探明し、十州島を踏査したり。

間宮林藏

間宮林藏は安永四年(一七七五)常陸國筑波郡谷井田村上平柳に生れ、弘長元年(一  
 八四四)江戸深川蛤町に歿す、幼にして穎悟最、數理に通ず、寛政十二年(一八〇〇)蝦夷  
 地御川原と成り、國後、擇捉、色丹等を測量し、文化五年(一八〇八)には北蝦夷即、樺太探  
 検を命ぜられたり、其の一次旅行に於て樺太の南四岸白主より出船し、東岸に向ひ  
 知床岬に達し、マヌエより地味を横ざりて、クシヨウナイに出で、北航して、ナッコ(ラツカ)岬  
 に至り、滿洲の海岸を望みて、樺太の離島たることを知りたり、其の二次旅行(七月十  
 三日)宗谷發に於てトシヨカウ(北緯五十五度四十分に到り、リヨナイに戻りて海面の凍  
 結を待ちしが、トシナイに歸れり、翌年(一八〇九)トシナイを出發してウシヨロに赴  
 き、ノテトに進み、ゴロワチエ角近傍のナニオーに達し、樺太が最、東韃の地に迫る處  
 を過ぎて、黒龍江口の對岸以北に進みたるも、遂に渡溺するを得ずして、ノテトに歸  
 りたり、其の三次の旅行(一八〇九年)六月廿六日、ノテト發に於て東韃に渡り、徳初に赴きて、黒  
 龍江を下だりて、江口に出で、海路ノテトに歸りたり。

然るに維新一八六八以來外國との交際漸く親密と成り交通の途大に開けたるを以て、内外の人競ひて本邦に關する地理的知識を呈供するに盡瘁せし結果、僅々二十年にしてアジアの各地方中最く世人に知られたるもの一と成りたり、即ち外國人にはライオン(J. Rein)の生業を視察するあり(一八七三—七五)、ドラシエ(W. Duschke)及ライエイコフ(Wojakow)の地質及氣象に關する旅行あり(一八六四)ライマン(Dr. Smith Lyman)の十州島地質を調査するあり(一八七六—七八)、ナツマン(Kenneth Nauman)の日本地質の研究あり(一八七八—八五)、クニッピン(Kevin Kipping)の日本氣象研究(一八八二—九〇)あり、其の他幾多の旅行ありしも枚擧するに遑あらず、而して邦人には地質調査を始とし氣象觀測、博物採集等を実施して帝國の自然地理に大に資する所ありしが種族政治、生業等に關する事項を研究して人生地理の進歩を促がしたるもの少なからず。

地圖に關してはシーボルトの日本帝國全圖(一八四〇)ブラントン(Brunton)の日本圖(Map of Nippon)(一八七六)クニッピン(K. Kipping)の日本圖(一八七九)

等あり、イギリスの海軍々令部并にフランス海軍文庫より出版せし海圖に全圖及分圖ありて其の部數少なからず、又本邦に於て作成せられたるものには陸軍參謀本部の輯製假製、迅測、地形等の各圖あり、海軍水路部に海圖あり、地質調査所に地質圖及地形圖あり。

地質調査に關しては内務省地理局の命に依りて和田、維四郎氏が甲斐、伊豆兩國の地質豫察を爲したるに始まり(一八七八)地質調査所の設置せらるるや(一八七九)和田氏は所務を掌り、ドイツ人ナツマン(K. Nauman)博士は專ら實地調査の指導に當れり、次いで和田氏所長に進み、原田博士がナツマンの後を繼承して地質調査の方法定まり、踏査上に見るべきものありしが、同氏は病の故を以て職を辭し(一八九一)所長和田氏の去りたる後(一八九三)巨智部忠承氏(一八九三—一九〇四)、鈴木敏氏(一九〇四—〇七)を経て現所長井上藤之助氏に至れり。

原田博士原田豊吉(1859—94)は弱冠にしてドイツに赴き(一八七四)學成りて歸朝し(一八八四)地質調査所に入り専ら内國地質の調査に従ひ、次長と成り理科大學教授を

原田豊吉

兼れ(一八八六)所長和田氏を補佐し、銳意畫策、遂に地質調査の方法を完成し、山河を  
跋渉して各種の材料を蒐集し、傍、諸士の報文を参考し、日本地質構造論、日本群島論  
前編等を著し、益、深く研究せんとしたるに不幸病を得て歿す(一八九四)。

調査所の功程に就きては地圖に和文大日本帝國地形圖(百萬分一) 和文大日本帝國地質圖(百萬分一) 和文大日本地形豫察圖(四十萬分一) 和文大日本地質詳圖(二十萬分一) 府縣土壤圖(十萬分一) 等あり。書籍にナウマン博士の日本群島の地質構造、原田博士の日本地質構造論、日本群島論、調査所の地質要報、井上氏の韓國地質及鑛物産源、其の他各種の説、明書、報告書等あり。

北海道に就きては伊能忠敬が蝦夷地の南東沿海を測量せし寛政十二年を始とし、其の後アメリカ人デー(Day)中尉は精測に着手せしも僅に三年(一八七四—七六)にして中止せられしが、明治十九年再、業を起して北海道(十州)地形圖(二十萬分一)を調製するを得たり、又地質測量に就きては徳川幕府の依頼に依りてアメリカの鑛物學者ブレイク(R. Blake)及バンベリー(R. Pumpelly)が

鑛物的利源を調査せしに始まり(一八六二)十年間を隔ててライマン(R. S. Lyman)の鑛床殊に炭田の調査に従事するありしが(一八七三—七五)十三年を経て地質調査は開始せられ(一八八八)神保博士指揮の下に大成を見るに至りたり(一八九六)。

臺灣に就きては石井(一八九六—九七)井上(一八九八)齋藤(一八九九—一九〇二)等數氏の調査并に鑛床油田の豫察等ありて臺灣地質鑛山圖分一十萬臺灣地形豫察圖分一十萬の外に各種の報告書、説明書等は公にせられしが陸軍參謀本部は臺灣地形圖分一十萬を作成したり、又著籍には小藤博士の臺灣屬島地質、小川博士の臺灣諸島誌等あり。

樺太に就きては川崎氏、神保博士等の踏査ありて樺太地質豫察圖分一十萬并に地質報文及鑛物産源調査報告は公にせられ、炭田調査も實行せられたり。

韓國

西洋人が朝鮮に就きて知れる所は漢書又は和書に基づけるが、オランダ人ハメル(Hendrick Hamel)は濟州島に漂着(一六五三)したる後、十有三年の久しき抑留を脱して歸國し、一書を著して當國の事情を紹介したり

ハメル

而して基督教の傳入せらるるや(一七八四)一時は布教上順境にありしも漸  
 忌避嫌惡せらるる所と成り遂に宣教師にして害を被るものあるに至りた  
 れば(一八三九、一八六六)フランス政府は問罪の舉に出でしが効力なかりき(一八  
 六六)爾來閉鎖益々堅く邊門に於ける年市を廢し(一八六五—七五)支那の漁舟  
 を燒却し漁夫を屠殺したり(一八七〇)合衆國はシエルマン (Sherman) 將軍の死  
 に報ひんとして示威運動を試みたるに拘らず(一八七〇)豪も得る所なかりき  
 然るに日本と朝鮮との間に修好通商の條約締結せらるるや(一八七六)門戶  
 は開放せられ邦人は勿論西洋人に來遊するもの少なからざりき(グリフス  
 (Griffith) ローエル (Lowell) グロクナー (Glockner) 等が沿海地方を旅行せし後、ゴ  
 ランド (Gowland) は京城より釜山に出でカールス (Carles) は元山に達したり(一八  
 八五)而して北西部を踏査せるはベルナーストーン (Bernerston) (一八八四) ロス  
 (Webster Russ) 及 ガーグナー (Gardner) なるが殊に著しきは京城より國境に赴き  
 東岸に出でて京城に歸れるハッチ (H.C. Gutschke) (一八八三—八四) なり之に次ぎ  
 てデロトクキチ (Delotkewitch) (一八八五—八六) プラト (Vauat) (一八八八) 等あり

## 小藤博士

邦人にして半島に踏査研究を試みたるもの少なからざるが西和田氏は  
 韓國政府に仕へ北韓を踏査して韓國實用鑛物を著し(一九九六—九七)小藤  
 博士は前(一九〇〇—〇一)後(一九〇一—〇二)回の地質的旅行を試みて韓  
 半島の構造を明にし矢部氏は南韓の地質を探査し(一九〇三—〇四)日露戰  
 争の際(一九〇四—〇五)農商務省は井上氏を全羅慶尙に伊木氏を黃海京畿  
 忠清等に金原氏を咸鏡に松田氏を平安道に岡田氏を江原忠清北道に派遣  
 して韓國の地質并に鑛物的利源を調査せしめたるが其の結果は豫察的(四十  
 地質全圖、百五十并に報文と成りて世に知らるるに至れり)又韓國政府は農商  
 工部に地質調査所を設け(一九〇五)巨智部氏を招して調査の事を委ね今日  
 に至れり

地圖に就きては清國製第十八世期末、日本製(一八三〇頃)朝鮮製(一八四六)  
 の三種ありて西洋に知られたるが海岸線の測定はラベールズ(一七八七)の  
 海峡プロートン(一七九七)及ケルゼンステルン(一八〇四—〇五)の東岸、マク  
 スウェル (Maxwell) 及マール (H.M.) の西岸(一八一八)キルツ (Wills) の南西岸に於ける



叢島(一八六三)等に實施せられたり而して我が參謀本部の速製朝鮮全圖(百七十萬分一)(一八七五)上海製朝鮮圖(二百七十萬分一)(一八九四)日本製朝鮮新圖(十五萬分一)等刊行せられたり。

滿洲

間宮林藏は東韃のモトマル崎に渡り假府の所在地德楞(トレン)に到り滯留すること數日の後、黒龍江を航下して河口のヒロンケーを経て樺太の出發點ノテトに歸着したり。

間宮林藏

文化六年(一八〇九)六月二十六日七人の夷人と共に長五尋餘、幅四尺餘の小舟に乗じてノテトを發し、ラツカ岬に寄り東韃の地に於けるモトマル崎に向ひカムカタ崎に達し、ロロマチーの入江及アルコエに泊し、トウツシホーを過ぎリムシホー並にエカダムラローナに泊し、舟を曳き駆け十餘町の山路を越えてタバマチーと稱する小流に舟を浮べキチー湖に出でマンゴー河即、黒龍江に瀕するキチーに達し夫より湖江してガツヌエ、コルペー、シヤレー、ウルゲーに泊し德楞に着し、七月十日滯留すること數日、流に順ひて降り、キチドに戻り江路に依りてアチレー、カレメー、デホコー、ソーシを経て黒龍江が海に注ぐ處ヒロンケーに着し(八月二日)夫より海岸に沿ひラツカシチヤガエハース、ハカルーハーニ等に泊し海峡を渡りてノテトに歸りたり(八月八日)。



高原



湖

## ゴビ高原

ゴビ(戈壁)は蒙古人が用ふる所の稱呼にして漢人の沙漠、西洋人のデザート(Dessert)なり、海拔八〇〇乃至一五〇〇米突の高地なるも周囲の山脈に對比すれば一の間窪地を組成せり、リヒトホーフェンの説に従へば過去の時代に於てアジアの中央にありし大内海の東部に於て、當時の瀚海は海拔一五〇〇米突にありて九〇〇米突の水層を以て、チベットと天山との間に亘り、天山山脈と阿爾泰山脈との間にツンガリア海を爲せしもの如し、現時の瀚海は小高き丘陵に依りて幾箇かの盆地に分かれたれ、河流沼湖の跡を認むるの外、風化作用を蒙れる岩塊又は赤色を呈する礫石を混す、小粒の礫石の間に鹹水を湛ゆる若干のノルを観るに過ぎず、寒暑の差晝四十度烈しく風力強く、眞のゴビの地は植物の生育に適せざるも全然其の跡を認めざる底の處も多からず、粘土を交へ濕氣の多少存するも其は鐵線様の葉を有する「タリシ」(Lasiacis sp. endaus)の高き四五尺の叢を爲して二三の雜草と共に點在するを見、樹木は殆ど絶無なるも山麓に近づくに従ひて草地と變じ駱駝の飼育も行はるるなり。

## ロブノル

ロブノルはカラクランとカフクルランとの兩湖より成るも、平底の盆地に於けるタリム河の氾水域に外ならざれば、湖岸定まらず、増水の際には遠く平地を潤はすも減水に至らば此處彼處に沙濱露はる、平均水層は一米突にして八〇乃至九〇種を常とし二米突に至るは極めて稀なり、蘆の繁茂は西より東に赴くに從ひて漸く甚だしく六米突の高に及べるあり、されば東部のカラクルランは東又は北東の強風吹くも水面穩なるが、西部のカラクランに於ては湖水自由なれば波浪起り易く西湖にカラクランの意の名ある所以なりとす、而して東端は乾濕緊等の地に屬し、土砂は成ひて濕氣を吸收し、死地は漸次に生水を製ひてロブノルの西漸衰退の因を爲せり、又湖水は概し淡質にして鹹味を帯ぶるは特殊の區域に限られ、結水期日は十一月の中旬又は下旬より三月の中旬に至るを常とし、氷層は三〇乃至五〇程なり。

ロシアのミッデンドルフ(De Middendorff)はアムル江岸地方を探查(一八四五)してオホータ海及アムル灣殊にアムル河口附近の實測製圖を促し(一八四七—四九)海軍士官はアムル江をシルカ河まで溯航して流勢、流向等を精査したり(一八四九—五四)然るに愛琿條約(一八五八)は滿洲を二分し、其の東半の沿海部即、黒龍江の南、烏蘇里の東に於けるものをロシア領アムル州と沿海州の一部爲し、殘存の部分は依然滿洲と唱へられ、又東三省と改稱せられしが、ミキエ(Michie)の來訪を受けたる後(一八六一)クローバトキン(P. Kropotkin)は黒龍江省の地を探查し、ツソルゼン(Oussolzeff)と共に松花江を溯航して吉林に到れり(一八六四)日本より當地方を経て北蒙古に赴きたるバスマチアン(Adolf Basian)ありしが(一八六四—六五)イギリスの宣教師キリアムソン(Williamson)は吉林省を精探し(一八六八)ロシア人のバラヂウス(Paladius)は北京を出で盛京を経て吉林、齊々哈爾を過ぎりて愛琿に達したり(一八六九)此の外尙、烏蘇里の流域にリードルフ(Lindorf)ブルツェルスキー(Przewalsky)ヴェニウコン(Venjoukon)の踏査あり、北西部にフランスの宣教師ノワルジャン(Norjean)吉林省にイギリス

スのフレンミング(Fleming)ロシアの大佐バラバチ(Barabach)の來探ありき而してフランスの旅行家にマイイーシロン(Mally-Chalon)及ボンノワメシムン(Benoist-Méhin)ありて盛京より吉林、寧古塔を経てダンブ、イネ(D'Anville)灣に出で(一八八三)イギリスの探検者にジームス(James)ヤングハズバンド(Youngusband)(一八八五)等ありて松花江の流域を跋涉したり、日清戦役の際(一八九四—九五)巨智部、鈴木、の兩氏并に神保博士は滿洲の南部に旅行して調査する所ありしが、其の結果は二回一八九八に公にせられたり、一九〇三年ラッセル(Russell)は北京を發し熱河を過ぎりて興安嶺の東に出で齊々哈爾に到達し、エーデルスタインス(Eitelstein)は遼陽以東の地に地質的踏査を試みたり而して三十七八年戦役(一九〇四—〇五)前後には我が邦人の各方面に亘りて調査を遂げしが、小川、金原、大井、上川、崎、阿部、福地、吉田、の諸氏は南滿洲に赴きて鐵産的利源を調査し地質、地形等に就ても亦得る所少なからざりき、又フランスのシヤノンク(Edouard Chavannes)は北漢及南滿に於て考古學的旅行を爲し(一九〇五)小川博士は間島の地質鑛床を調査し、鳥居氏はシラムレン及興安嶺地

方に旅行したり(一九〇七)。

**漢土**

清國內部の旅行は一千八百六十二年より始まり、ブラキストン(Blakiston)は揚子江に従ひて上り、エリヤス(Noy Elias)は黄河の下流地方に赴けるが、基督教の宣教師にして地理學的事項を報告せしもの少なからず、前にエック(Hue)及ガルー(Galée)が漢土及西藏に旅行(一八四四—四六)せる後、デイビッド(Armand David)は生物學的調査に従事し(一八六二—七四)アメリカ人バンベリー(Pumpelly)は北支那に(一八六二—六三)ドイツ人リヒトホーフエンは漢土の各部殊に北部に旅行して一大効績を残こせり(一八六八—七〇)。

リヒトホーフエン

リヒトホーフエン(Ferdinand Freiherr v. Richthofen)(1833—1905)はカールスルーヘ(Karlsruhe)に生れ、マルリンに歿す、一千八百五十年より一千八百五十二年までアレスラッ大学にありしが、其後マルリンに於て研究を續け、一千八百五十六年ドクトルの學位を得、此の年南部チロールに地質學的旅行を爲し、フーの地質研究所に入りしが、一千八百六十年マルリンに歸れり、同年公使館書記官の資格を以て東アジアに赴き、セイロン、香港、上海を経て日本に滯留すること五月、一千八百六十一年上海に至り而して臺灣、フィリピン、セレンベス、ジャバ及びシアムに旅行せり、一千八百六十二年バンコクよ

リの歸途カルカッタまで至りしが、轉じてサンフランシスコに航し以てカリフォルニアの火山岩及び礦物を調査せり、其の後復た上海に赴き清國內に七回の旅行を試み、一八六八—七〇、一千八百七十二年ドイツに歸り大著たる『支那』の第一卷(一八七七)第二卷(一八八二)、第三卷(一八八三)地圖(一八八五)等を公にせり、其の後ボン大學教授と成りしが(一八七五)、一千八百八十八年よりベルリン大學教授に轉じ、終世其の職にありて幾多の名論卓説を公にし地理學界を裨益せしこと偉大なり。

リヒトホーフエンの後には上海駐在のイギリス領事ババー(Colborne Baber)ありて蘭州(一八七五)、四川(一八七七—七八)に赴き、遂に打箭爐にまで進めり、ジル(Gill)も亦上海より成都、打箭爐、バモ、大理の諸都市を経過せり(一八七七)而してミハエリス(Michaelis)は蘭州に赴き(一八八一—八二)、ホシー(Hosie)は四川、雲南、貴州に(一八八二—八四)、フランスの領事ダンチー(Bons d'Anty)は重慶附近より猓猓地方、貴州、雲南等に旅行せり(一九〇二)、一千九百二年には邦人にして漢土に旅行せしもの少なからざりしが、烏居氏は雲貴地方を踏査して苗族の分布並に現状を調査したり、年を隔ててニコルス(F. H. Nichols)は重慶より大理を経てバモに到り、フルヒネル(W. Fitchner)は東岸より揚子江の上流に達し、ジェルブエークール、テルモン(Gervais-Comte Lemon)は揚子江の上流に於ける金沙江の迂曲を確めたり(一九〇三)。

一千九百四年イギリス人は香港附近のミルス(Mills)灣及シェルトア(Shelton)港の測量、山東省に於けるイギリス勢力圏内の探査を終り、領事クレメル(Clemell)は鄱陽湖並に贛江を航行し、總領事ホシー(Hosie)は四川の西部に旅行し、フルヒネルはオリンノルに赴き、ムシンス(M. Musins)並にマクアンドロウス(Me Andrews)等も黄河の上流地方を探り、ハルフェルド(E. Harfeld)は漢土の各地に旅行せしが、殊に湖南及江西の商工業に關し頗る有益なる調査を爲したり(一九〇三—〇四)。

一千九百五年イギリスのヤング(E. D. Young)は雲南よりメコン、サルキン、イラワヂの如き諸河の上流を渡過してアッサム地方に出で有益なる事實を世に紹介したり。

一千九百六年フランソワ(Francois)は廣西に赴き、ローマンツ(L. Lorenz)は膠州方面の探査を試み、マルセイ(De Marsy)は雲南の西部より前藏方面に旅行

して産金地並に磨些族の住地を踏査し、ロート(Jean Rodes)は秘密結社の情態を探り、ツッカ(Giovanni Vacca)は四川、陝西に赴きて言語並に經濟事情を研究し、ドイツの人エーゲネル(Georg Wegener)は南及東アジアに一箇年半以上を費せり、同人旅行の第一目的はライプチヒなるベデカー(Karl Baedeker)書店の爲に南及東アジアの旅行案内を作るにありて、第二はアジアに於ける最要ヨーロッパ殖民地の比較研究、其の經濟條件、行政法及び今日の政治的位置殊にロシアに對する日本の勝利が全アジアに及ぼしたる影響の研究にありたり、此の如くにしてエーゲネルはセイラン、イギリス領印度、海峽殖民地、ジャバ、フランス領印度支那、香港、膠州灣、日本、支那等に足跡を印し揚子江に於ては從來殆ど全く探検せられざりし谿谷をも調査せり、ワインゲート(A. W. S. Winters)亦數年を北漢及び中漢に送り安徽省地方に就きて大なる貢獻を爲せり、一九〇七年フランス人バコー(Jaques Bacot)は四川、雲南及西藏に旅行せしも深入りすることを得ざりき、又ドイツ人ヂール(St. Diel)は海南島の南東岸方面を探り、ファーガンソン(W. N. Ferguson)は四川の北西部に二回の旅行を爲

し(一九〇六—〇七) マドロール(Claudius Maderolle)は海南島に人種學的探検を行ひ、トゥーセン(Toussaint)は大江の可航性を探究し、ヘドリー(John Hedley)は遼河の上流老哈河を探查したり。

一千九百八年にはルジンドル(A. F. Legendre)が四川の山地を探查するあり、ドローヌ(d'Ollones)の一行が貴州の苗子、雲南の果々、前藏の西蕃を調査するありき。

### 蒙古

一千八百三十年フス(Fusz)及びブンゲ(Bunge)は西ゴビを横ざりてキプタより北京に着し、沙漠の平均海拔を一千一百米突と算し、有名なるブルツェツルスキも西ゴビを南より北に横断せしことありしが、フリチ(Fritsch)も東ゴビを横断すること二回(一八六八) シシマレン(Schichmarew)は北京よりウリアスタイに(一八六八) エリアス(Ney Elias)は北京よりコブドに(一八七二) ピアセツキー(Pisselsky)はツンガリアを通過し(一八七四) ソスノフスキ(Sosznofsky)は蘭州よりツンガリアに赴き(一八七五) デービド、リヒトホーフ、メン、イーストン(Easton)(一八七九)等も清國の北西部を探検し、バーゲル(Beger)は始

めてツルファン市を見(一八七八―七九)、ピイエフツォフ(Pievzov)なるものはコ  
ブドより歸化城に達し更にウルガ及ウリアスタイに赴き(一八七八―七九  
一千八百八十二年西ヅンガリアに向ひたり。

ポタニン

以上の外北西蒙古に活動せるものにポタニン(Potania)あり、一千八百七十  
六年ザイサン(Saihan)湖よりコブド、バルクル等を過ぎてハミに達し之よりウ  
リアスタイを経てウブサノル(烏布薩諾爾)に赴き、一千八百七十九年第二回  
旅行をタンヌオラ唐努鄂拉山脈に爲し、一千八百八十四年には第三回旅行  
を南蒙古に試みたり、此の時には歸化城より鄂爾多斯を過ぎて蘭州に出で  
黄河より揚子江に達して更にグイツイ(Guide)と蘭州との間に於ける黄河  
の上流地方を探查し、一千八百八十六年ココノル、南山山脈を調査し、歸路に  
はガオタイ(Gaotai)よりアルタイに向ひてゴビを横ぎれり。

一千八百八十六年イグナチエフ(Enatiev)及クラスノフ(Krasnov)はハンテ  
ンリ(Chan Tengri)附近の植物を調査し、其の後三年クルツィイロ(Grum Grizmalio)  
兄弟は天山に就きて多くの新発見を爲したり、而して其の徑路を記せばク

ルデアよりイリ河に沿ひて進み六千米突のデスメゲンオラ(Dis Mejen ola)を  
発見し(一八八九)、ボグドオラ山脈の北面を經、ツルファンより西ゴビに入り天  
山の南面を過ぎ、此の時ツルファンの東方に於て海面下三十五乃至五十米突  
の凹窪地を發見し、ハミより肅州を經てココノル(青海)に達し以て天山に關  
し大に其の狀況を紹介せるが、其の後カタノフ(Katanov)は人種學的の旅行を  
天山地方に行へり(一八九一)。

イギリス人も亦此の地方の探檢に従事して少なからざる効果を收めた  
り、彼のヤングハスバンドは滿洲を探檢したる後、一千八百八十七年北京を  
發し歸化城よりハミに赴き、カラシアル、アクス、カシガル、ヤルカンド等を過ぎ  
て印度のカシミルに到達せるが、此の道は先にカリイ(Carey)も通過せり、而し  
てヘル(M. S. Bell)も亦ゴビを經てハミに向ひ、之よりバルクル、ウルムチ、アク  
ス及カシガルに旅行せり、又東部ゴビを調査せるはハルナク(Alexander Harnak)  
にして一千八百八十七年北京より張家口、多倫諾兒を經てダライノル(達賴  
諾兒)に達し、數回興安嶺を横ぎり、レッシン(Ressin)は遼河の上流より東ゴビに

向ひ齊々哈爾を過ぎて愛琿に赴けり。

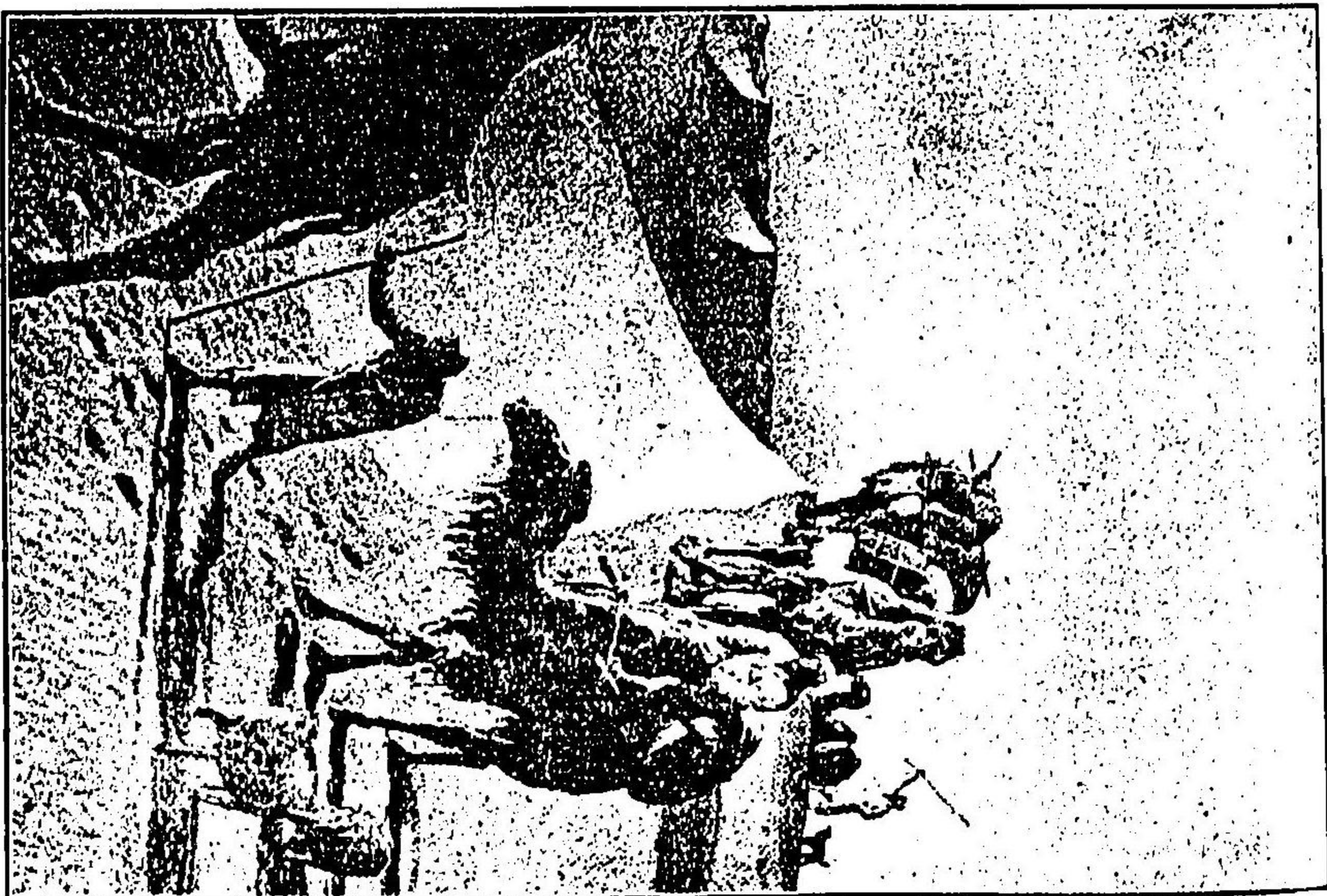
一千九百二年カメル(C. W. Campbell)は北京を出發し張家口より北東に向ひ沙地と草地との間を経て滿洲のハイラル、ウルガ元の舊都たるハラホリムを過ぎてキフタに達せり、翌年クリロフ(P. Krylov)はミヌシンスク(Minusinsk)よりサヤン山脈、ウルケム(烏魯克穆)河、タンヌ(唐怒)山脈を越えウブサル(烏布薩諾兒)を訪ひてシベリアに歸り、其の經過せる地方は殖民に適すと報告せり、此年キドストーン(George J. Kidston)及フンラバーチー(A. J. Flaverly)は先にカメルが取りし道より東に當れるものに依りて北京よりハイラルに到達し、ツーセン(Gustave-Charles Toussein)はオシよりカシガル、ウルガ、キフタを経て北京に達したるが、カシガルの北、ウチツルファン(烏什土魯蕃)地方の状況を明らかにせり(一九〇三—〇四)、又一千九百五年オブルチェフ(Obrutschew)はタルバグタイ(塔爾巴哈台)に結果多き旅行を爲してツンガリアアラタウの東麓、エビノル(額畢諾兒)の北岸等を調査したり。

新 疆

ワリハノフ(Valkhanov)はカシガルを訪ひ(一八五九)、ジョンソン(W.



アライ谷の探險



タクラマカン沙漠の砂丘

### タークラマーカーン沙漠

タークラマーカーン(Туркмуран)は清國新疆省にあり、世にデザート(Desert)不毛荒蕪(不毛荒蕪)を沙漠と譯するも當らず、戈壁には礫漠多く處々に塊石(塊石)を散らるるあり、サハラには沙漠あり、砂漠あり、岩漠あり、石漠あり、タークラマーカーンは其の沙漠なり、砂の山、砂の谷、砂の原より成れり、ホタンゲリアの東にありて北の烈風起るとき砂丘は前進して波濤の狀を呈し、高きは六十乃至百米突にして稀には百三十米突に達する、とあり、同河の西に於ては五六米突の小丘を爲し北西より南東に移動するを常とすれども稀には三十米突の高きを以て三日狀を呈するあり、動砂は山麓の「オアシス」の邊、崑崙山脈より来る淺流を埋め、タリムの左岸に渡りて天山の副脈に及び、されば河勢は漸次に衰へてタリム河に到達するものは僅にホタン河あるのみ。

### アライ峽谷の積雪

アライ峽谷はアライ山脈とバミルの北山壁との間に於ける淺染地なり、フェルガナ地方よりアライ山脈を越えてバミルに赴くと欲せばタルサック(Тарсак) (二五三七)、デアック(Djippek) (四一四六)、サリクモガル(Sarik-Mogal) (四三〇〇)、テンギスバイ(Tenghis Bai) (三五八〇)、及びカラカシク(Karakashik) (四三六〇)の五峰の一を據はざるべからず、晩冬にありては軍道に當れるタルサックは甚深く、デアック及びサリクモガルは吹雪(吹雪)の恐多く、カラカシクは路遠し、イスフアイラムの峽谷の奥底にあるテンギスバイに依るを便とす、然れども涼寒く、昇降多く、岩角露はれ、堅氷敷かれ、人も滑り、馬も滑り、蹄聲も滑り、行難を極む、雪類の跡は此處彼處に横はりて身に粟粒の生ずるを覺たり、峰の頂に近づけば積雪は二米突に及び、降路と成るも困難はなりき、マルキランを出發せしより七日程にてアライの峽谷には到りたり、雪は益々深く、蹄聲は先登に立ちて踏を開き人馬之に次ぐ、異様の行列は吹雪に包まれ、暗雲に圍まれ、咫尺を辨せずして零下二十四五度の寒氣の中に佇立せしこと一再ならず、皎々たる雪原の三日路に語るに友なく逢ふ人もなく神身共に疲を厭ふるとき、前途遂に一異點を認めたり、イサルト(キルギス人の蕃屋)は現はれたり、嗚呼此の際の喜感。

カリー

II. Johnson)はホタンに來り(一八六五)オスレンツクン(Oslen Sackun)はカシガルに赴き(一八六七)ノーソード(Hayward)はカシガルを経てヤルカンドに進み(一八六九)カウルバルム(Kaulbars)はカシガルに來り(一八七二)ゾルノム(Sir Douglas Forsyth)は二回の旅行に依りてヤルカンド及カシガルの地方を探查し(一八七〇—七三)其の同行者たりしベリャー(Bellevy)トローター(Trotter)等はバミルの東境に於ける高山キシルヤルトを越え、チルクルよりアム河畔のフハン地方に旅行したるが、ゾスノフスキー(Sosnoskiy) (一八七五)レベゲル(Regel) (一八七九)ヤングハムズバンド(Youngusband) (一八八七)等の探検者ありし後、カリー(A. D. Carey)はチベット方面よりホタンに來り、ホタン河、タリム河、ロンノルに探検を行ひアルチンタハを過ぎり、ハミ泉地に赴きツルファン、カラシアル、アクス、ヤルカンド等を経たるを以て、東經九十七度以東の中アジアの事情を明にし吾人を益したること蓋渺少なからざるものありき、而して當地方の遠征家中に一頭地を抜けるブルツェワルスキー(Przewalski)は其の第二回(一八七六—七七)及第四回(一八八三—八四)の旅行に於て重要な探查を遂げし



も、第五回の旅行を實施せざる前に於て病歿せしを以てピエフツォフ(Pevsov)はコスロフ(Koslov)及ボグダノキチ(Bogdanovitch)と共に遺圖を繼承して之を實施したり其の後オブルチェフ(Obrutchev)は地質調査を爲し(一八九二—九四)ロポロフスキ(Ruborovsky)はコスロフを伴ひて各處を探明して遺漏を補ひ(一八九二—九五)スフエンヘチン(Sven-Hedin)はタクラマカヌ沙漠、ロブノル地方、アツカタハ等を踏破し(一八九三—九七)タリム河を調査し沙漠を跋涉し(一八九九)ボニン(Endes Binin)はロブノル方面を踏破したり(一八九九—一九〇〇)。

スフエンヘ  
チン

ブルツェワ  
ルスキ

ブルツェワルスキ(Nicolai Michailovich Przewalsky, (1839—1888)はロシアのモモンヌク(Smolensk)省の人なり、陸軍に身を委ね、ワルシヤに於ける貴族學校の地理教授と成りしが、ウズリ地方に赴き(一八六七—六九)其の後アジア内部の探検に従へり(一八七一)第一回旅行(一八七〇—七三)に於てはピルツォフ(Pylov)及二人のコサック兵と共に西ゴビを南より北に横ぎり、足跡はココノル地方にも及べり、一千八百七十六年第二回旅行をタリム流域に試み、次いで第三回旅行(一八七九—八〇)の途に就けり、此の行にはエクロン(Eilon)及ロブノルスキ(Rubowski)同伴せるが、サイサン(Saisan)よりハミに出でゴビを横ぎりて南山に登り、フンホルト及リッター(Ritter)山脈を調査し、ツァイナム(Zainam)高原を經過し遂にラッサを距る二百五十料の地に至りしと、チベット政廳

の拒む所と成りしを以て其の首府に入る能はず、之よりココノルに赴き、黄河の水源地方を探査したる後、ゴビを横断し、ウルガを経てキアフタに歸り、第四回の旅行(一八八四—八五)に當りてはゴビを縦断してツァイナムに達し崑崙を探検し而して同山脈の南方に於て多くの高峰、一新山脈を發見し、ロブノルの南に於けるアルチンタハに登り、チメルチエン(車爾成)泉地に至りアルチンタハの北麓に沿ひホタン、アクス地方を過ぎてイシククル(Isik-Kul)附近のカラコル(Karakol)即ブルツェワルスキに歸り、第五回旅行の準備中一千八百八十年十月三十日を以て歿せり。

ドイツ人スタイン(M. Aurel Stein)は印度を出でパミルを経てホタン地方に來り地理的調査を遂げしが、舊地に就きて發掘を試みしに好果を得て考古學に資したりき(一九〇〇—〇二)邦人大谷光瑞の率ひたる中央アジア探検隊は渡邊誓信堀賢雄、本多惠隆、井上弘圓等より成りたり、本隊はコーカシアよりアンデシアンに赴き、之よりアライ山脈を横ぎりてパミル高原を經、新疆を過ぎカラコルムを踰えて印度に出でたるが、渡邊堀の兩氏は一行と分かれてクチャ(庫車)に至りし後、其の附近に於て古代の遺跡を探り頗る得る所ありたりと云ふ、一千九百五年バレット(R. L. Barrett)ナンチントン(Nantsinton)Ellsworth

Huntington) ブリッンホーテ (Albert Grimwedel) 等東トルキスタンに旅行し、ドラ  
コスト (de Laoste) はヤルカンドよりメリナガル (Srinagar) に赴けり。

一千九百六年アルマシー (Georg von Almasj) は アルクル (Herbert Archer) 及 バン  
リンツ (Julius Prinz) と共に天山に赴き、バンバート (B. J. Barrett) 及 ハンチングトン  
(Ellsw. Huntington) はホタンとキリヤ間を探索し、ハンチングトン は尙 ロブノ  
ル、カラシナル に達し、ツルファン 陥没地を訪ひ、ブルース (Bruce) は レー (Leh) を出發  
 して西チベット、崑崙、キリヤ、チェルチェン、ロブノル、カラノル、サチャ を經て漢土に  
 至れり (一九〇五—〇六)。

考古學的探檢に關してはドイツの考古學者 グリンホーデル (Albert Grimwedel)  
 の ツルファン に赴くあり (一九〇三) 同博士の助手たる ルコック (A. von Leocq) は ツ  
ルファン 附近に發掘を行ひ貴重なる獲物を得て歸國したり (一九〇四—〇七)、  
フランス人 ペリオー (Paul Pelliot) は クチスウルムチ、ツルファン 等の各地に發掘  
 を試み、有益なる材料を蒐集したり (一九〇六—〇八)、スタイン は第二回の旅  
 行として當地方に來り、ニア の北方に於ける沙漠中に廢屋を發見し チェル、チ

ン附近に於て舊市の遺跡を探りし後、甘肅省 を踏査し、ロブノル に向ひて歸  
 路に就き ツルサン を訪ひて 畏兀兒 時代の遺蹟を多く發見し、タクラマカス  
 沙漠の探査を遂げて レー に到着したり (一九〇六—〇八)。

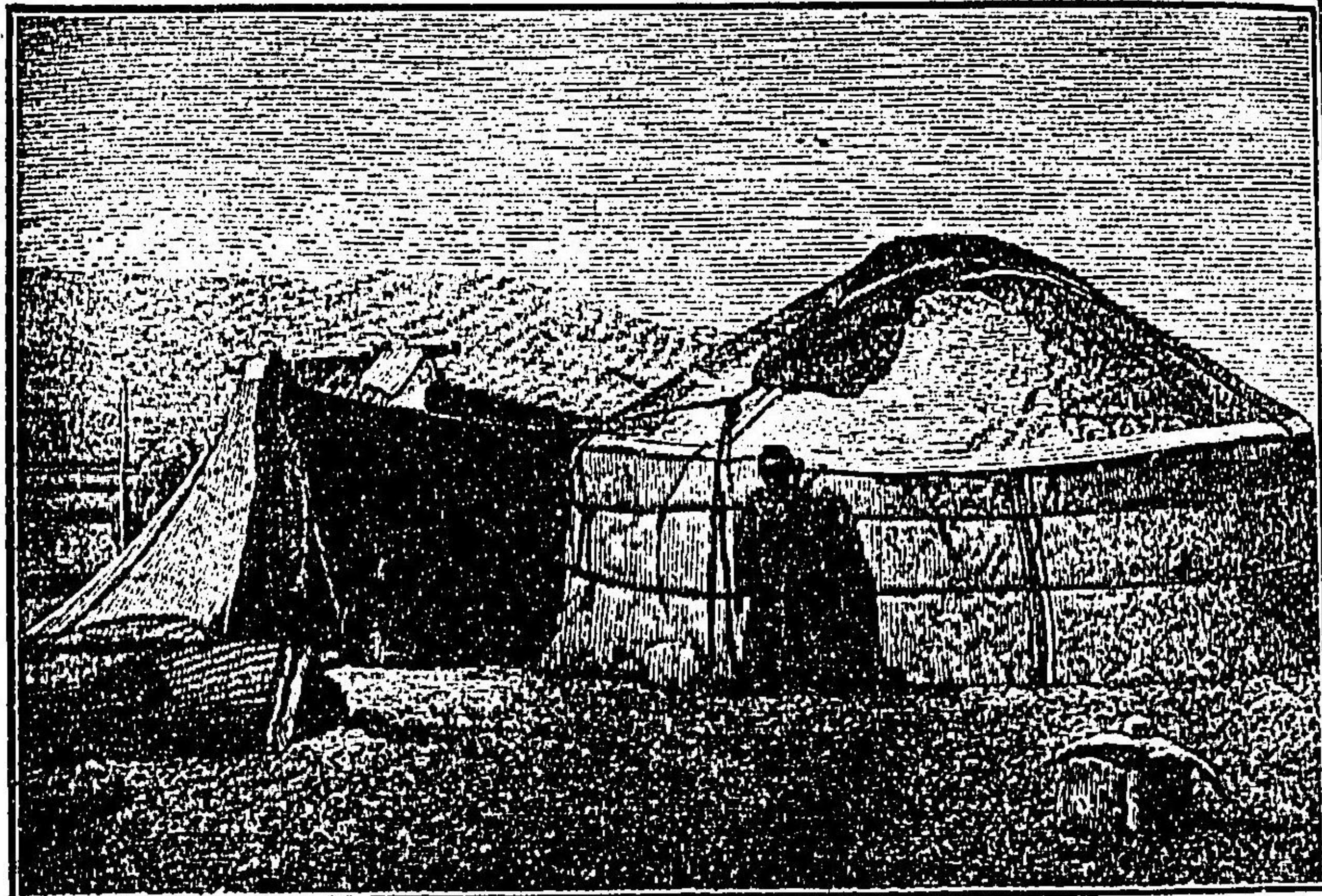
青海

フック (Ho) 及 ガベ (Gabel) (一八四四—四五) ブルツワルスキー、ロ  
クヒル (Rockhill) (一八八九) グルツマイロ (Grun-Grziniato) (一八九〇) スフンヘ  
ン (一八九七) 等の來訪を受けたる後、レスデン (Lesdain) 伯は北京より 鄂爾多斯  
 を經て 寧夏 に達し、阿拉善 の北東に於ける沙漠中に古墳を發見し、安西州 に  
 到り之より南方に進み、ツイダム を横ぎり 揚子江 の水源を見、ゲンラ山脈 を  
 越えて 西藏 に出でたり (一九〇四—〇七) ターフェル (Tafel) は 東ツイダムの  
ブル  
ン を發し、ゲンラ山脈 に向ひ、南西 に進みて 揚子江 の上流に達し、西寧 に戻り  
 更に 黄河 に赴き 打箭爐 を經て 揚子江 を下だれり (一九〇六—〇七)。

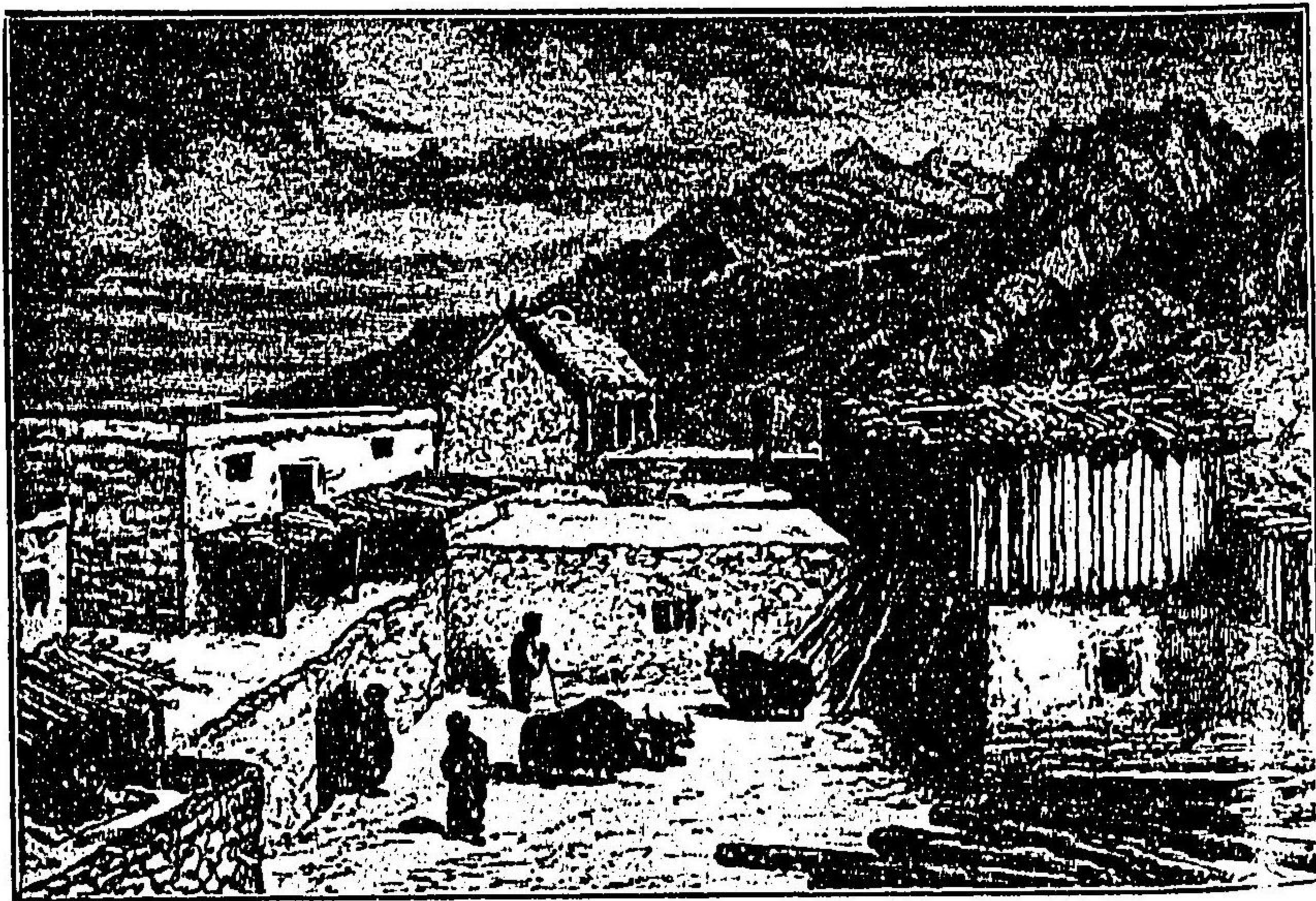
西藏

西藏 即ち チベット (Tibet) は土地の奇情と 拉薩 の秘密とに依りて探  
 檢家に興味を催せしこと大なりき、蓋し フランス の宣教師 フック (Ho) 及 ガベ (Gabel) が ルアツ (拉薩) を往訪せし以來 (一八四五) ヨーロッパ人 には一人たりと

も入蔵し得たるものなく、印度のパウナンヂ(Punna)にはチベット旅行を試みた  
 るものあるも、秘密の都に入るを得たるは唯、ネインシング(Nain Singh)(一八六  
 六とエーケー(A. K.)(Krichna)(一八七八)の二人あるのみ、ネインシングはカシ  
 ミル及びラダクに旅行し(一八五六)、プラマブトラの水源地方を踏査したる後  
 ラッサ市に入るを得たり(一八六六)、次いで印度河の北水源たるシンギチ(Singhi-  
 tschi)を發見し(一八六七)、其の後ラダクよりテンリノル(Tengri-Nor)に赴ける際  
 多くの大湖を發見し、再々ラッサに達してアッサムに歸りたり(一八七四—七五)、  
 此の外にヒマラヤを越えてプラマブトラ并にラッサ西方の高原に達せるも  
 のあり(一八七一—七二)、又シキムよりプラマブトラに進みシガツェ(Sigatse)  
 附近に達しザンボンプラマブトラをチヤン(Tschelang)まで探検せるもの  
 あり(一八七五—七六)、一千八百七十八年ヨムク(Nyomo)は東の方ギラシン  
 ドン(Gyala Sindong)まで探査せり。  
 イギリス人にしてヒマラヤの北方を探検せるものには西チベットのパン  
 コン(Pangkong)に達せるゴドキン・オーメタン(Godkin-Austen)あり(一八六〇)、其



イウルト(幕屋) [蒙古]



村落の一隅 [チベット]

の後ライアル(Ryall)はサトレンデの水源たる聖湖地方に赴きたり而して從來旅行せられしこと少なきネパール地方は一千八百八十四年ルボン(Le Bon)に依りて調査せられ、シッキムはブランフォード(Blanford)一八七九、ロバート(Robert)及ハルマン(Harman)之を探索し一八七九、アッサムのミシマ(Mischmi)及ミリ(Miri)地方はウードトルン(Woodthorpe)及ハルマン之を探索せり一八七七—七八、此の頃ヒマラヤ高峰の調査も行はれたり、カリー(A. D. Carey)はレー(Lah)附近のタンクセ(Tankuse)を發し、ポル(Pole)附近より崑崙を越えてキリヤに出でホタンに赴き北チベットを南東に過ぎりたり一八八五—八六。

東チベットには多くの探検者至りしが、デゴデン(Degodins)なる宣教師は四川チベット、バルマの境界附近に赴きて大河の上流を探れり一八七三—八〇而してチベットのザンボを以てイラワヂの上流とするの説は一千八百七十九年に於ても尙信せられしが、一千八百八十五年ニードム(Needham)及モールスワルス(Molesworth)の旅行後は全く従ふべからざることと成りき、此の外、セヘニイ(Szecheny)及クライトナー(Kraimer)一八八〇、マーチン(Martin)、ロク

ヒル J. W. Rockhill) 一八八九等ありしが、其の目的を達せずして或は甘肅陝西に向ひ或は打箭爐に歸らざるを得ざりき。

ロシア人には有名なるフルツワルスキーあり二三回チベットを旅行せしも、遂に首府に入る能はざりき、其の遺圖を繼げるピイエフツォフもチベットに來りしが深く侵入するを得ざりしこと、グロンチュウスキー (Gronbtschenski) と相似たり (一八八九) トロル (Troil) はヤルカンドドラダックの途を取りて西チベットを踏査せり (一八八八—八九)。

フランス人はロシア人に比し効績稍著しかりき、ボンバロー (Pierre-Gabriel Bonvalot) はオルレアン公アンリーの探検隊を率ひ曲城天山を経てババチクル、ロブノルに達し、嚴冬に拘らず中部チベットに進み、テンリノル地方に到りしも、ラッサに入ること能はずして、巴塘打箭爐を過ぎ、トンキンのハノイに出でたり (一八八九—九〇) チットルイドレン (Duteuil de Rhins) はグルナール (Grenard) を伴ひてアルチンタハを精査し、チベットを通過して西寧府に赴かんとせし途上に屠殺せられたり (一八九〇—九五)。

ボンバロー

スフェンヘ  
ザン

ボワー (Howe) はレーより出でて西より東にチベットを通過し (一八九二) リットルダール (Litledal) は北緯三十二度と三十四度との間に於て東西遠征を試み (一八九五) エルビー (Wallyby) 及マルコルム (Milem) は北緯三十五度と三十六度との間に於てチベットを西より東に横断せり (一八九八) 第二十世期に入りて先にロブノル地方を探明したるノルゲ人スフェンヘチン (Sven-Hedin) はタリム河の流域を調査したる後、北チベットを踏査し、一千九百一年にはラッサに入らんと試みしも之を果す能はずして歸路に向ひたるが (一九〇二) 三年間の旅程は一萬七千七百斤にして其の九千斤はヨーロッパ人未達の地に屬せり、此の外、ロシアの佛教徒バザバヒ (Baza Bakchi) ツェヨロン (Ts. Tsydikov) ナルツノフ (O. Narzoumov) は三回ラッサを來訪せしが (一八九七—一九〇二) 殊にツィビコフはロシアのツァールの保護の下にラッサに長期の滞在を遂げ、土地の事情を詳にするを得たりと云ふ。

一千九百三年アンジニール (E. Angineur) 及クロスビー (O. F. Crosby) はカシガルよりキジルダバン峠を過ぎカラコルム峠を経てレーに出でたり、雲南

より南東チベットに入れるグリーエール(Grilleres)西チベットに進めるローリング(C. G. Rawling)は孰も好果を得ざりしが、ヤンゲンズバンド(Youngusband)は遂にラッサに入れり、其の後ドレスデン(J. de Lesdain)は北京より漢土及チベットを横ざりたり(一九〇四—〇五)。

一千九百五年ニコルス(E. H. Nichols)はダーゼリンよりチベットに入りしが不幸にしてギンツェに歿し、ブラヂン(Badsar Bradjin)亦西藏に赴き、ブルース(Bruce)及レーヤード(Lazard)はレーよりタンガンバガル湖、キリヤを過ぎ、タリムに沿ひてチエルチェン及ゴブノルを過ぎ、肅州に向ひ、甘肅、山西より北京に達し、(一九〇五—〇六)。

一千九百六年カルバート(H. Calvert)はシブキ附近より印度の國境を越えてガルトク、ガルグンザに達し、ツグマイイェル(Erich Zugmayer)はタシケントよりカシガル、ホタン、キジルダパンを経、サギスタル湖附近にてチベット高原に達し、カシミルのレーに出づるを得てチベットの西部を縦断したり。

一千九百七年ターフェル(Albert Tafel)は漢江地方、オールドス、ココノル等を経

てチベットに來り、バイヤンハラ地方を踏査し、チエルクンドの僧院を訪ひ、打箭爐に赴き、清藏の境界に沿ひて北上して西寧に出で再び西向して黄河の上流地方を踏査したるが、ブルース(C. D. Bruce)及ロングスタフ(E. G. Longstaff)はヒマラヤに探検を試みたり。

一千九百八年有名なる探検家スフィンヘチンは其の第三旅行(一九〇六—〇八)に於て北西チベットの無人界を踏破し、トランスヒマラヤを精査し、インダス河及びブラマプトラ河の水源を確定したり。

スフィンヘチン(Sven Hedin)はスエリゲの人なり、一千八百六十六年を以てストックホルムに生る、幼より地理學を好み長じてストックホルム、ベルリンの大學に遊び、三回の大旅行をアジヤに試みたり、第一回(一八九四—九七)にはバミル井にタリム地方を探検して二千六百里を旅行せるが、鐵道、馬車等に依りし部分を加へば凡そ六千里に達すべし、而して其の中八百餘里は同人始めて踏査して其の地理を明にせり、此の探検はアジヤ沙漠、横断記として世に報告せられ、其の純學術的記事はペーターマン(Petermann)地理學報告書として別に刊行せられたり、第二回(一八九九—一九〇二)にはタリム流域井にチベット北部を探査し、二回拉薩に入らんとして成効せざりしもチベットを東西に通りたる後カシガルに歸復したり、其の報告は中央アジヤ及びチベット探検記と云ふ而して純正學術上に關するものはスエリゲの參謀本部より

國費を以て出版せり、第三回(一九〇六—〇八)にはチベットを探究し、遂に印度を経て我が國に渡來したり、同人がアシアの探檢に費す所前後十五年實に一大旅行家と稱すべし。

### パミル

パミル高原は東西の兩トルキスタンに接續するのみならず北西印度との關係上重要視せられ、イギリス及ロシアの兩國民は競ひて之れが探檢に従事したるが、イギリス人は機先を制したるも、ロシア人は精探上に優れるものあり、イギリス人ウード(Wood)はアム河の水源を發見し(一八三八)ドイツ人のシラギンツワイト(Hermann, Adolf, Robert Schlagintweit)兄弟はカラコルン、崑崙の兩山脈を越え(一八五六)フォルシス(Douglas Forsyth)も亦同様の探査を試み(一八七〇—七三)パミル(Pundit Fais Baisch)は南方より大パミルに進み、イブラヒムハン(Ibrahim Khan)は小パミルを過ぎ、ハイデルシャー(Haidar Haider Schud)は高原の西部に赴き(一八七〇)スプハーン(Pundit Abdul Subhan)はアムヘンチ(Amni-Pandeh)の上流を探れり(一八七四)。

ロシア人が當地方の探檢に着手せるは一千八百七十七年にして、ロマノ

フスキー(Romanovsky)ムシケトフ(Mu'iketov)(一八七七)コステンコ(Kostenko)シヘルツフ(Silverzov)(一八七八)等は高原の南東部を探究せしが、シグナン(Schinnan)はバダクシヤン(Badakhshan)地方に赴けり(一八七八—八二)。

此の如くして一千八百八十年までにロシア人、イギリス人、印度人はパミルの大體に就きて調査せしが、其の後は各部の精査行はれ、レーゲル(Albert Regel)(一八八一—八三)イワノフ(Ivanow)(一八八三)グレゴルシマイロ(Gregor Grem Grzimalo)及ミハエルグシマイロ(Michael G. G.)(一八八五—八七)カプー(Capus)及ボンバロー(Bonvalot)(一八八七)等之に従事せり、殊にイワノフの率ひたる探檢隊は始めてパミルの地質構造を明らかにし、且、其の他のアジア中部の地形山系に關して一層深き知識を吾人に與へたり。

スエリゲ人のスフエンヘデンは當高原の水誌的調査を爲して地形を明にし、ムスタハアタの氷河の踏査を兼ねて登攀を試み(一八九三)ダンマルクの人オルフセン(Olufsen)は數回の探檢を實行したるが、殊に重要視せらるるは一八九六年と一八九八—九九年に係はるものとす。

クローフル

印度支那

一千八百二十六年クローフル(Crawford)はアマ(Awa)に入りしが之よりサルキンを越えラオス地方に入りシムに旅行し(一八三〇—三七)マクレオド(MacLeod)はサルキン河口よりメコンの上流地方に赴けり(一八三七)而して始めて半島を西より東に横断せるはバスタアン(Adolf Bastian)にしてマンドレよりサイゴンに達したるが(一八六一—六三)リヒトホースンはバンコクよりマルメンに出でたり又半島の東部に關してはラゲレー(Doudart de Lagrée)及ガルニエ(Garnier)はメコンの河口より雲南に達し以て各方面に關して重要なる報告を爲したり(一八六六—六八)先之ムオー(Henri Muh)はメコンの上流地方に植物的調査を行ひ(一八五八—六一)其の後クッシング(Cushing)はサルキンの東部及シャン地方を(一八六八—七〇)ストリツカ(Stoliczka)は印度支那の西部を訪へり(一八六九—七〇)ヂュピイ(Jean Dupuis)が紅河を航行して雲南地方に往復せしより(一八七二—七三)フランス人にして雲南、四川に向へるもの少なからざりしが、イギリス人にも亦バモより南西支那に入らんとせし者なきに非ず、マルガリ(Margary)(一八七七)マクカーシ

ラゲレー

ガルニエ

マクカーシ

|| Me Carthy(一八七七)エヌテルライヒウツンガルのセヘニイ(Szechuan)クライトネル(Kreiner)ロシー(Lezy)の遠征隊(一八七七—八〇)は南西支那よりバモに出でたり而してコルクフーン(Colquhoun)は半島の北部を横ぎり又ワハブ(Wahab)と共に廣東より大理を経てバモに到着し(一八八二)ソルト(Soltan)及スタブソン(Stevenson)はバモより宜昌に出づるを得(一八八〇—八一)フランス人アルマン(Harmand)はメコンの中流地方よりユエに達するの旅行を試み(一八七五—七八)此の頭レン(Dutrenil de Rhins)はトンキン并にアンナンの地圖學的調査を行ひ、レイス(Reis)は半島の南東部の河流地方にパブー(Pavie)はメコンと支那海との間に於ける通路を探求し、キシエンホンに赴き雲南地方に入りて得る所少なからざりき。

パブー(Auguste-Jean-Marie Pavie)リフランヌのナナン(Dinan)に生れ(一八四七)サイゴン、メンコク間の地を探索し(一八八〇—八四)ルアンアラバンの副領事と成リ、クペー(Cupe)トリウム、レーフマー(Trumet-Faber)、ルフェール、ホルタリス(Lefebvre-Portalis)等と共に調査委員たること數回(一八八六—八九、一八八九—九二)にしてルアンアラバン、カンホザア、トンキン等に亘る未知の地を探明し、ルアンアラバン總理事の職に就きし後は新領土

パブー



の統治に盡瘁せし傍、幽情の調査、新地圖の作成、通路の發展等に意を用ひてフランス領印度支那の政治及び經濟に資すること多かりき。

此の外ボック(Bocock)のバンコクよりメコン河畔のキアンセン(Kiansen)に赴き(一八八五)ハルレット(Holt)の Hallett 及びホルツフーン(Colquhoun)のマルメンよりメナム、メコンに赴けるあり(一八八四)スクライフ(Seife)スウェーデンハム(Swedenham)等はイギリス領のマラッカ半島を横ぎり、ドロシクル(Delonde)アルマン(Harmand)ドリッサー(Drie)等はクラエ地峽を調査せり。

今世期に入りてはコット(Cotte)ありてトンキン、ラオス、アンナン、カンボヂア及びゴシェンシーヌを旅行し行程三千軒に達せり(一九〇一—〇四)次いでホセウタ(K. Hosens)はシムムの北西部并に北部を探り、翌一千九百五年更にバンコクより東ラオスに至れり、フランス及びシムムの境界委員は海岸よりダンレク(Dang-ruk)山脈までの調査を行ひしが、今や北部ランブラバン地方に移りたり、又ラドモーズ(N. Rudmose)ブラウン(B. Brown)シムン(J. J. Simpson)等はメルギー群島の眞珠漁灘を調査し、フリッチ(Gustav Fritsch)はアンダマン列島を

コット

ジヤンキエ  
ール

訪ひ、ヘドラム(E. J. Heudlam)はベンガル灣のアラカン(Arakan)沿岸に新に出現せる火山島北緯一九度五秒東經二四度四分二〇秒を調査し、マンシイ(Mansney)はトンキンなるラソン(諒山)の北東に於ける洞穴を探究して史前的住民の遺物を多量に得、ヘルグレン(Pellegrin)はフランス領印度支那の淡水魚に就きて學術的研究を試み、ベルナル(E. Bernard)は印度支那に於けるフランスシムムの境界調査事業に就きてバリー地學協會に報告し、ドラジヤンキエール(Lunet de la Jonquiere)はトンレサプ湖、リソフォン(Lisophon)河及ダンレク(Dang-Rek)山脈間の地方を旅行し、シンフォン(Siphon)以南の地を訪ひ、バタンバン(Batangban)を経てカンボヂアに歸れり、此の旅行に依りて波羅門時代のもものと認むべき四百以上の寺址を發見せり、之よりバンコクに赴き、シムム東部のパチム(Pachim)州、シヤンダブン(Shantabun)を歴遊し、シムムのマライ州、メナムサク(Menam-Sak)の谷地に入りき(一九〇七—〇八)。

マライ群島 マライ群島に就きてはフンツフーン(Franz Wilhelm Jungblum) フォリス(A. R. Wallace)(一八五四—六二)フォアブス(Fordes)(一八七八—八二)ハス

探検と地理學 各説 アジア洲

チアム(Al. Bastian)一八六四—六五、マイイェル(A. B. Meyer)一八七〇—七一、ワ  
ルブルグ(O. Warburg)一八八八、等を始め探検せしもの少なからざるが未だ地  
理不明の處多し。

ハーゲン

スマトラ島は一千八百七十七年以來、オランダ政府の銳意科學的調査を  
試むる所と成り、ハーゲン(Hagen)一八七九—八〇、其の他の調査あり、近年マ  
アス(Alfred Mass)はパダン(Padang)を出發し、バタンハリ(Batang-Hari)の上部を探  
り、インドラギリ(Indragiri)の上流なるクワンタン(Kwanlan)に赴き、タルク(Talok)  
より赤道スマトラを旅行し、シアク(Siak)に達せり、又フォルツ(Wilhelm Volz)は一  
千九百四年より一千九百六年までに行はれたる北スマトラ六千軒の地質  
旅行に關して有益なる報告を爲せり。

フォルツ

ユングフー  
ン

ジャバ島はユングフー(Younghu)の十五年(一八三五—四九)の研究、リヒト  
ホーフエンの旅行等に依りて頗る知られたるが、其の後フェルベーク(Verbeek)は本  
島の地質を調査し、植物學者スチング(H. Fitting)は一千九百七年ボイテンツ  
ルグの植物園に赴きて最要の「カウチック」植物を研究し、セレンカ(Selinka)夫人

は本島に於てオランダの人類學者ゾボイス(Eugen Dubois)の研究を續け、エルベ  
ルト(J. Elbert)は一千九百六年より翌年に亘りて本島を探検し、モリン(H. Morin)  
は本島南部の生物を調査せり。

小スンダ列島にはエーベル(Weber)、キヒマン(Wichmann)一八八八—八九、等  
の旅行あり、ベルンスタイン(Bernstein)、リーデル(Riedel)、ローゼンベルグ(Rosenb-  
erg)、等は東部諸島を調査し、ヴェート(P. J. Velt)はチモラット、フロレスを精査し  
メルトン(Hugo Merlon)はマイン河畔のフランクフルトに於けるゼンケンベ  
ルグ自然探究會(Senkenbergischen Naturforsch. Gesellschaft)の誘勵に依りてアル諸  
島の二諸島に動物地理學的探検を行ひ、パト(J. W. Tissot van Patot)はアル諸  
島中の最南、最大なるテランガンを調査せり、此の外ニエウエンカン(Nieu-  
wenkamp)は一千九百六年バリー島のバツル(Batoer)火山に登り、ピン(Pin)はタイ  
諸島を訪へり、因に云ふブル島の北東岸カイネリ(Kijeli)よりサマラギ(Samalagi)  
まで旅行せるものにファンデルミューゼン(J. H. W. van der Miesen)あり。

セレンベス島はフリリスの外、マテス(Matthes)一八五六、マイイェル(A. B. Meyer)

(二八七〇—七一)ユースト(W. Joeg)(一八八二)ベカリ(Becari)(一八七四)ワルブルグ(O. Warburg)(一八八八)の旅行せる後、サラシン(Paul und Fritz Sarasin)兄弟は前後二回一八九三—九六の旅行に依りて本島の地形地質を詳にし、氣候の情報を明にし、森林の分布等を究めしのみならず、住民の種族、風俗、産業等に就きて紹介する所少なからず。

ボルネオ島に關しては、ジョン(Se. John)、ポセキチ(Posevitz)等の來訪ありしが、ニューエンフイス(Nieuwenhuis)は始めて横斷を試みたり(一八九六)。一千九百三年より翌年に亘りてワルフレン(E. V. Walehren)あり、オランダ領の北部に於てケライ(Kelai)河の上流、マハカム(Mahakam)の分水嶺を調査し、ストルク(Solok)亦一千九百五年本島を探查せり、彼の出發點は南緯零度半、バット河畔のブルクチアフ(Pulik Tjube)にして、南緯零度十五分の無人地、ツンバンヂウロイ(Tumbange Djuloi)に溯れり、此の地方にてはバット河はブサン(Busang)と稱せらる。バットとマハカムとの分水嶺を超えたる後、南南西に向ひ、マハカム川カプアス(Kapuas)及カプアス川バットの分水嶺に達し、遂にブサン川バットの西支に出で

出發點に歸着するを得たり、一千九百七年にはヒルシ(Hans Hirsch)ありて中央部のムルン(Mocren)河及バット河地方の地質探検を行へり、イギリス領北ボルネオにありては其の南部に於ける鐵道線路豫測の目的を以てモイシ(E. Moyses)探検隊を率ひて進みしが、途中に於て病魔に犯されしが故に、キーデン(W. Weden)代りて一行を統へ遂に目的を達するを得たり。

我が國に近きフリッピンに關しては、ヤコル(Jacon)のルソン旅行(一八六八)を始とし、センペル(Semper)の動物學的探検(一八六三—六五)ドラシ(Drasche)の地質調査(一八七六)、ハンスマイエル(Hans Meyer)等の人種學調査(一八七〇—七八)等あり、近年合衆國水産局の汽船アルバトロス(Albatross)號はサンフランシスコよりホノルル、グアムを経て此の地に來り、以て漁業を調査する所あり、スミス(Hugh Smith)及バルチ(Paul Bartch)等之に乗組み、本群島第三の高峯たるミンドロ島のハルコン(Halcon)山は、一千九百六年末ミールス(E. A. Mearns)の一行始めて登りき。

### 印度

印度よりルアッサに至る道を求めんが爲に行はれたる探求に

依りてヒマラヤ地方は漸く調査を重ねるに至れり、一千七百八十三年ツルナ  
 (Tinner)はブータンを横ざりてヒマラヤに登り、一千七百九十三年ネパールの  
 状況稍明瞭と成りき、而してウェブ(Webb)がガンガの水源を探り(一八〇八)、  
 フラザー(Fraser)がシムナの水源を発見せるあり(一八一四)、ムーアクロフト  
 (Moorecroft)はサトレヂとインダスとの水源たる聖湖を探索し(一八一二)、フー  
 カー(Hooker)はシッキム地方を踏査せるを以て(一八四九)、一千八百五十年より  
 ヒマラヤ高峯の測量を始むるを得たり、而してムーアクロフトはカシミル  
 及びラダク(Ladak)地方を調査し(一八二〇)、ジャラル(Gaird)兄弟之に次ぎ(一八一九  
 —二九)此の地方はカンニンガム(Cunningham)及ストラチー(Strachey)の下に  
 千八百四十五年より一千八百四十七年までに其の測量を終り、ウッド(Wood)の  
 如きは一千八百三十八年アムの水源地たるパミルに進みたりき。  
 第二十世紀に入りてクロローリー(Crowley)の率ひしヒマラヤ登山隊は得る  
 所多からず、ワークマン(H. Workman)はヒマラヤカラコルムの氷河を調査し  
 ホッルングマ(Chogo-Jangma)氷河を五千八百米突の高まで登れり、而して一

千九百三年に於てもカラコルムの海拔七千三百三十五米突の地に達せり、次  
 いでラビク(L. Lapieque)は南印度殊にトラバンコール(Francoere)に人種學的旅  
 行を試みぬ(一九〇四)。

一千九百五年の夏季ヒマラヤ第三の高峯たるカンチンジンガ登山を試  
 みたるヤルコト(Jaricot)及クローリー(A. Crowley)は唯、六千四百米突の地まで  
 達し、ドリギ(A. De Bigny)なるものは北部シッキムに旅行して三十四日を費し、  
 一千九百六年ワークマン(Workmann)はヌンクン(Nun-kun)山の海拔七千六十米  
 突の地に達し、印度地質調査所はクマオン(Kumaon)、ラハウル(Lahaul)及カシミ  
 ル地方のヒマラヤに於ける氷河を探検し、フンツ(Hunz)谷及カラコルム山脈  
 に於けるものはラハウル及クマオン地方に於けるものより概して低きを  
 報告し、ロングスタフ(F. Longstaff)はガルワール(Garhwal)、ヒマラヤのトリスル  
 (Trisul)山(七一三四米突)の絶頂を究めたり。

其の後ノルゲ人ルベンソン(Rubenson)及アアス(Monrad Aas)はヒマラヤに於  
 けるカブル(Kabru)山(海拔七二九〇米突)の絶頂に達して従來の登山者中最高

の名を得、印度地質調査所長たるホルランド(F. H. Holland)及びヘーランド(H. H. Hayden)、ラルカー(H. Walker)、パスコエ(E. H. Pascoe)、クッター(G. de P. Cutter)及びブラウン(J. C. Brown)等の調査せるヒマラヤの十二氷河に就いて報告し、ロングスタフ(J. Longstaff)はカラコルム山脈のサルトロ(Saltoro)氷河を調査し、サルトロ峠を超えヤルカンドの支流たるオプラン(Opran)河の水源に赴かんことを企てたり、又マシュー(Massieu)夫人は印度及びネパールに興味多き旅行を爲し、サトレチ河を溯れる時西藏より歸來せるスフィンヘチン(Svan Hedin)に遭遇して大探検談第一の聽聞者たるを得、ラークマン(W. Hunter Workman)及びクロックマン(Bullock Workman)夫人は、カルシアチ(Calcatti)及びコンツァ(Konza)を伴ひ、フンツァナガル(Hunza-Nagar)及びヒスバル(Hispar)氷河を探検して、舊來の地圖に誤謬あるを認めたり。

一千九百四年フリチ(Gustav Fritsch)はセイランの内部に入りて最舊の土民たるエダ(Weda)を調査し、コロンボよりアンタマン諸島に赴けるが、ロージアー(S. G. Rogers)も該諸島に入りてヤラワ(Jarawa)の二女六童を得たり、又ソーマービル(Somerville)はセイラン附近の海底及び海岸に就きて報告する所ありき。

#### イラン高原

ヘルシア北部を訪へるものにはロシア人ハニコフ(Khankoff)、一八五八、ボグダノキチ(Bogdanovitch)、一八八六—八七、ブルグシ(Brugsch)、二八六〇の外、フーツムシンドラー(Houtum-Schindler)、チエツ(Tietze)、ローゼン(Rosen)、ロドラー(Rodler)等あり、之に反して南部ヘルシア、アフガニスタン及びバルチスタンはイギリス人多く旅行し、ベル(Bell)、一八八四、リンチ(Lynch)、一八八九、ポーガン(Baughan)、一八八七—八八、等あり、先之エルフィンストーン(Elphinstone)、マフガニスタンに赴き、一八〇八、ポチンガー(Pottinger)はクラットに入り、一八一〇、ブルヌ(A. Burnes)は印度よりヒンヅークシを過ぎてブハラに進み、一八三三、コノリー(Conolly)はヘルシアより同地方に、一八四二、ウングアルム人バンベリー(Bambery)はヘルシアよりブハラに至れり、一八六四、而してドイツ人ラッデ(Gustav Radde)は南シベリアに旅行し、一千八百六十三年よりコーカシア、北部ヘルシア、カスピ海附近の探検に従事すること久しく、アフガニス

タン北境問題調査隊に加はれるグリスマン(Griesbach)は一千八百八十九年までアフガニスタンの地質を探索し、コンシン(Konshin)は一千八百八十六年カスピ海に注げるアムの舊河道の存在を主張せるも未だ充分なる解決を見ず。一千九百三年キザービー(H. F. Wilberby)は南ヘルシアに博物學的旅行を爲したり。

一千九百四年サイクス(Sykes)の率ひたる遠征隊はバンデルアバス(Bander-abas)よりシアデルバード(Siaderbad)・バーラバード(Bahramabad)・キルマン(Kirman)・ナラマシル(Naranshir)及ギン(Gishu)峠等を過ぎてバンブル(Bampur)谷に向ひたるが、ヤンツェツキ(W. G. Jantschewski)及ハンチングトン(Huntington)は東ヘルシア、セイスタン(Seistan)及バルチスタンを旅行せり、殊にヤンツェツキーはカラクム、カスピ海とヒバとの間に於ける地をも踏査したり、スタール(A. F. Stahl)はエンゼリ(Enzeli)よりテラン、イスバハン、ハマダン、ダブリーズ、アスタラに赴き、グレドノー(A. H. Gladowe-Newomen)はヘルシアの南東部に經濟事情を探れり(一九〇四—〇五)。

一千九百五年スフエンヘヂンは東部ヘルシアの沙漠地方に新旅行を爲したるが、マクマホン(Me Mahon)はアフガニスタンとセイスタンの境界を調査し、ローリング(Loring)の一行はマクイボル(Me Ivor)が嘗て(一八九二)攀登したるタクトイスレイマン(Takt i Suleiman)の登山を再試みたり。

一千九百六年サイクス(P. Molesworth Sykes)はキルマンの南方に旅行せしのみならず亦北部にも到れり(一九〇二—〇六)ヘルツフェルト(G. Herzfeld)はルリスタン、アラビスタン及パルシスタンに旅行し、ドラコスト(De Lacoete)はケッタを發し、アフガニスタンに到り、パミルを越え、セイスタンを觀たり(一九〇六—〇七)。

**アラビア** ヨーロッパ人にて始めてアラビアを科學的に探査したるものはダンマルク王の援助に依れるニーブール(Karsten Niebuhr)の遠征隊にして殊にイエメンを探明せり(一七六三)第十九世期に入りて始めて踏査を試みしはシフウィツ人のブルクハルト(Lewis Bruckhard)なりしが(一八一四)其の後、バートン(R. F. Burton)(一八五三)・キーン(J. F. Keane)・ブルグロウチ(Snuck Hurg-

ronje(一八八五)あり、ブレデ(von Wrede)はインドラマツトを調査し(一八四三)、北部を西より東に横断せるものは前にイギリス人サドリアー(Sadler)(一八一九)及スエリゲ人ワリン(Wallin)(一八四八)後にバルグレーン(Palgrave)(一八六二—六三)あり、ネジッド地方はグアルマニ(Guarnani)(一八六四)、ペリー(Pelly)(一八六五)の兩人足跡を印したりき、又南西より内部に入れるものを記せば、ハルビ(Halaby)はホデイダより(一八七〇)、マルツマン(H. von Mallzan)はアデンより、マンツォニ(Manzoni)(一八七七—八〇)、グラザー(E. Glaser)はサナ(Sana)より出發せり(一八八六—八八)、北部及中部アラビアはバルグレーン以来、ブルント(Bruno)の横断あり(一八七九)、バートン亦一千八百七十七年紅海の北東に於けるミリアン(Midian)地方に來り、マクツーチー(Me Doughty)は北西アラビアを調査せり(一八七六—七八)、此の外、デフレルス(Delers)(一八八七)、シフインフルト(G. Schweinfurt)(一八八九)のイエメンに旅行せるあり、ドノルド(de Nolde)はネンド沙漠を通過し(一八九三)、ベント(E. Bents)はインドラマツトの谷地を訪ひたり、斯して西部は比較的世に知られしが、東部は頗る等閑に附せられ、内部の南方

は地球上最、調査少なき境域に屬せり。

第二十世期の始に於けるコックス(Perry Cox)はマスカットよりオマーンの内部に進みて多少吾人に裨益を與へ、ブルクハルト(Hermann Burckhardt)はバスラ(Basra)よりマスカットまで旅行したり(一九〇三—〇四)。

#### 前アジア

ダンマルク人ニールブル(Karsten Niebuhr)はエジプト、シナイ半島、アラビアの海岸、西部印度、マスカット、南ヘルシア等を探りて、エウフラトを溯り、アレppo、イスカデルンを過ぎ、更にバレスチナ、小アジア、キプロス島を調査せしが(一七六三—六七)、其の後、バルクハルト(Lewis Borchardt)は前アジアの大部を旅行して遂にメッカ及メデナを訪ひ(一八〇九—一五)、シッパルト(Schubert)は死海が窪地に屬するを發見し(一八三六)、キーヘルト(Kiepert)(一八四一以後)及ハルト(Heinrich Partl)(一八四五)は各、小アジアに就きて貢獻する所ありき、コチー(Kotschy)は小アジアの南部及キプロス島を探索し(一八五三—一八五九)、テヒアツフ(Tehihatsch)は小アジアに七年間滯留して地質并に植物を研究し、自然地理に貢獻する所多かりき(一八四七—五八)、其の頃、アビヒ(W.

H. Abich)はアルメニア高地、コーカシアの地質を調査し、ゾグネル(Moritz Wagner)はコーカシア、アルメニア、小アジアに旅行し(一八四四—五二)、ローリンソン(Sir Henry Rawlinson)等はヘルシア、トルコの境界委員に加はりたるが(一八四六—五三)、メンポタミア地方に就きてはエウフラト鐵道の豫測以來(一八七二—七三)、ボタ(Botta)及レーヤード(Layard)(一八四二—四八)、サシヤ(Sachau)(一八七九—八〇)等に依りて其の地理を明にせられたり、リバノン地方に關してはフラス(O. Fraas)(一八七五)及デーナー(G. Diner)(一八八五)等の活動せるありき、又パレスチナ方面にはイギリスのパレスチナ探検贊助(Palestina Exploration Fund)、ドイツのパレスチナ組合(Palästina Verein)ありて根本的の調査行はれたるが、フランス人ルイーズ(Duc de Ruyss)及ホルター(Larter)の旅行はパレスチナ及シリアに就きて價值ある結果を興へたり。

一千九百一年ムシル(Alois Musil)はパレスチナ及アラビアの境界地方に旅行してワデアラバ地方を精査し、ヤンケ(Janke)はイッソ(Issos)及グラヒカス(Granicus)の古戰場を調査し、ハンチングトン(E. Huntington)はエウフラトの上流を探明し、シュマッセル(Schumacher)、メンチゲル(Mentinger)はパレスチナに到れるが(一九〇三)、イタリアの地學協會より派遣せるバンネテリ(Car. L. Vannelli)はムダニア、ブルツ、エスキシヒル、カエサリエ、シワス等を旅行し、フィリップソン(A. Philippson)は小アジアに赴き、セリン(Ernest Sellin)はパレスチナに來れり(一九〇四)。

一千九百五年ブランケンホーン(Max Blankenhorn)ありてパレスチナ并にエジプトに地質學的旅行を爲し、ペトリ(Finders Petrie)のシナイ半島遠征隊は考古學的發見を爲せり、此の頃ベンドルフ(Oto Bandorf)はエフゾヌ(Ephesos)を探查し、ガロワ(Gallois)はシリアに赴き、ドイツの東方協會はメンポタミアに於て發掘を繼げ、シ、ワイニツ(Hans Hermann v. Schweinitz)はロニアより出發し、有名なるトロゴロヂテン(Trogodyten)洞を見たる後、アンゴラに達したり。

一千九百六年グローテ(Hugo Grothe)は小アジアに旅行し始めてサリスよりヤルプス及アルピスタンに、ゲスベルチャイよりハヂインに至り、アメリカ人バンクス(J. Banks)はバビロニア人最古の遺蹟を發見し、オスカルマン(Oskar



Manu)は第二回クルヂスタン探検を了へて、傳説、歌謡、言語等に關し豊富なる材料を齎し歸り以て先の不成功第一回の旅行に於けるを償ひ、セリン(Salin)はパレスチナに赴きて舊イェリコ(Jericho)の遺蹟を調査したり。

一千九百七年グローテ(Hugo Grothe)はクルヂスタン方面に於て經濟地理又は住民に就きて調査する所ありしが、ステレハット(John R. S. Sterehatt)はチャールズ(B. Charles)ホルムステット(A. Olmstead)ハリス(C. O. Harris)及ハンチ(J. E. French)等と共に小アジアに考古學的探検を行ひ、ロンドンの地學協會より派遣せられたるサイクス(Mark Sykes)は北メソポタミア旅行に就きて報告し、ブランケンホルン(Max Blanckenhorn)はパレスチナに赴き殊に死海附近の調査を行ひ、キーンの大學生博物館より派遣したる探検隊にはブラシケ(Bischke)ライベル(Reiser)フーレルハッペン(Vielhapper)等加はりてメソポタミア地方に博物的調査を爲せり。

一千九百八年ムシル(M. Musil)はヘルシニア灣に沿へるコフイト(Koweit)の後地より西の方ヘッヂアス鐵道までの探検を行ひ、オックスンハイム(Max Freiherr v.

Oppenheim)は中央メソポタミアのハブル(Chabur)に於てテルハラン(Talharat)なる遺蹟を發見し、ワシントンのカーネギー(Carnegie)協會の磁氣觀測者たるピールソン(J. C. Pearson)は當方面よりヘルシニアに旅行して磁氣の觀測を行ひ、藝術史家サレ(F. Sale)はヘルツフェルト(Herzfeld)と共にチグリス及ユーフラートの沿岸地に調査を爲せり。

コーカシア グルデンステット(Guldensäde)が始めて科學的探査を遂げて地形、地質、天産并に山民の風俗等に關する好材料を供せし後(一七七二)幾多の旅行家、探検者ありしが、就中クラプロム(Klaproth)の土俗研究(一八〇七—一八)アウスリー(Sir William Osseley)の通過(一八一〇—一一)ン、パロト(Fr. Parrot)のアララト山の攀登(一八三〇)ヂョホソ(Frédéric Dubois de Manpéaux)の地理的兼考古的旅行(一八三一—三四)コホホ(Koch)及ローゼン(Rosen)(一八四三—四四)アビヒ(W. H. Abich)(一八五〇)頭、コレンナチ(Kolenati)ワグネル(Wagner)(一八四四—五二)ラッデ(Gustave Radd)(一八六三)テローロール(Taylor)(一八六九)ストレンケル(M. S. Streckler)等を以て著しとす、尙第二十世紀に入りてはラーゼビヒ(W. A. Ras-

ewis)の山脈研究(一九〇二—〇三)フシタル(Andr. Fischer)のテベルダの水源探査  
ミタルレル(A. A. Miller)のコーカシア黒海岸に於ける考古學的及人種學的旅  
行(一九〇四)等ありき。

中央アジア

ロシア人セメノフ(Semenov)はバルハシ湖、イシクタル及アラ  
タウ地方を経てナリンの縦谷に達し(一八五七)ワリハノフ(Walichanow 一八五  
八—五九)エニウロフ(Wenjukow)(一八六〇)之に次げり、而してセエルツォフ(Se-  
wiczow)は天山の西部、イシクタル、タシケン、ト間、次にシル河の水源地方を探検  
し(一八六四—六八)オステンザッケン(Osten-Sacken)は天山の南部を旅行してカ  
シガルに赴き(一八六七)ナリンの水源地方を調査せるカウルバルス(Kaulbars)  
はムザルト(Musart)峠を發見し(一八七〇)天山山脈の西部に於けるチャナルク  
ル(Tschalyr-Kul)ナム河の三角洲等に赴けるが(一八七二—七三)シルの水源を  
發見せるはフヂェンコ(Fedschenko)なりき(一八七〇)同人はセラフシヤン(Seratschan)  
の水源を檢出し(一八六九)次にアライ山脈を調査し、キシルクム沙漠を研究  
し(一八七二)バミルの北縁を形成せるトランスアライの雪山を發見せり(一

八七一—七二)此の外、天山地方に於ける旅行者にはマイエフ(Meyer)のヒッサ  
ル(Hissar)山脈を研究せるあり(一八七五—七六)ムシケトフ(Muschketow)(一八七  
五)ボステンコ(Kostenko)及ボロンン(Skobelov)のトランスアライ地方(一八七  
六)レーゲル(Regel)のイリ河谷及イシクタル(一八七六—七八)フチソフ(Futissov)  
のイシクタル(Jeschil-Kul)(一八八一)ミンデンドルフのフェルガナに赴けるあ  
り(一八七八)クロバトキン(Kuropatkin)及キルケンヌ(Wilkens)は天山の南部を旅  
行してカラシアルにまで進みき。

ヒンヅークシを越えてクンユート(Kunjut)に赴き(一八八五)たるグロンフ  
チエンスキー(Grombschewski)ヤンミルに旅行してカラクル(Karakul)及ランダク  
ル(Rangkul)ムルツマン(Murghab)を調査し、カシガルを経てマルシラン(Marsilan)  
に歸り(一八八八)翌年エンチ(Wandsch)を溯りてタグダムバシバシル(Tagdumbas  
ei Pami)に至り遂にヤルカンド河の流域を探りき(一八九〇)此の頃ヤングハ  
メンズ(E. E. Younghusband)は印度よりカラコルム、バミルに至れり、一八八  
九、而してフランス人ドアンルニ(D'Aubergne)はカシミルよりレーを経て天山

南路に出でバミルを過ぎてギルギヤ(Gilgit)に歸着せるが、第二回の旅行(一八八九—九〇)をタグダムバシール及ワハン(Wachan)地方に試み、一千八百九十年リットルデル(Litledale)はオシ(Oshi)サルハド(Sirhadd)ヤミン(Jassin)カシミルの経路を以てバミルを旅行し翌年ロシア人のバチエウスキ(Butechewski)がバミルに赴きし後、ロシア人は同地方を占領するに至りしものの如し、之より数年を経て大にバミル并にタリム流域の探検を爲せるものあり、之をスフエンヘデンとす。

第二十世期に入りて中央アジアの探検者中著しきものを記さんに。

一千九百二年サボジニコフ(Sapozhnikov)の率ひたるロシアの遠征隊はハテンリ山嶽に赴きアラタウ地方を調査し、インチエンコ(A. Ivenko)はキルギスステップを横ぎりたり。

一千九百三年コルツェネフスキー(N. I. Korzenewsky)は第一回の旅行としてスルガナ地方のオシを發し、アライ山脈及トランスアライ山脈を越え、カラル湖を過ぎり、バミルポストに赴き、ツアルクル湖、ピクトサシククル湖等を

探査したり。

一千九百四年クニボキチ(Kunipowitsch)はカスピ海を探査して動物は深き四百米突以内に止まるを知り、ツプヤンスキー(W. A. Dubjansky)はアララ海の北岸に於ける沙漠を横ぎり、ウストウルトの北縁に沿ひてカスピ海に出でサクサウルの境界が従前より四百メートル北西にあるを認めたり、コルツェネフスキーは第二回の旅行に於てムクス河に赴き、別路に依りてアライ、トランスアライを越え、又ブハラ國境のリアハシを過ぎり、アチクアルマ及びカタカザムクを経たり。

一千九百五年コルツェネフスキーは第三回の旅行に依りてアライ山脈の諸山道を通し従來通行不可能と信せられたるカルタボス峠の探検を試みたり。

一千九百六年オブルチエフ(V. A. Obrucyev)はチャイル(Dschair)の東部、コヂル(Kodjlu)セミスタツ(Semistand)等を探査し、カーン(A. Kahn)はイシククル湖中に於て家具、人骨等を發見して都市の陥没せし者あるべきを疑はしめ、パリイ

スキュー(J. V. Parisky)はトランスカスピ鉄道に沿ふキジルアルフート(Kizil-Arvat) (二〇一米突)アシュバード(Aschabad) (二二五)メルフ(二二五)ブハラ(二二四)サルカンド六九〇)ダシケント(四七九)等の標高を測定したり。

パラス

シベリア

北部アジアの旅行者にはドイツ人パラス(Pallas)ありて東ロシア(二七六八)ウラル(二七七〇)アルタイの鑛業(二七七二)バイカル湖(二七七二)アムル地方等を調査せり(二七六八—七四)其の後エルマン(Adolf Erman)あり、オブドルスク、トボルスク、イルクツク等を経てカムチャツカに達し以てウラル山脈が北極洋に達するか否やの研究、ヤクーツク附近の寒極、東シベリア山岳の高度の測定、カムチャツカの地理、東アジアの磁力等に關して頗る得る所あり(二八二八—二九)フンボルトもトボルスク—バルナウルのステップ、エクタハアルタイ、ヅンガリア、イルチシ河岸、オムスク、オレンブルグ間のキルギス「ステップ」等を探索せり(二八二九)次いでミッデンドルフ(Middendorff)はタイムイル半島を横ぎりオホータ海に達し、アムル地方、シルカとアルグンとの間に於ける従来地理不明の地方を踏査せるが(一八四二—四五)シベリアに於

ミッテンドルフ

けるツンドラの限界、地殻内の増温率、植物地理、地磁氣、地質、動物學等に關して益する所あり、當地方に於ける探検家の最要なるものと認めらる。

ムラビエフ(Muraviev)が東シベリアに總督たるに及びて探検は大に獎勵せられ、政府の特別補助の下にありてシレンク(Schrenk)其他の遠征の行はるるを見しが、就中結果の豊富なりしはシュワルツ(Schwarz)の遠征にして一千八百四十五年以後十一年の星霜を経て天文、地形、地質等に關する觀測上重要な結果を得たるのみならず、優良なる地圖を作成したりき、爾來シベリアを探索せんと欲するもの内外に起り、探検家の數の如きは二十年(一八五四—七四)間に二百七十を超えんとせり、ラドデ(Raddo)のバイカル地方、マアック(Maack)のペルイ河、ヘルミイキン(Permijkin)のサヤン山脈、ノルデンシキオト(Nordenskiöld)の名譽ある極洋通過等實に枚擧するに遑あらず、尙ほ一千八百七十五年以後にはヤドリニンツェフ(Jadrinzew)ランヌメン(Lansdell)ラドロム(Rudloff)ケンナン(Kennan)ブーランジエー(Boulangier)メンルク(Sperk)ソムニエー(Sommer)フインシ(Finseh)等ありてイェスト(W. Jett)は日本よりドイツに至る途にシベリアを横

過したり(一八八三)。

一千九百四年トルマチェフ(Tolmatschew)はイニセイに沿ひてツチノ(Dudinko)で旅行し、八年に亘れるオブ及イニセイ河口間の海路の探査はドリシニコ(Drishenko)に依りて完成せられき而してトルマチェフは更にハタンガ(Chitunga)の探検を行ひて海に達し(一九〇五—〇六)セルジエフ(Sergeef)の率ひたるイニセイ遠征隊はユゴル海峡を過ぎてイニセイ河に到り、ツルシンスキー(N. Tulsinski)はチクチ半島の地産調査を爲し、チツチェフ(Tjiceef)はカムチャツカ事情を報告し、ベリンスキー(Belinski)は鑛産地を調査するの目的を以てピセベク(Piscepek)を出發し、蒙古、アルタイ地方、ミシンスク地方、内バイカル地方、ネルチンスク、アムル、トランスアムル、ヤクーツク地方、レナの流域、ペーリング海岸、カムチャツカ等を経てウラヂヤストクに歸着し、ブツルリン(S. A. Buturlin)はコリマ河畔に於ける住民の營養情態を研究するの目的を以て政府より派遣せられたり、一千九百六年バシリエフ(V. N. Vassilief)はイニセイ河畔のツルハンスクよりイニサイ(Ingai)湖に赴き、ハタンガの支流モニエロ(Monjeru)

の上流に出で夫よりハタンスコエに達し、アナバルを溯りてイニシ湖畔に到り之よりキリツイを経てレナに赴きたる後、翌年に至りて歸來したり。

サハリン(樺太)に就てはシュミット(Schmidt)は植物學的調査を行ひ(一八六一)ロバチン(Lopatkin)及ベルキン(Belkin)も亦同様の調査を爲し(一八六六—六七)ポリアコフ(Poljakow)は本島を精細に記述し(一八八二)ツルチンスキーは西岸の無煙炭地を精査し、北東部に於けるチライボ(Tihaiwo)灣附近のヌトボ(Nutowo)河谷の石油田を發見し(一九〇五)アネルト(E. E. Anert)は地質的調査を試みて地勢を明にせり(一九〇七)。

### 第三 アメリカ洲

#### A 北アメリカ

西紀第八世期の終りに於てアイルランドよりイスラントに渡航せしものありしが、イスラントの人グンビョルン(Gunbjorn. Dalsen)は始めてグリーンラ

探検と地理學 各説 アメリカ洲

百四十七

ンドに赴き九七七、エリック(Erik hum Rode)は同島に殖民し(九八三)ヘルユルフ  
ソン(Bjarn Herjulfson)はイスランドよりグリーンランドに向ひしときヘルマ  
イル海峡附近に蕪鬱たる山地を認めたり(九八六)次いでライフ(Lief)は西紀  
一千年にキンランド(Vinland)即、葡萄地に到着せしよりトルバルド(Thorvald)  
(一〇〇三)トルスタイン(Thorstein)(一〇〇四)トルフン(Thorfinn Karlsevne)も同地  
に渡航したり斯の如くしてノルトメンは北アメリカに航して殖民地をも  
設けしが次第に往來するもの減少して終に其の跡を絶つに至りしかば新  
世界発見の名譽はコロンブスに與へらるることと成りたり。

コロンブス

コロンブスと時を同じうしてヴェネチア人にギオバネツチカボタ(Giovannetti  
Cabota)なるものあり、イギリスに仕へてプリストルを發し、ラブラドルの海  
岸に到りて北アメリカの大陸を發見し(一四九七)其の子セバスタアンカボ  
ト(Sebastian Cabot)は同地方を北緯六十七度まで進み、南に轉じてハッテラス岬  
或はフロリダ附近に赴き(一四九八)ホルトガル人ガスパル(Gaspar)及、ミグuel  
(Miguel)のコルテリアル(Cortereal)兄弟はニュースコットランド、ニューファウンドラ

カボット

コルテリアル

ンド、北緯七十二度のラブラドルに達し(一五〇〇—〇一)フランス王フラン  
ソワ一世はイタリア人ギオブアンニヴェラツァノ(Giovanni Verrazzano)を新世界に  
向はしめ(一五二四)更にカルチエー(Jacques Cartier)を北アメリカに赴かしめ  
て(一五三四—四二)殖民地の建設を試みたり。

カルチエー

先之エスパニア人レオン(Ponce de Leon)はメキシコ(Hispaniola)即、ハイチ  
よりバハマ諸島に遠征を試み、フロリダ半島の東岸を経てメキシコ灣に入  
り(一五一三)シママイカより派遣せられたるピネダ(Alfonzo Alvarez Pineda)は  
カタン海峡より入りてメキシコ灣岸の殆ど全部を航し、ミシシッピ河口の存在  
を知り(一五一八)ドリビアルバ(Juan da Grijalva)はユカタンを探索し、コルタス  
Fernand Cortes)はメキシコを征し(一五一九)ウエメンツサ(Hurtado de Mendoza)(一  
五三二)ドリビアルバ(Hernando de Grijalva)(一五三三)サモス(Francisco de Ulloa)(一  
五三九)等をして探検せしめ、一千五百三十五六年には自、探査を試みたれば  
カリフォルニア灣の南部、下カリフォルニア半島、レビリア、レビリア、レビリア群  
島等世に知らるることと成れり、其の後アラロン(Fernando de Alarcon)はカ

コルタス

探検と地理學 各説

アメリカ洲

リフォルニア灣を航してコロラド河口に達し(一五四〇)カブリーヨ(Rodriguez Cabrillo)はカリフォルニア沿岸の大海を航してサンフランシスコ灣及びメンドシノ岬附近に到れり此の頃バケス(Vaquez de Coronado)の盡力に依りてリオグランデデルノルテ及アルカンサスの上流地方の探検行はれガルシアロベス(Garcia Lopez de Cárdenas)はコロラドの大峽谷を探知したり。

フロリダ半島の西部及び北西部にてはパンプロ(Panfilo de Narvaez)はメキシコの事業を継承し(一五二八)クーバの太守ソト(Hernando de Soto)はメキシコのアテンネシーよりミシシッピ地方を探り(一五三九—四二)而して大西洋岸は太平洋に至る通路を求むるが爲に漸く探査せられハッチラヌ岬までの地をゴメス地(Tierra de Gomez)と名づけられたるに對しメキシコ灣岸の地をガライ地(Tierra de Garry)と呼ぶ。

一千六百三年フランス王アンリ四世の時ドモン(De Monts)及ドブートレンターヌ(De Pontrevert)はメキシコ灣を探検してポールロワイヤル(Port Royal)を建て(一六〇五)シャンブレン(Samuel Champlain)はセントローレン

ソト

シャンブレン

ヌス河を航してケベックを建設(一六〇八)せしのみならず河の兩岸に殖民し一千六百九年にはシャンブレン湖を探索し後オタワ河を溯りぬ(一六一五)此の前後にビッロン湖(一六一一)ミシガン湖(一六三五)エリー湖(一六四〇)スエリオル湖(一六四二)の探索ありエヌイタ派の宣教師メナール(Menard)(一六六一)神父マルケット(Marquette)(一六七三)商賈ジョリエー(Joliet)は初めてセントローレンスの流域よりミシシッピの上流に達し一千六百七十九年デュロisset(DuRoi)は此等の地方をフランス王の爲に占領しヘルジック人ヘネピン(Louis Hennepin)は翌年上流ミシシッピに旅行調査せり先にカナダに入れるドラサール(Robert Cavalier de La Salle)はミシシッピの流域に來り所謂水の父に従ひてメキシコ灣に出で一千六百八十二年其の國王の名に於てルイシヤナ(Louisiana)を占領しデュルビエヌ(Lemoyne de la ville)ビヤンビエヌ(Lemoyne de Beauville)等ありてフランスの領土は漸く擴まりぬ又ミシシッピ上流の西部に赴きしもの中ラオンタン(La Fontaine)(一六八八—八九)はロッキーの高峰に關する知識を齎らせるが實際に登山せしはニバルブイユ(Niverville)(一七五一)及ランレンド

ドラサール

リー(Verendrye)(一七五五)なりき。  
 ア巴拉チア山脈地方に就きてはフィラデルフィア(一六八二)及びジャーマン  
 タウン(Germantown)(一六八三)を建設せるペン(William Penn)を始とし、オウルト  
 ハン(James Oglethorpe)・キスト(Christian Friedrich Post)・ハイトマンズルゲン(David Zeis-  
 bger)・バクテホルツン(Johann Heckewelder)・メトヤン(Konrad Weiser)・キーク(Daniel  
 Boone)・スタインベル(Michael Steiner)・ハイト(Abraham Heib)・ボンタム(Kaspar Mansker)  
 等あり而して十八世期の後半にはイギリスの旅行家多かりしが殊にマン  
 ドブイル(Dr Mandeville)はミシシッピの三角洲より同河とミズーリとの會點に  
 達し(一七五九)・ゴール(George Gault)はメキシコ灣地方に(一七六四—七一)・ジエフ  
 ニー(Thomas Jeffreys)(一七六二)及カハルバー(Jonathan Carver)(一七六六—六八)はミ  
 シシッピの上流地方に活動し、ヘーン(Samuel Hearne)は北極洋岸に出で(一七六  
 九—一七七二)・バンドン灣會社員たるマクエンビー(Alexander Mackenzie)は同名  
 の大河を下りて河口に達し、コルチレラの北部を横ざりて太平洋に出で(一  
 七八九—九二)・トンプソン(David Thompson)はカナダのロッキーに就きて調査し(一

ヘーン

マクエンビー

七八四)・バートラム(William Bartram)は南部ア巴拉チア、メキシコ灣岸、等の踏査  
 を試みたり(一七七三)。

南コルチレラ及び太平洋沿岸地方に就きて記さんにエスヘビ(Antonio de  
 Espejo)はアリゾナ及新メキシコを(一五五二—五三)・ソサ(Castano de Sosa)はリ  
 オグランデ河の谷を探検せり(一五九〇)・次いでオニヤ(Juan de Onate)も新メ  
 キシコに赴き(一五九七—一七〇七)・六十六年にはエスカランテ(Escalante)及ドミ  
 ニクス(Dominquez)のコロラド河の上流地方に到るを見たり、太平洋沿岸の航  
 行はベラスコス(Velasco)(一五六四)・フカス(Juan de Fuca)(一五九二)の外、ビスカ  
 イノス(Sebastian Viscaino)ありてブランコ岬地方にも赴けるが(一五九五—一  
 六〇三)・先之イギリス人ドレーク(Sir Francis Drake)は世界周航の途にありて  
 アメリカの南端にホーン岬を發見し、アメリカの西岸に沿ひて北航し、オレ  
 ゴンの海岸に來り、新アルビオンの地を告領し、北緯四十一度と四十八度と  
 の間に於て北路を探求したり(一五七七—七八)。

ドレーク

而してキューン(Kuhn)(一六三八—一七一〇)・サルバチエラ(Salvatierra)(一六九



セセママイエル(Selernmyer)(一七二四)コンサック(Conrady)(一七六六)リンク(Jank)一七六六、セラ(Junipero Serra)(一七六九)等の盡力に依りてカリフォルニア半島が島に非ざるを決定せられき、此の外北アメリカの北西部に關してはベリリンク(Vitus Behring)クック(James Cook)あり、グレー(Robert Gray)はコロンビア河を發見し(一七九二)、バンクーバー(G. Vancouver)はマラメカより南カリフォルニアまでの全海岸を調査し(一七九〇—九五)、ラペルーズ(La Perouse)も亦探検を行ひたり(一七八六)。

カナダ イギリス領北アメリカに就きて記さんにジョン・ロス(John Ross)(二八一八)及パーリー(Edward Parry)(一八一八—二四)フランクリン(John Franklin)(一八二五—二七)コリンソン(Colinson)(一八五〇—五三)等はアメリカ大陸の北部を探れるが、ゲスナー(Abraham Gesner)は新ブランズウィック及新スコットランドの地質を取調へ(一八三八)、ローガン(W. Logan)等はセントローレンスの流域に(一八四二)ヒンド(H. V. Hind)等は赤河及キニベグ湖地方に旅行し(二八五七)、カナダ地質及博物調査會(Geological and Natural History Survey of Canada)

の建設(一八四三)は當地方の地理學的進歩に大貢獻を爲せり、又ドーンはロッキー山脈を經、バンクーバー島及アシャーロット女皇島を精密に調査し、クロンダイク地方に進みて地質を調査したり(一八七三—一九〇〇)。

ドーン(George Mercer Dawson)(1819—91)は地質學者、オグデンの子にしてアリゾナ、コロロンビアの境界委員、探検委員と成り、領國西部に就きて重要な豫察を遂げ、アリゾナ、コロロンビア并に北四諸州の地質を研究したる後、カナダ領國地質調査所長に榮進したり(一八九五)、著書に「カナダの地文と地質」(一八八四)、「コロロンビアの礦産」(一八八八)、「ベーリング海の觀測」(一八九二)等あり。

ベル(Robert Bell)は五大湖とハドソン灣間并にラブラドル半島を調査し、マクコンネル(G. M. Mc Connell)及オギルビー(W. Ogilvie)は北部ロッキー(一八八六以來)チレル(J. B. Tyrrell)はハドソン灣地方(一八八三以來)を探査せるが、尚ラブラドル地方に赴きしものにロー(A. P. Low)カトン(V. Caton)(一八九四—九八)等あり。

カナダ領のコルデレラに於ける探検者にはトムソン(David Thompson)(一八四七—一八五〇)殊にパルサー(John Palliser)(一八五七)ロード(John K. Lord)キ

ドーン

ルコックス(W. D. Wilcox)ハリー(J. N. Coller)コナン(A. P. Coleman)等あり、沿岸の調査には一千八百九十四年以來特別の機關設けられ、ローソン(W. Pall Dawson)キーファー(F. E. Kefer)マクーン(J. Macoun)等之が運用に従事せり、バンドン灣の西マクンジー河の東に於けるバーレングラウンズ(Barren Grounds)地方の探検は一千八百九十三年よりチレル(Tyrell)兄弟之を始め、翌年に至りて頗る得る所ありしが、一千九百年弟(James W. Tyrell)は大奴隸湖よりセロン(Thelon)河に従ひて、ドーボント(Doodbunt)河との會點に進みたり、次いでイギリス人ハンブリー(F. Hambury)はチレルのセロン河に於ける進路に従ひて、ペーカー(Baker)湖に達し、西に還りてペリー(Pelly)湖を過ぎて海岸に出で、コッパーマイン(Coppermine)河口に到着し、遂にマクンジー河畔に至れり(一九〇一—〇二)。一千九百二年に於てブルック(A. H. Brooks)なるものはクック(Cook)灣よりアラスカアルプを横断せんとしてタナナ(Tanana)地方に赴きたり、一千九百三年に及びてはカナダ政府はバートレット(Bartlett)の率ひたる「ネプチューン(Neptune)」號をバンドン灣に派遣して航行期の試験を行はしめたり。

カナダ政府が舉行せる地質調査に際し、マクーン(J. Macoun)、マックインネス(W. Mc Innes)、キルトン(Wilton)、ロー(A. P. Low)、キング(G. F. King)、ブリック(Osullivan)、オスリワン(O. O'Sullivan)、カムゼル(Camsell)諸氏の事業は頗る重要なものとす(一九〇三—〇四)此の頃イギリス海軍省はイギリス領コロンビアにて水誌的調査を施行したり。

一千九百五年にはラブラドルの探検を行ひしもの二隊あり、一はヨリス及ハンバード夫人(Leonidas Hubbard)他はマクンズ(William Mac Gregor)之を率ひたり、又プチーノール(Petit Nord)と稱せらるるニューマウンドランド北部の半島はトムソン(H. C. Thompson)及バート(W. H. Barré)の踏査する所と成りたり(一九〇四—〇五)。

一千九百六年、バウセル(L. A. Bauer)は北緯四十二度乃至四十七度、西經六十五度乃至百五度の地に於て磁氣の觀測を行ひ、ベル(J. M. Bell)はムーズ(Moose)河の流域に有用鑛物を探り、カムゼル(Ch. Camsell)はピール(Peel)河地方の地質調査を行ひ、オスリワン(Owen O. Sullivan)のバンドン灣に於ける調査(一九〇

五と共に頗見るべきものあり。

カナダ地質調査所は熱心に其の功程の進捗を計り、マクーン(J. Macoun)はポルタージラプレーリー(Portage la Prairie)とエドモントン(Edmonton)間の鐵道豫定線に沿ひて進み、マクインネス(Mc Innes)は豫定のハドソン灣鐵道に沿ひ、北東に於てはサスカチワンの下流に及び、オスリバン(O. Sullivan)はスプリング(Sphink)及フォートチャーチル(Fort Churchill)地方に、コリンズ(Collins)はニコニン(Nipigon)湖の西を探索せり又ロールザク(Laurezac)なるものはカナダに經濟地理學的旅行を爲し、モンゴメリー(Henry Montgomery)はカナダの西部に於ける舊ツムリ(Tumuli)を調査せり。

一千九百七年セクトン(E. E. Seton)は大熊湖とチェスターフィールド(Chesterfield)灣との間に地理學的及地質學的の旅行を爲せり、其の出發點はエドモントン(Edmonton)にしてカナダに於ける針葉樹の北界を超え、遂に北極地方に達し、ホイラー(A. O. Wheeler)はセルキンク(Selkirk)山脈中に於て發見せられたるナキム(Nakimu)洞に就きて報告せり。

アラスカ

第十八世期の後半よりロシアの毛皮獸捕獲者渡來ありしが次世期に入りてはクルゼンスタルン(Krusenslern)(一八〇三—〇六)、コツェフキ(Kotzebue)(一八一五—一八)、ツランゲル(Wrangell)(一八二九—三四)、テベンコフ(Tebenkow)(一八五二)等の來航あり、一千八百五十五年には合衆國はリングゴルド(Ringgold)及ロヂャース(Rodgers)をしてアレウト列島を探索せしめ、間もなくアラスカはロシアより合衆國に讓與せられ(一八六七)後者は沿岸の測地學的調査を始め、一千八百八十八年には「アルバトロス(Albatross)號」の派遣あり、ダル(W. H. Dall)及バーカー(M. Baker)等は内部に入れり。

アラスカの内部を東より横断せしものにカメル(B. Campbell)及ベル(B. Bell)(一八四〇—四七)、マクムレー(Me Murray)(一八四七)等あり、西より進めるものにサゴスキン(Sagoskin)(一八四二—四四)、バザルギーン(Basarginine)(一八六三)等あるがケンニコット(Kennicott)等の率ひたる電信隊(一八六五—六七)、レーモンドの率ひたる遠征隊(一八六九)は頗る内部の事情を明らかにせり、其の後ピナール(Pinard)(一八七二)、ミョイル(Miury)(一八七九)、ネルソン(Nelson)(一八七八—七

九)クラウゼ(Krause)(一八八二)シュワトカ(Schwatka)(一八八三)ストーニー(Stoney)(一八八三)ウールフ(Wolf)(一八八四—八五)アルレン(Allen)(一八八七)トマン(Tophan)(一八八八)マクヅラト(Me Grath)(一八八九)ホーム(A. W. Hay)(一八九〇)等の旅行ありしも就中地理學上稍著しきものはホワード(Howard)中尉がコック河よりポイントバローに達せしと一八八六)ターナー(J. H. Turner)が西經百四十一度の子午線に沿ひてボーキッパインより北極洋に出でしとにあり、ラッセル(J. E. Russell)はセントエリヤス山の海拔四千四百二十米突の地に達せるが(一八九〇—九一)數年を経てルドキレ(Ludwig)は絶頂を極めたり(一八九七)。クロンダイク(一八九六)并にノーム(Nome)岬の産金地の發見ありし頃本地の探檢は活潑と成り、エルドリヂ(G. H. Eldridge)はシムトナ(Shushitna)河の流域を調査してマッキンレー山を以て北アメリカの最高峯とせり、此の外スプル(J. E. Spurr)メンミンホーバ(W. G. Mendenhall)ターナー(T. G. Gardner)ブロンネン(R. G. Mc Connely)ヘンマンソン(A. Heilprin)ブレース(A. Bruce)エキンイ(De Windt)等の探査ありき。

シュラーヂン(Frank Charles Schrader)及ヒーターズ(J. W. Peters)は合衆國地質調査所の命に依りユーコンの上流地方に有益なる踏査を實行し(一九〇二)マドレン(A. O. Madden)はボーキッパイン河畔に化石學的探査を試み(一九〇四)ブルークス(Alfred H. Brooks)は大に地質調査を進捗せしめ、モース(Fremont Morse)は國境に於けるウヌク河を精査し、アラスカ—カナダ國境確定に就きては、チアマン(O. H. Titmann)キング(W. F. King)之に従事したり(一九〇五)。

一千九百六年合衆國政府はマックファーソン(Me Pherson)引率の下にアラスカの内部に達する通路を探檢せしめたり、一行はフェアバンクス(Fairbanks)よりグレン(Glen)を過ぎてユーコン河畔のランパート(Rampart)瀑に達し之よりコクタン(Koyukuk)の河口に達しノルトンムンズ(Nortonmund)に沿ひてカウンスルシチー(Council City)に赴けり。

一千九百七年九月クック(Frederic A. Cook)は北アメリカの最高峯マッキンレーに攀登して其の高は六千二百四十米突に達すと報告し、ギルドン(George B. Gordon)は一千九百五年のアラスカ探檢を繼續せり而して今回はマッキンレー